

調査報告書

松本市教育委員会

松本の念仏塔と念仏行事



調査報告書

松本市教育委員会

松本の念仏塔と念仏行事





本郷稲倉 高井観音堂



諏訪 唐沢阿弥陀寺磨崖名号

諏訪 貞松院德本大字名号軸



新村安塚 専称寺徳本名号塔



両島のお八日念仏



梓川下立田 公民館前の辻

序

松本市では、平成二十五年度から、歴史文化基本構想を策定するための文化財調査を行っています。文化庁が示した『歴史文化基本構想策定ハンドブック』は、「社会全体で文化財を適切に保存・活用するためには、住民に身近な行政を担う地方公共団体が、地域の歴史文化を踏まえて文化財を総合的に把握し、それらの保存・活用の方針として『歴史文化基本構想』を示す必要がある。」としています。本市では、この文化財を把握するための調査を、その後の保存・活用につなげるため、本市の誇る公民館活動の一環として住民主体で取り組んでいます。

この地区ごとの文化財調査において、多くの地区で石造文化財に目が向けられました。本市では、これまでに、江戸時代に建立された石造物を対象とした悉皆調査をほとんどの地区で実施していますが、十分にその分析が行われ、活用されてきたとは言えない現状にあります。文化財保護行政としても、石造文化財は相対的には劣化しづらいという認識に立ち、これまでは文化財に指定して保護の対象とすることには積極的ではありませんでした。しかし、これまでの摩耗や損傷という劣化のほかに、盗難や処分という新たな滅失の危険性が指摘され、その所在をきちんと把握する必要性が出てきました。

松本平を代表する石造文化財と言えば、道祖神が知られています。特に男女一対の像が刻まれた双体道祖神は、松本・安曇野の観光資源ともなっています。この道祖神のほかにも、市内各地の寺院境内などに多くの六地藏や三十三所観音が建立されていますが、道祖神のように住民自らが建立した石造物としては、庚申仲間によって建立された庚申塔が全市域に広く分布しています。庚申塔の文字を刻んだ碑のほかに、青面金剛が三猿や二鶏とともに刻まれた彫像も数多く目にします。この庚申塔については、第二次世界大戦前に行われた東筑摩郡の調査が、『農村信仰誌 庚申念佛篇』としてまとめられています。この表題には、「念佛」の語も付されていますが、「仏教的色彩の濃厚な」念佛のようなものは企画当初から副次的な扱いとされていたことが、その冒頭に記されています。

しかし、名号塔ないし念佛供養塔といった石造物は、念佛講中という仲間組織によって建立されていることからわかるとおり、庚申塔と同類の、宗教とは一線を画した民間信仰に属する石造物と考えられます。今回の調査では、名号塔と念佛供養塔の合計数は、庚申塔と青面金剛像の合計を上回っており、『農村信仰誌 庚申念佛篇』の編集者である竹内利美もその重要性に気づき、「庚申に試みたやうな考察を本郡の念佛信仰の上に加へる事は他の機会を俟つより外はない」と述べています。

今回、その機会を得て、本市の名号塔・念佛供養塔といった形あるものと、「八日念佛」などの念佛行事について考えてみることにしました。今回のアンケート調査では「講を中止した」というところも多く、遅きに失した感もありますが、江戸時代の終わりに念佛を広めた徳本上人の信濃巡錫から二百年の節目の年に、念佛講についてまとめる機会が得られたのも、何かの縁かもしれません。

平成二十八年三月二十日

松本市教育委員会 教育長 赤 羽 郁 夫

目次

巻頭図版	3
序	7
例言	9
第一章 調査に至る経緯	11
第一節 歴史文化基本構想策定のための文化財把握	11
第二節 「名号塔や念仏供養塔」と「念仏講・念仏会」の調査	11
第二章 調査の体制と方法	12
第一節 調査体制	12
第二節 調査方法	12
第三節 石造物の調査範囲	12
第四節 念仏講調査の記録	13
第一項 『農村信仰誌 庚申念佛篇』	13
第二項 自治体史誌	14
第三章 調査の成果	15
第一節 石造文化財による地区の概観	15
第二節 念仏塔の分布	16
第一項 地域ごとの分布状況	16
第二項 年代による分布	27
第三項 名号塔の揮毫者	29
第三節 念仏講・念仏会アンケート調査の結果	33
第四節 念仏塔と念仏行事	37
第一項 念仏講と百万遍	37
第二項 八日念仏	37
第三項 お十夜	38
第四項 釘念仏	38
第五項 その他の念仏行事	38
第四章 調査のまとめ	39
調査石造物一覧表	41
等順・徳本名号塔分布図	53
引用・参考文献一覧	55
松本市歴史文化基本構想 文化財調査組織一覧	56
跋	57

表紙写真

(上) 中山上和泉の名号塔等

(中) 鳥立荒井の念仏行事

(下) 里山辺北小松善光寺の名号塔等

例言

- 一 本書は、平成二十五年度から実施している松本市歴史文化基本構想文化財調査実行委員会が行った松本市歴史文化基本構想策定に先立つ文化財把握調査のなかから、念仏塔と念仏講・念仏会に関する調査結果をまとめたものである。
- 一 本市では、松本市歴史文化基本構想策定に先立つ文化財把握調査を、三十五の行政区（以下、地区という。）ごとに住民を主体とした調査組織を立ち上げて実施しており、松本市歴史文化基本構想策定における関連文化財群設定の参考にすることを視野に入れ、全市域に共通する事例として念仏塔と念仏講・念仏会を取りあげまとめた。
- 一 本書の刊行は、「文化遺産を活かした地域活性化事業」の「歴史文化基本構想策定事業」の国庫補助を受けて実施した。
- 一 原稿の執筆は木下守が、表・グラフ等文化財データの調整は百瀬将明が担当し、編集は百瀬が担当し、木下がこれを補助した。
- 一 掲載写真の撮影は木下・百瀬が行ったほか、カラー図版等一部を岩渕四季氏に依頼した。なお、一部転載した写真は、その旨クレジットを付した。
- 一 挿図に使用した拓影は、岡村庄造氏が採拓したものを使用した。
- 一 実行委員会及び事務局体制は次のとおりである。なお、地区の組織については、巻末の一覧を参照いただきたい。

松本市歴史文化基本構想文化財調査実行委員会

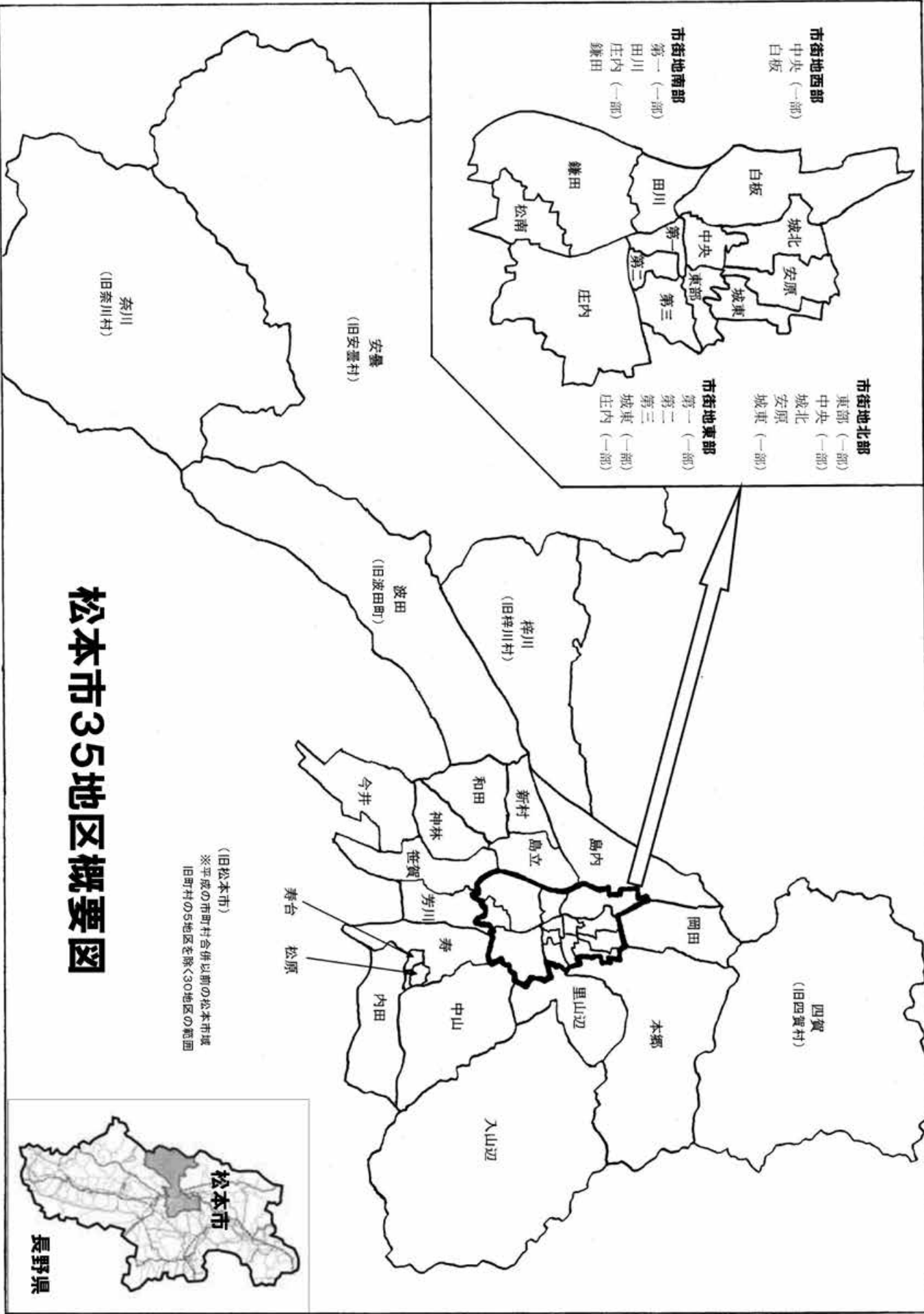
事務局 松本市教育委員会

委員長	浅輪守弘
副委員長	遠山重治
教育長	赤羽郁夫
教育部長	宮川雅行
課長	高橋伸光
課長	内城秀典
課長補佐	木下 守
主査	竹内祥泰
主任	百瀬将明
主事	八木瑞希
嘱託	青柳麻緒

生涯学習課・中央公民館 文化財課

文化財担当

委員長	浅輪守弘
副委員長	遠山重治
教育長	赤羽郁夫
教育部長	宮川雅行
課長	高橋伸光
課長	内城秀典
課長補佐	木下 守
主査	竹内祥泰
主任	百瀬将明
主事	八木瑞希
嘱託	青柳麻緒



第一章 調査に至る経緯

第一節 歴史文化基本構想策定のための文化財把握

松本市では、平成二十五年から、歴史文化基本構想の策定に着手している。この取組みは、文化芸術振興基本法(平成十三年法律第一四八号)第七条第一項の規定に基づき定められた「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第三次基本方針)」(平成二十三年二月八日閣議決定)において、重点的に取り組むべき施策として位置付けられている「歴史文化基本構想による周辺環境を含めた地域の文化財の総合的な保存・活用の推進」を受けて実施しているものである。

より具体的には、『歴史文化基本構想』策定ハンドブックの「社会全体で文化財を適切に保存・活用するためには、住民に身近な行政を担う地方公共団体が、地域の歴史文化を踏まえて文化財を総合的に把握し、それらの保存・活用の方針として『歴史文化基本構想』を示す必要がある。」という目的があり、これを受け「歴史文化を生かした地域づくりの基本方針」としての活用をも視野に入れ、構想策定の準備段階である文化財の把握に、地域住民が主体的に取り組むことに重点を置いている。

この調査のなかで、石造文化財に対する関心は総体的に高く、反対に年中行事等無形の文化財に対する関心は低かった。こうした結果について、松本市歴史文化基本構想文化財調査実行委員会(この組織については次章で詳述する。)において、町会等で実施する年中行事の補足調査を促したところ、ほとんどの地区から反応が見られた。

今回の調査に当たっては、文化財把握のための調査に従事する住民のみならず、「文化財を、指定の有無、有形・無形にかかわらず、幅広く把握する」ことを、事例を挙げて説明してきたのであるが、結果としては多くの住民がイメージする「文化財」の概念には、年中行事は含まれていないことが明らかになった。ここで事例としたのが、「道祖神」という石造文化財と「三九郎」という年中行事の関係である。同様の関係は、「庚申塔や青面金剛像」といった石造文化財と庚申講という仲間、名号塔や念仏供養塔と念仏講という仲間にもみられる。

第二節 「名号塔や念仏供養塔」と「念仏講・念仏会」の調査

こうした有形・無形の文化財の関係を理解し、これらの文化財からどのようなことが読み取れるのかを知るために、「名号塔や念仏供養塔」と「念仏講・念仏会」について、全地区で調査することとした。今回、念仏を対象としたのは、市域に見られる江戸時代の石造物のなかで、「名号塔および念仏供養塔」の合計数が「庚申塔および青面金剛像」のそれを上回ったこと、庚申塔と庚申講の関係に

ついては昭和十八年(一九四三)に『農村信仰誌 庚申念佛篇』(以下、『農村信仰誌』という。)として、東筑摩郡の様子がすでに考察されているからである。

『農村信仰誌』編集者の竹内利美は、この時の調査について「仏教的色彩の濃厚な」念仏塔は企画当初から副次的な扱いで資料数が限られているため、念仏講に関する考察は他の機会を待たなければならぬと断っている。当時調査した東筑摩郡内の石碑の総数は六、三九〇基で、数が多い順に示すと、馬頭観音が三、四四七基で群を抜き、以下、道祖神九八〇基、庚申塔七二五基、念仏供養塔四〇九基、二十三夜塔二三八基、廻国供養塔一七五基、蚕玉神一四一基、納経供養塔八十一基、その他一九四基となっている。ここでは、庚申塔の七二五基に対し、念仏供養塔四〇九基となっているが、今回の松本市の調査では、青面金剛像を含む庚申塔が四三八基であるのに対し、名号塔を含む念仏供養塔は五二七基と庚申塔を上回っているのである。おそらく、編集者の竹内も、念仏供養塔の総数が庚申塔を上回ることを承知していたのであろう。

この時の調査が、「仏教的色彩の濃厚な」寺院境内を対象としていなかったことは、今回の調査で最も多かった地藏菩薩が項目として立てられていないことから明らかである(15ページ表1参照)。庚申塔に対する二十三夜塔の比率は、昭和十八年の調査が三二・八%であるのに対し今回の松本市の調査(月待塔)では二七・八%と大きな傾向の違いはない。これに対し、庚申塔に対する念仏供養塔の比率は、昭和十八年の五六・四%に対し、今回は二二・三%と大きな傾向の違いを見せており、戦前の調査では「南無阿弥陀仏」の六字名号塔を調査の対象としていなかった調査員が多かったであろうことを物語っている。

これらのコミュニティによる石造物建立に関する調査としては、道祖神に関する調査が全国各地で行われている。安曇野市と並び双体道祖神が多いといわれる松本市においても、旧松本市と旧梓川村が調査報告書を刊行している。庚申塔についても、講組織と共に全国で調査が行われており、自治体レベルでの報告書刊行も増えてきている。松本市においては特別に調査を実施していないが、『長野県史』や平成の合併以前の旧自治体史誌にはそれぞれ報告がある。

一方で、道祖神や庚申塔と同程度の数が建立されている念仏塔に関しては、一部の自治体が刊行している民俗誌を除いては、調査の報告が見られない。しかし、念仏供養塔は、集落としてのムラ(自然村)または任意に構成された講中によって建立されたもので、庚申塔や二十三夜塔と同様に、当時の共同体のあり方を示す貴重な資料と考えられる。

本調査では、江戸時代の共同体のあり方を示す貴重な資料である「名号塔や念仏供養塔」を、「念仏講・念仏会」という仲間および行事と合わせて考察し、併せて有形・無形の文化財を総合的に把握することの意義を示すことを目的とした。

第二章 調査の体制と方法

第一節 調査体制

『松本の念仏塔と念仏行事』調査報告書』は、松本市歴史文化基本構想策定の準備段階として、三十五の地区ごとに実施した文化財把握のための調査の結果の一部である。

長野県は公民館が多い県として知られ、その数は全国二位の山形県の二倍以上にあたる一、二、三六館(平成二十五年度)である。このうち、松本市には、市が設置する全市を対象とした中央公民館と二十五の地区ごとに設置する公民館が三十五館、計三十六館が含まれている。さらに、これらの公民館と連携する、町会が独自に設置する公民館がある。今回の松本市歴史文化基本構想策定のための文化財把握調査は、この地区公民館を拠点に、連携する町会、町内公民館および地区の歴史研究会等で構成する各地区の組織が実施した。

調査は、地区ごとに、地区公民館を事務局として体制を組み実施した。各地区の調査体制については、地区の実情を優先して編成することとし、全地区で統一基準を設けることは行っていない。このため、既存の地区公民館の委員会組織で対応した地区、歴史研究団体に一任する形をとった地区もあるが、多くの地区では町内公民館長や町会長または任意の推薦者を含め、町会単位で数名の委員を選出し、文化財調査のための組織を新たに設置して取り組んだ。各地区の組織については巻末の文化財調査組織一覧を参照いただきたい。

各地区の組織には、文化財課文化財担当の職員を地区担当として配置し、他の地区の進捗状況を伝える等、調査の進捗状況を管理した。

また、地区組織の連合体として、松本市歴史文化基本構想文化財調査実行委員会を組織し、年数回の実行委員会を行い調査内容の水準を合わせるよう努めた。

第二節 調査方法

地区ごとの文化財の把握調査は以下の手順によった。

①指定文化財及び各地区共通の過去の調査データを配布し、その存否状況を確認することで、地区内の文化財把握に努めた。なお、各地区共通の過去の調査としては、石造文化財調査(旧安曇村を除く全地区、旧松本市は近世のみ)、未指定文化財総合調査(旧松本市)があり、地区ごとに把握する過去の調査データは各地区で補った。

②過去の調査から今日までに失われたデータを削除し、過去の調査に挙げられていない物件を新たに抽出し、①のデータに加えた。このとき、石造物の分析により、地区の特徴を把握する試みを実施するため、安曇地区では近世の

石造物調査を新たに実施した。

次に、実行委員会において、各地区の文化財調査の傾向や不足している部分を指摘し、補足調査を促し、一定の水準を維持するよう努めた。全体として年中行事等の抽出が不十分なため、補足調査を実施するよう促した。

さらに、町会や念仏講による念仏行事の実施状況について、町会単位でアンケート調査を実施し、特徴的な結果が得られたものについて、文化財課職員が詳細調査を行った。

第三節 石造物の調査範囲

はじめに、本調査において対象とした石造物の範囲について記しておく。まず、対象とする石造物の建立年代についてであるが、旧松本市エリアにおいて、昭和四十七年度から五十三年度にかけて実施した石造物悉皆調査をベースとしたため、原則として江戸時代以前に建立されたものに対象を絞った。なお、過去の調査に記録された紀年銘の無い石造物は採用することとした。

「南無阿弥陀仏」と六字名号を刻んだ下に三猿を彫った石造物がある。これを庚申塔とするか、念仏塔とするかは意見が分かれるところである。また、表には「南無阿弥陀仏」の名号を刻んでいるが、裏には建立者と思われる「庚申講中」の文字があるものなどもある。あるいは、「南無阿弥陀仏」の文字の両脇に法号(戒名)を刻んだものも見えるが、こうした石造物は墓碑とみるべきかもしれない。講組織の面からは、「庚申念仏講」といつて同じ仲間が庚申にも念仏にも集まる例が見られた。この場合、庚申には当主が、念仏には女性が参集するというように、参集者を区別している例もある。十五世紀後半から成立をみる「庚申縁起」と呼ばれる由来書の類には、夜の戌・亥の刻には文殊菩薩と薬師如来と大日如来、子・丑の刻には青面金剛と釈迦如来、寅・卯の刻には観音菩薩と阿弥陀如来というように、時間帯ごとに礼拝対象となる仏様を示しているものもあるという。この考えに従えば、「南無阿弥陀仏」と刻んだ庚申塔があっても不思議ではない。

戒名が刻まれた名号塔についても、どちらと見るのか判断が難しい。浄土宗や浄土真宗の墓碑は南無阿弥陀仏と刻まれるのがむしろ当たり前である。また、芳川村井の墓地の徳本上人が揮毫した名号塔に戒名が刻まれている例、今井の墓地の祐天や播隆が揮毫した名号塔に戒名が刻まれた例もある。

本調査では、建立年代の対象を江戸時代以前とし、また、多くの地区で墓地を調査対象としていないため、表面と考えられる部分に「南無阿弥陀仏」と刻まれたものは全て名号塔として扱った。また、念仏供養塔については「念仏供養塔」「百万遍供養塔」等に限定し、光明真言供養塔や題目塔は対象から外した。さらに、念仏講中の建立した前記以外の石造物は、「念仏講中」等と明示されている

もののみを抽出し、ただ「講中」とのみあるものは除外した。

第四節 念仏講調査の記録

第一項 『農村信仰誌 庚申念佛篇』

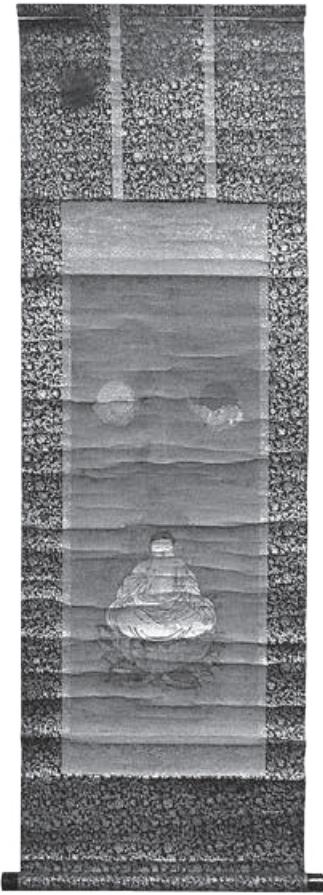
松本平における念仏供養塔の調査は、前章で触れた『農村信仰誌』が嚆矢である。信濃教育会東筑摩部会が昭和五年（一九三〇）から六年にかけて調査を行い、同十四年に祭祀集団など補足の調査を実施し、同十八年に柳田國男の序文を得て刊行された。内容は庚申信仰が中心で、第二編の「念佛」と第三編の「廻國順禮と納経供養」が不十分な内容であることは、編集者の竹内利美も承知しており、緒言にその旨の記載がある。しかし、第二編「念佛」の第三章「塔の祭祀と念佛講」にまとめられた内容は、今となっては極めて貴重な情報である。

松本市に属する報告は本郷地区二件と入山辺、中山、里山辺地区各一件の都合五件であるが、本郷大村雪中を除く四件は今も講として続いている。まずは、これらの講のあり方を、八十数年前と比較してみたい。

(1) 本郷村大村雪中

『農村信仰誌』の要約 部落の全十六戸の女性が構成するトーヤ製の月念仏で、盆（八月十四日）と春秋の彼岸中日以外は、トーヤの都合がいい日に行った。夕食後参集し、掛軸（阿弥陀仏の画像）をかけ念仏を称え、後は茶菓で歓談し、夜更けに解散する。講以外には、盆に新盆の家で念仏をするほか、不幸の翌日にも念仏を行った。寛政七年（一七九五）の名号塔がある。二月八日には、公会所（以前は区長宅）で百万遍の大数珠を回して疫病除けの念仏を行ったが、これは男衆が参加した。十一月には十夜念仏を行ったが、このトーヤは講とは別に廻り番で行った。

現在の様子 平成二十一年九月二十三日を最後に講を取りやめた。道具（阿弥陀



大村雪中の阿弥陀仏の軸

仏の軸、伏せ鉦等）は玄向寺に預けられている。

(2) 本郷村三才山小日向

『農村信仰誌』の要約 部落全戸一組で女性を主として構成され、春秋彼岸の日に薬師堂に集まって念仏をする。まず、堂で百万遍の大数珠を回しながら念仏し、その後村内各戸を回って念仏を行い、各戸ではお茶をだす。終了後は一品ずつ持ち寄って小酒宴を開き、僧を招いて説教を聞くこともあった。古い講は二十年前（明治末年）に廃絶し、七、八年前（大正末年）に復活したもの。

現在の様子 初午の日に、常会三役が薬師堂に集まり念仏を行っている。

(3) 入山辺村大仏小仏

『農村信仰誌』の要約 部落全戸一組で女性によって組織され、二月十五日の涅槃会、春秋彼岸中日、四月八日の仏生日、十月七日の薬師の日、十月十四日の善光寺様の日の年六回、トーヤの家で善光寺仏の掛軸をかけ、香を焚いて念仏を称える。各戸から茶碗一杯ずつ米を集め「おもり」（団子）を作り投げる。その後、茶菓の饗応となる。掛軸以外に鉦と木魚がある。山ノ神、一の海にも同様の講がある。

現在の様子 大仏・小仏・宮海道の人たちで、春・秋の彼岸に掛軸を掛けて念仏を行っている。一の海では、市川同姓の人たちが、春・秋の彼岸に近い日に念仏を行っている。

(4) 中山村和泉

『農村信仰誌』の要約 部落の婦人連（十八、九人）によって組織され、春秋彼岸中日、盆の十三日、十月十夜に講祭祀をする。「ぜんこうじさま」と呼ぶ善光寺念仏の信仰団体である。各戸順番にトーヤを務め、名号軸に香花を供えて念仏称名し、その後茶菓の饗応がある。盆は、新盆の家をトーヤとする。講中に不幸があると、翌日喪家に集まって念仏をする。掛軸以外の祭具として、鉦、金襴の打敷、菓子器がある。十月十夜には、米茶碗一合ずつ集めて団子を作り、念仏の後集まった子供に投げ与える。埴原にも同様の善光寺念仏講が二組ある。

現在の様子 中和泉町会の1組と2組で念仏講を組織している。三月の彼岸前後に女性が公民館に集まり、名号軸を掛けて念仏をする。かつてはトーヤで行っていたが、今のトーヤの役割は名号軸などの道具を管理することである。

(5) 里山辺村大嵩崎

『農村信仰誌』の要約 全部落の婦人連をもって組織し、毎月十四日に順回りで

務めるトーヤの家に集まり念仏を称え、後に茶話会をなす。善光寺仏の像と南無阿弥陀仏の掛軸をかけて礼拝する。貞享騒動に山辺村からは一人も犠牲者が出なかったため、その冥福を祈るために始まったと言われている。

現在の様子 現在八戸で三カ月ごとに「加助様尊像」軸、伏せ鉦、木魚(新しい)、南無阿弥陀仏の軸(等順名号軸)を回している。また、旧暦の二月八日ごろ(二月末から三月初め)に、婦人が集まり公民館で八日念仏を行う。昭和の終わりまでは、婦人が月念仏を行っていた。トーヤに集まり、念仏を称えてお茶を飲んだ。昭和三十一年(一九五六)からは、林の公民館で、林町会と一緒に勤労感謝の日に供養祭を行っている(現在、大高崎は林町会の一部)。公民館に大数珠がある。



大高崎の「加助様尊像」軸

この五つの昭和初期の事例に共通していることは、①トーヤ制で、②構成員は女性、③念仏の後に茶話会ないしは小酒宴がもたれるという三点で、いずれの地にも立派な名号塔または念仏供養塔が建立されている。講の開催頻度は、大村雪中と大高崎は月念仏で毎月、大仏・小仏と和泉は春秋彼岸の中日など年四から六回、二十年前に廃絶した講を復活したという三才山小日向は春秋彼岸の二回のみである。現在はどうかというと、続けられているところでもトーヤ制は廃され会場は公民館等に変更されており、開催頻度も年一回ないし二回に減っている。

注意しなければならないのは、大村雪中で年中行事としての「八日念仏」と「十夜念仏」が講とは別に行われていたということである。さらに、八日念仏は男性が、お十夜は女性が参加したとみられるが、講とは別の回り順のトーヤで行われていた。このことについては次章で触れる。

大高崎の現在の聞き取りでは、講の道具を三カ月ごとに講員の家を回しているが、これとは別に、大高崎全体で旧暦の二月八日に近い日を選んで八日念仏が行

われている。そして、百万遍の大数珠も、念仏講の道具とは別に公民館に保管されている。これらのことから、町会等で行われる念仏行事には、念仏講が行うものとムラ全体の年中行事として行われる念仏の区別があったことがうかがえる。

第二項 自治体史誌

(1) 『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』

戦後初めて念仏講の調査が行われたのは『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』(以下、『郡誌』という)の編纂における調査である。『郡誌』は、昭和二十五年に編纂委員会が発足し、調査に着手している。念仏講を扱う「民俗編」は、昭和四十年に刊行された最終巻、第三巻現代下に掲載されている。念仏講は、庚申講などと共に「仲間の祭祀講」として扱われているが、その内容は、先述の『農村信仰誌』の内容の整理が中心で、新たな調査記録はほとんど見られない。

(2) 『長野県史』

掲載されているのは、平成元年に刊行された「第三巻(二)中信地方 仕事と行事」である。『長野県史』では、代参講と庚申講にページが割かれ、念仏講は「代参しない講」というくりでわずかな記載があるに過ぎない。松本市に関する聞き取り記録は、今井下新田と芳川平田の二件のみである。参考までに全文を引用する。

○宝輪寺の地藏堂で、主として女の人が集まって念仏講をしている。(下新田)
○部落全戸が参加して、念称寺の供養塔で念仏講をしている。春の彼岸に集まって僧を頼み念仏をあげ、宴を催している。(平田)

今回のアンケート調査では、下新田から回答が出ている。下新田は市の重要無形民俗文化財に指定している「今井下新田の八日念仏と足半」の行事を行っている町会である。アンケートでは、この八日念仏とは別に、春秋彼岸に高齢者クラブによって念仏が行われていることが報告されている。

(3) 『松本市史』

平成元年度から順次刊行した『松本市史』には、念仏講に関する記載はない。年中行事の節に、二月八日の女性や子どもによる念仏の記述がわずかに見えるだけである。しかし、市史編纂のための調査の報告書にまで目を向けると、中山和泉に月念仏の記録が見える。八日念仏やお十夜の念仏は、入山辺、神林、中山の各報告書にも記載されている。『松本市史』の編纂にあたっては、念仏講という意識は希薄であり、それは『長野県史』の編纂方針を受け継いでいるようである。

第三章 調査の成果

第一節 石造文化財による地区の概観

石造物の調査は、前章でも触れたように、旧松本市エリアにおいて、昭和四十七年度から五十三年度にかけて実施した石造物悉皆調査をベースとしているため、江戸時代以前のものに絞った。このため、四賀及び波田地区の数値は、旧四賀村と旧波田町が行った石造物調査の結果から、明治以降に建立されたものを除く形で調整した。

こうして、今回の文化財調査において把握した松本市内の石造文化財は、一万件を超えた。その内訳を、地区ごとに種類別に示したのが表1である。この分類では、立体像と文字碑を区別するのではなく、その性格によって石造物を区分している。その結果、最も多く見られた石造物の種類は地蔵菩薩像で、一、八〇三基を確認した(六地蔵は六件)。この傾向は地区ごとに見ても、多くの地区に共通している。地蔵菩薩像は童子・童女の墓碑として建立されることが多いが、旧松本市の昭和の石造物調査で墓地にまで調査が及んだ地区は限られている。なお、今回の調査では、墓地の調査は了解の得られた範囲にとどめているので、この数値は地区間の統一が図られていない。

続いて多いのは、西国三十三所等の札所を写した石造物の札所観音であるが、これは一寺院で百件あるいは八十八件を数える例もあるので、特徴を示しているとはいえないが、当時の地区の経済力を知る手がかりとなる。観音としては、むしろその次に多い馬頭観音の像及び文字碑が特徴を示しており、善光寺街道や江戸道が通る四賀地区、野麦街道が通る波田地区、武石峠を越えて東信と結ばれる入山辺地区では最も多い種類である。馬頭観音や札所観音を除いた聖観音や如意輪観音が最も多い梓川地区を除けば、各地区で最も多い種類は、ここに示した市域全体の上位三種類のいずれかとなっており、似た傾向を示していることがわかる。

このようななかで、江戸時代に建立された石造物が一基もない地区が、三十五地区のうち三地区ある。新しく開発された寿台地区と松原地区では、開発時に地区外に移転された石造物があることがわかった。松南地区は、戦時下に軍需産業が誘致された地区であり、その際に失われたものが多いと考えられ、石造物から地区の特徴を見出すすべは失われてしまった。

道祖神、庚申塔、念仏塔の三種は、似たような合計の数値を示している。道祖神が「部落」などと称するムラ単位で建立されていることはよく知られているところである。総数は五〇五基で、うち二一四基がいわゆる双体道祖神である。一〇七基という群を抜く数値を示す四賀地区では、ムラ単位に二基あるいは三基

表1 地区別石造物分類表

No.	地区	道祖神	青面金剛 庚申塔	念仏塔 名号塔	地蔵菩薩	馬頭観音	札所観音	その他の 観音	巡拜塔 廻国塔	月待塔	その他	合計	
1	島内	30	17	37	111	44	88	29	15	10	84	465	
2	島立	13	9	12	63	22	0	33	3	3	59	217	
3	新村	14	6	23	12	9	101	5	3	2	51	226	
4	和田	12	12	16	50	10	166	6	7	2	58	339	
5	神林	4	11	10	47	11	0	17	2	1	35	138	
6	今井	16	21	18	22	40	0	13	10	1	98	239	
7	笹賀	12	14	16	116	37	82	27	11	2	169	486	
8	芳川	2	5	12	50	14	34	7	3	0	129	256	
9	寿	15	15	17	53	29	0	9	9	7	111	265	
10	寿台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
11	松原	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
12	内田	23	15	11	30	31	0	8	4	7	141	270	
13	中山	26	12	22	44	46	0	13	4	1	127	295	
14	里山辺	17	11	28	126	43	0	53	6	4	174	462	
15	入山辺	25	20	18	25	88	0	14	4	6	48	248	
16	岡田	17	16	17	28	41	0	10	3	6	67	205	
17	本郷	23	25	31	67	51	149	11	7	4	118	486	
18	市街地	第一	0	2	7	11	0	0	2	0	12	34	
19		第二	0	2	0	59	1	26	11	0	0	37	136
20		第三	2	1	6	5	2	0	6	0	0	41	63
21		中央	0	0	0	1	3	0	3	0	0	19	26
22		白板	3	5	8	117	3	0	27	2	1	79	245
23		城北	2	3	4	14	0	0	0	3	0	11	37
24		安原	1	3	2	33	0	0	2	1	0	12	54
25		東部	2	5	13	121	2	33	12	2	0	17	207
26		城東	2	4	5	22	1	17	9	0	0	28	88
27		田川	5	7	4	18	3	0	6	1	1	20	65
28		鎌田	6	11	17	63	18	0	31	2	2	39	189
29		松南	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
30		庄内	10	9	18	90	4	0	31	3	0	48	213
31	四賀*	107	103	79	125	285	169	74	38	22	1,001	2,003	
32	安曇	6	6	9	39	28	197	13	6	4	43	351	
33	奈川	8	12	4	65	28	99	6	10	8	99	339	
34	梓川	85	34	31	119	25	33	183	23	18	175	726	
35	波田*	17	22	32	57	247	26	11	35	9	289	745	
	合計	505	438	527	1,803	1,166	1,220	682	217	121	3,439	10,118	

* 四賀及び波田地区の件数は明治以降の石造物を除く。

の道祖神が建立されている。庚申塔は、庚申講によって建立されたもので、総数四三八基のうち二〇八基が青面金剛像である。道祖神の建立者と同様にムラを基準とするが、松本地方では庚申講は葬式仲間として機能しているため、大きなムラでは二分するなどして、葬儀に必要な戸数に調整しているようである。念仏塔も建立者はムラである場合が多いが、念仏講による建立がそれを上回る。総数は五二七基を数えるが、念仏講が建立する石造物には地藏菩薩や如意輪観音等の彫像も見られ、これらを合わせるとその数は六一六基となる。また、文化・文政期になると、これら三種類に加え、二十三夜塔をはじめとする月待塔の建立が増え、コミュニティ活動が活発化してくる様子が見えるが、その総数は一一一基で、他の三種の四分の一程度にとどまっている。

第二節 念仏塔の分布

念仏塔の建立年代は、全体的にみると庚申塔よりも遅く、江戸時代後期にピークを迎える。際立って古い寛永十七年(一六四〇)の摂取院跡の名号塔は墓碑と見るべきで、念仏講による建立は、貞享・元禄年間が始まるとみられる。また、ピーク時に当たる江戸時代後期に、徳本上人や善光寺大勧進の等順といった特定の念仏聖の揮毫になる名号塔が多数みられることが特徴である。なお、揮毫者については別項で触れる。

本調査で念仏塔として扱った石造物は、「南無阿弥陀仏」と刻まれた名号塔と「念仏供養塔」「百万遍供養塔」等と刻まれた念仏供養塔の大きく二つに分けられる。その内訳は、念仏講の本尊となる名号塔が四二五基と大半を占め、記念碑的な念仏供養塔は一〇二基である。また、地区別にみると四賀地区の七十九基を筆頭に、島内地区が三十七基、波田地区が三十二基、本郷・梓川両地区が三十一基と続いている。このほかに、念仏講中が建立した地藏あるいは観音の菩薩像がある。

これらの石造物の建立年代に注目してみる。紀年銘のある名号塔の総数は三三一基で、十年間ごとの建立数は一六七〇年代に十一基、続く一六八〇年代に十七基と二桁となり、延宝から元禄年間にかけて小さなピークが見られる。その後一七〇〇年代の半ばの享保から明和年間再び小さなピークが見られ、一七九〇年代の寛政期に五十四基と最大の数を記録する。この時期は、等順の活躍期に当たっている。さらに、一八一〇年代、二〇年代の文化・文政期に四十基を超える建立がみられるが、これが徳本及び播隆の活躍期に当たっている。

供養塔建立のピークは、おおむね等順の活躍期と重なっており、講中碑の建立は享保から明和年間にかけての名号塔建立の小ピークと重なっている。このことについても後で詳しく検討したい。

以下、地区ごとに名号塔の建立と念仏講の実施の状況を見ていく。

第一項 地域ごとの分布状況

島内地区 念仏塔総数は三十七基と多く、その内訳は名号塔が二十三基、念仏供養塔が十四基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が七基ある。町会別にみると、高松、南中、青島に多く、その理由として、高松は高松寺があり、南中と青島は阿弥陀堂があったことがあげられる。

揮毫者別にみると、等順の名号塔が北中大日堂と新橋観音堂跡に、徳本の名号塔が高松寺境内と新橋観音堂跡にある。小宮の建立年不明の「善光本師如来」の碑も等順の関係であろうか。新橋観音堂跡にある等順と徳本の名号塔には、「文政四辛巳年建之／青島村」という共通する銘が確認できる。このほか、新橋と青島の川船家墓地に高松寺十世教誉の名号塔がある。「南」の文字が丸くデザインされた独特の六字名号で、宝暦九年(一七五九)および十年の建立である。

年代別にみると、最も古いものは高松寺境内の名号塔で、延宝二年(一六七四)の紀年銘がある。「高松寺三世直信」と建立者「単誉」の名がみえる。同じく高松寺境内に延宝六年銘の寒念仏の供養塔がある。また、青島阿弥陀堂には、これらに続くものとして、元禄十年(一六九七)に立てられた庚申念仏供養塔がある。新橋観音堂跡には延享四年(一七四七)銘の名号塔があり「當庵初興應譽秀感比丘」の銘文から、新橋観音堂がこの頃創始されたことがわかる。南中公民館前には、明和から天明年間にかけて犬飼定兵衛秋道という個人が建立した供養塔・巡拝塔が計四基ある。

島内地区の特徴は、講中による念仏塔の建立が多いことである。四十四基の石造物のうち、二十基に講中による建立者銘(うち一基は庚申講中)があり、文化十五年(一八一八)銘の高松寺境内の徳本名号塔、文政四年(一八二二)銘の新橋観音堂跡の等順及び徳本名号塔が高松村中、青島村と見える以外は、いずれも念仏



新橋川船家墓地の名号塔



青島阿弥陀堂の如意輪観音像

講中による建立である。最も古いものは、先に見た元禄十年の紀年銘のある青島阿弥陀堂の庚申念仏供養塔で、「念仏講同行三十七人」とある。

青島阿弥陀堂では、播隆上人開基の槍ヶ岳念仏講が今も毎月行われている。

島立地区 念仏塔の総数は十二基で、その内訳は名号塔が十一基、供養塔が一基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が二基ある。

町会別にみると、堀米、中村、三の宮を除く各町会に見られ、町区の栄安寺に等順と徳本の名号塔が、北栗の神明社の辻にも徳本を含む二基が並んでいる。

北栗町会には徳本の名号軸も伝わっている。これは平成二十五年の正月に、神明常会で発見されたもので、現在は大数珠や打敷などともに「北栗林村／念仏講佛具入箱／北村念仏講」と墨書された木箱ごと、西生寺に預けられている。この講がいつまで行われていたのかは定かではないが、新村の専称寺境内に「元禄八乙亥歳初秋十五日／北栗林念仏講」と刻まれた石灯籠が寄進されていることから、徳本の松本巡錫より一〇年も前から講が営まれていたことがわかる。

荒井町会の観音堂には徳本名号塔があり、八日念仏が行われている。二月八日に近い土・日曜日に、小学校の一年から五年生までの子どもが数班に分かれ、町内およそ三百戸を分担して回って念仏をする。玄関先で鉦を叩きながら大数珠を回し、「ナンマイダー、ナンマイダー」と念仏を称える。江戸時代の終わりに伝染病がはやった時、高僧が荒井を訪れ、大数珠を与え念仏を称えたところ、病が治ったという。町区と堀米新田でも、小学生による八日念仏が行われている。



北栗北村念仏講の徳本名号軸

新村地区 念仏塔総数は二十三件で、その内訳は名号塔が二十一基、念仏供養塔が二基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が二基ある。

町会別にみると、安塚に専称寺の徳本名号塔をはじめ七基が集中し、地区内の堂跡に多くの名号塔が建つ。新村地区には、徳本名号塔が五基、その弟子徳住の

名号塔が二基あり、これは徳本が専称寺で化益(説教)を行っていたことが影響しているであろう。

東新の大吉堂にある元禄六年の念仏供養塔が最も古く、享保十五年(一七三〇)の名号塔、北新西の清浄院跡の享保十九年の巡拝塔を兼ねた祐天の名号塔、安塚薬師堂の寛保二年(一七四二)の名号塔、専称寺境内の宝暦三年(一七五三)の名号塔が、江戸時代中期の建立である(北栗北村念仏講の寄進した石灯籠を除く)。

北新中の信入院の境内には、徳本と徳住の名号塔が向かい合って立っている。ここは、専称寺が寛延三年(一七五〇)に現在の安塚の地に移転するまであった旧跡で、その移転後に専称寺末の隠居寺として置かれたのが信入院である。弘化二年(一八四五)に描かれた大きな涅槃図があり、十月十日にお十夜が行われている。安塚でも平成二十六年からお十夜が復活している。



北新西清浄院跡の祐天名号塔



安塚薬師堂の女人講建立の名号塔

和田地区 念仏塔の総数は十六基で、その内訳は名号塔が十五基、供養塔が一基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が四基ある。

新興の西原を除く各町会の寺院や堂の境内またはその跡地に徳本名号塔がある。



殿の萬年寺の徳本名号塔



境の西善寺の常念仏供養塔

その数は十基にのぼり、市内全三十五地区のなかで最多である。和田は、幕末には幕府直轄領だったため、松本藩の廃仏毀釈の影響を受けず、多くの寺堂が残っている。『農村信仰誌』にも徳本名号塔十基のうち観音寺のものを除く九基が掲載されており、古くから住民に浸透していたことがわかる。また、十基のうち四基に徳本が訪れた「文化十三丙子」の紀年があり(西善寺の「文化十二年丙子」を含む)巡錫を意識して建立された名号塔が多い。

境の西善寺境内には、貞享四年(一六八七)十月の常念仏一千日回向の供養塔がある。西善寺は清水(後に城下に組入れ)にあった天台宗弾誓派の念来寺の組寺で、貞享二年の正月に西善寺で常念仏が開闢されたことがわかる。

神林地区 念仏塔の総数は十基で、その内訳は名号塔が八基、供養塔が二基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が二基ある。

町会別にみると、寺家と南荒井には建立がなく、川西に四基が集まる。揮毫者別では、等順名号塔が川西に一基、徳本名号塔が川西・川東・下神・梶海渡に一基ずつ見られる。このうち、梶海渡公民館前にあるものには、徳本巡錫の前年に当たる「文化十二乙亥年/六月日」の紀年銘がある。六月という季節が一致していることから、後年の誤刻の可能性もある。町神公民館の敷地内にある延命地藏と十王を祀る地藏堂の前に「佛磨」の銘が刻まれた独特の書体の名号塔がある。弘化四年(一八四七)の紀年銘があり、地区の調査では幕末から明治にかけて武田佛磨なる僧の存在を確認しているが、墨跡の特定には至っていない。

川西の道端にある、「元禄十丁丑年三月吉日」の紀年銘がある線刻の如意輪観音像には「念仏講女二十一人」と刻まれており、神林地区でも古くから念仏講が結成されていたことがわかる。



町神の佛磨名号塔



川西の線刻如意輪観音像

今井地区

念仏塔の総数は十八基で、その内訳は名号塔が十七基、供養塔が一

基である。ほかに、「念仏講中」と刻まれた如意輪観音像が一基ある。

町会別にみると、鎖川左岸の入会地と右岸の新興町(会等)一部を除くほとんどの町会に念仏塔が散在しており、正覚院のある東耕地には四基ある。

揮毫者別にみると、徳本名号塔が五基あり、堂村の徳本名号塔は二八五センチメートルと市内一の高さを誇る。等順の名号塔は見えないが、善光寺念仏講と刻まれた名号塔が上新田と下新田にあり、等順の念仏に影響を受けていることがわかる。また、中沢公民館と東耕地の古田家墓地に祐天名号塔、西耕地の櫻井家墓地に播隆名号塔がある。

祐天は、江戸時代前期に活躍した浄土宗の念仏聖で、増上寺三十六世として大僧正にまで昇った高僧である。古田家墓地の名号塔の裏には「寛文二壬寅年八月二日/重四郎建之」とあるが、寛文二年(一六六二)には祐天は修行の身であるため、この名号塔は後年に建て替えられた際に祐天の名号を刻んだものである。中沢の名号塔には紀年銘はなく、かつては堂村の十王堂前にあったものという。一方、天保七年(一八三六)の紀年銘のある櫻井家墓地の播隆の名号塔には「達蓮社高誉明阿惠性見岩沙弥靈塔」とあるが、『開山晁播隆大和上行状略記』に弟子「見岩」の名が見える。祐天、徳本、播隆はいずれも浄土宗の高僧であり、今井にのみ三者の名号塔が存在している。このうち、徳本が今井に立ち寄ったことは『徳本行者信州・上州応請撰化日鑑』(以下、『応請撰化日鑑』という。)に見え、播隆の巡錫も安曇野市三郷の務台家文書に記録が残っている。

年代別にみると、松本市内最古の寛永十一年(一六三四)の紀年銘のある名号塔が、中村の塩原家墓地にあることが、昭和四十七年(一九七二)の今井史談会の調査で報告されているが、現在は墓地が荒れ確認できない。



中沢公民館の祐天名号塔



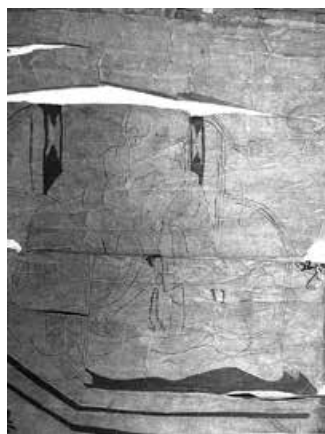
西耕地の櫻井家墓地の播隆名号塔

笹賀地区 念仏塔の総数は十六基で、その内訳は名号塔が十三基、供養塔が三基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が二基ある。

町会別にみると、念仏塔を持たない町会もあるが、江戸時代のムラ単位ですべてに念仏塔があり、小俣と神戸新田の観音堂に集中している。

揮毫者別では、徳本名号塔が巡錫時に立ち寄った中二子の慶林寺をはじめ三基ある。二子村では、徳本が信濃に入って間もない四月十三日に、四十二人もの村人が大挙して長明寺を訪れ、講中名号を拝受したことが『応請撰化日鑑』に見える。慶林寺境内の徳本名号塔は、この時の講中名号を元に建立されたものと思われるが、明治十三年に大火にあつていたので再建の可能性もある。また、巾下の小俣観音堂には、城下町の天台宗寺院念来寺八世の相阿の名号塔がある。

下小俣町会では八日念仏が、神戸新田町会の講中では春彼岸の念仏会が、いずれも女性を中心に行われている。下小俣町会では、二月八日に等順の名号軸をかけて大数珠を繰り、太鼓と鉦で音頭を取り念仏を称えている。現在は使わなくなった古い軸類が保管されており、そのなかに曲糸(僧侶の使う椅子)に結跏趺坐した僧の肖像の脇に「徳本(花押)」と墨書された頂相画がある。真贋という点では課題が残るが、当地方において徳本の念仏がいかに支持されてきたかを物語る貴重な資料と言えよう。



下小俣の徳本頂相画



巾下観音堂の相阿名号塔

芳川地区 念仏塔の総数は十二基で、その内訳は名号塔が九基、供養塔が三基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が二基ある。

町会別にみると、新興の町会を除く江戸時代の四村を継承する町会に名号塔が見られる。

揮毫者別では、野溝の松岳寺山門前にあるノミで削り取られたものを含め、徳本名号塔が三基ある。小屋の泉龍寺の山門横にある名号塔も、表面の名号の左右に刻まれた文字や、裏面の紀年銘がピシャンでつぶされている。また、村井の観

音堂の調査では、大数珠と伏せ鉦、「念佛百萬遍」と書かれた軸が見つかった。野溝の松岳寺山門の前には、祐天寺六世の祐全の名号塔がある。「東都祐天寺開山本地身地藏尊舊蹟／南無阿弥陀佛 祐全(花押)／明顯山祐天寺六世」と刻まれており、祐天の本地身地藏が安置されていた本町五丁目の光明院跡から遷された名号塔に違いない。



泉龍寺の徳本名号塔



松岳寺の祐全名号塔

寿地区 念仏塔の総数は十七基で、その内訳は名号塔が十五基、供養塔が二基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が四基ある。

町会別にみると、新興町会を除く各町会に散在している。赤木に六基が集中しており、その多くは堂山の阿弥陀堂(桃水寺跡)にある。堂山の念仏塔は古く、延宝二年(一六七四)の念仏講中による建立が見られ、早くから念仏講が組織された地域であることがわかる。現在は、阿弥陀如来をはじめとする仏像は弘長寺に移されているが、シダレ桜の下のお堂に風情が感じられる。

揮毫者別みると、徳本名号塔が上瀬黒、下瀬黒と百瀬の正念寺にある。上瀬黒の名号塔は一七〇センチメートルと大きい。建立年代が文政十二年(一八二九)と遅いのは、隣に立つ文化十二年(一八一五)銘の龍蟠谷の名号塔との関係であろう。

もう一つの徳本名号塔がある正念寺境内には、庶民の念仏に関するものではないが、常念仏の回向塔がある。五百日回向の如意輪観音、千日回向(元禄六年・一六九三)と二千日回向(享保七年・一七二二)の延命地藏、そして一万日回向(元文五年・一七四〇)には、導師である本山浄苑願寺十一世の括空禪阿の名号塔が建立されている。正念寺は弾誓が諏訪に赴く途中に掛錫した常照庵を前身とし、念来寺六世の明阿の中興を伝える常念仏の寺であるが、現在は木食宗として単立、無住となっている。千日回向の延命地藏には元禄六年の銘があり、百瀬も古くから念仏に親しんだ地域である。寺に伝わる百万遍の大数珠を使って行われていた

念仏も平成二十四年が最後となり、今は竹淵の地藏堂の庵主梅笠の作と伝えられる涅槃図がお盆に公開されるだけとなった。



上瀬黒の徳本名号塔



正念寺の一昨日回向供養塔

内田地区 念仏塔の総数は十一基で、その内訳は名号塔が十基、供養塔が一基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が七基あるが、うち六基は真言宗の常楽寺境内の六地藏である。

町会別に見ると、第二町会の釈迦堂原と第三町会の新田伝台墓地に集中している。この墓地には、等順と徳本の名号塔があり、他に常楽寺境内に徳本名号塔がもう一基ある。最も古いのは、第五町会の高札場跡にある「右牛伏寺／左松本」と刻まれた、元文二年（一七三七）建立の道標を兼ねた名号塔である。

第三町会の新田では文化年間におんべ立て（御柱）に代わって、各家を回る八日念仏が行われるようになり、明治の中ごろからは三月八日に集会所で数珠を回し念仏を称えるようになったという。第四町会の上真田・下真田でも講仲間が八日念仏が行われている。第五町会では、かつては北河原堂で念仏講が行われていたようで、百万遍の大数珠が残っている。



新田伝台の徳本名号塔



高札場の道標を兼ねた名号塔

中山地区 念仏塔の総数は二十二基で、その内訳は名号塔が二十一基、供養塔が一基である。ほかに、念仏講中の名が刻まれた六地藏がある。町会別に見ると、埴原西を除く各町会にあり、埴原北の保福寺末行応寺跡に五基が集中している。

揮毫者別には、等順が一基、徳本が五基あり、ほかに全久洞門、善一信光、龍蟠谷といった銘が見える。千石の龍蟠谷の名号塔がある場所は善光寺様と呼ばれており、等順との関係がうかがわれる。埴原北の町村の栄珠庵に立つ徳本名号塔には「維時文化十四歳丁丑初冬日／当郷中」とある。『応請撰化日鑑』の六月晦日条に「一、埴原村為右衛門・孫惣太、伴右衛門右同断（御名号石造立二付御染筆願書差出）」と見えるのがこれであろうか。

中山地区では、埴原西町会の尾池、和泉町会の上和泉、中和泉の一組及び二組で念仏講が組織され、彼岸などに念仏が行われている。蓮華寺境内の六地藏には、尾池念仏講中、原海道念仏講中、千石古屋敷念仏講、大月北中島念仏講、奈木鳥内念仏講と地区内の五つの念仏講の名が刻まれている。



栄珠庵の徳本名号塔



鳥内の善一信光名号塔

里山辺地区 念仏塔の総数は二十八基と多く、その内訳は名号塔が二十三基、供養塔が五基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が八基ある。

町会別に見ると、新井を除く各町会に散在し、環境としては村持ちの堂跡や墓地に多い。講中による建立が多く見られ、名号塔も含めると十三基ある。最も古いのは、林竹溪庵の念仏講供養の銘をもつ元禄七年（一六九四）建立の如意輪観音像である。また、南小松では八日念仏が、林町会では十一月二十三日の勤労感謝の日に「加助念仏」が行われている。

揮毫者を見ると、等順及び徳本の名号塔は見えないが、揮毫者銘のある名号塔は少なくない。北小松の蟠谷龍の銘がある一八六センチメートルもある大きな名号塔がある場所を、町会では善光寺と呼んでおり、その建立年が等順の活躍期に

当たる寛政九年（一七九七）であることから、等順の影響を受けていることは間違いないだろう。ほかに、下金井の薬師堂に全久院住職の吉丈、北小松の善光寺辻に道標を兼ねた空居、藤井に龍雲谷、荒町墓地に常安東流と多彩な名号塔が見える。



北小松の空居名号塔



薄町の名号塔

入山辺地区 念仏塔の総数は十八基で、その内訳は名号塔が十三基、供養塔が

五基でそのうち四基は百万遍供養塔である。

町会別にみると、上手町、大和合・牛立、三城を除く各町会に見られ、東桐原町会の旧海岸寺境内に三基が集まる。そのうちの一つが最も古く、元禄三年の銘をもつ名号塔である。

揮毫者別にみると、等順及び徳本は皆無で、銘があるものとしては、橋倉の隆阿、中村の龍蟠谷、駒越の無庵、里山辺村の飛び地だった大菱に兎川寺十三世の龍善の名号塔がある。

入山辺は八日念仏が盛んな地区で、厩所、上手町、奈良尾、中村、舟付の各集落で行われる悪神送りが、八日念仏と習合している。ほかに、南方、西桐原、東桐原、千手、原で二月八日または月遅れの三月八日に百万遍の八日念仏が行わ



駒越の無庵名号塔



南方の百万遍供養塔



大願寺跡墓地の等順名号塔



山浦杏の精誉名号塔

れている。
また百万遍の供養塔が多いのもこの地区の特徴で、南方の薬師如来立像と一の海の阿弥陀如来立像はいずれも念来寺仏であることから、念来寺の念仏の影響を受けているものと推測される。

岡田地区 念仏塔の総数は十七基で、そのすべてが名号塔であり、供養塔は見

えない。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が二基ある。

各町会にまんべんなく分布しているが、岡田町に五基、山浦に四基が集中している。岡田町には浄土宗の大願寺があったが廃仏毀釈で廃され、その跡地に等順と徳本の大きな名号塔が残っている。

また揮毫者別にみると、等順が五基、徳本が三基あり、他にも山浦杏に生安寺精誉と白雲、神沢に浄林寺二十六世の順誉、岡田町蓮台場に修誉善察と揮毫者銘のある名号塔が多い。蓮台場の名号塔は、地元では弾誓が授けたものと伝承されているが、その字体は弾誓のものではない。

岡田地区には等順の名号塔が多く、大願寺跡墓地には西国勸進の帰途に揮毫したと推測される寛政十年七月十五日の銘をもつ楷書体の名号塔がある。また、松岡墓地には行書体、東区西浦には草書体の名号塔も見える。善光寺街道沿いの伊深の名号塔は、大願寺跡のものとともに二メートルを超える大きさで存在感を示している。塩倉の海福寺の裏にも等順の名号塔があり、今も春秋の彼岸に名号軸を掛け、大数珠を繰りながら念仏を称えている。

大願寺には徳本が立ち寄り化益を行っているが、徳本名号塔の裏にはその様子が「文化十三丙子歳六月廿八日於當寺／上人一日一夜念佛修行化益有之／倚而道俗時衆等此塔建立者也」と記されている。

本郷地区 念仏塔の総数は三十一基で、その内訳は名号塔が二十九基、供養塔が二基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が六基ある。

各町会にまんべんなく分布しているが、三才山は一の瀬、本村、小日向の旧杖郷に合計六基、玄向寺境内の五基を含め大村に九基が集中する。

揮毫者別には、岡田地区と同様に等順が五基と多く、二メートルを超える大きなものもある。大村雪中の名号塔の裏には「石工兵助」の作者銘があり、浅間の名号塔にも「守矢兵助」の作者銘があり珍しい。

惣社地藏堂には能書家の木沢梓川の揮毫者銘のある名号塔があるが、そこには「善光寺別當大勸進」の文字が刻まれており、寛政九年(一七九七)の紀年銘から等順の勸進との関係がうかがわれる。

徳本名号塔は玄向寺境内に一基だけだが、惣社地藏堂にその弟子徳住の名号塔が見える。『長野県史』近代資料編第一〇巻(一)宗教には、明治六年(一八七三)九月の「筑摩郡惣社村郷中石仏売却帳」という資料が掲載されている。ここには、無銘の名号塔一基が百文(一銭)であるのに対し、徳本名号塔は金一分(二十五銭)と二十五倍の値が付いている。惣社にも、かつて徳本の名号塔があったことがわかる。

そのほか、水汲阿弥陀堂跡に惣社地藏堂庵主の一道、神宮寺入口に一心の銘をもつ名号塔があり、玄向寺には徳本のほかに播隆、浄林寺の順誉、念来寺十九世の勸道、玄向寺二十八世立享の名号塔もある。

年代的に古いものは横田の共同墓地にある延宝七年(一六七九)の六字名号を刻んだ石碑であるが、名号の両側に男女の法号らしき刻字があることから、墓碑とみられる。これに続くものとして元禄三年(一六九〇)銘の名号塔がある。大村雪中の社宮司社の貞享二年(一六八五)銘の六字名号を刻んだ石碑は、下部に二鶏三猿の陽刻と「かのへ仲間」の文字が見えるので、庚申塔とみられる。雪中の念仏講は平成二十年頃に途絶えたが、その仲間は庚申講の仲間と同じだったようである。



玄向寺の播隆名号塔



水汲の一道名号塔

。横田でも庚申講と念仏講の仲間は同じだったというので、本郷地区では庚申講と念仏講をあえて分ける必要はないのかもしれない。

市街地北部(城北、安原地区と東部、中央、城東地区の一部) 念仏塔の総数は十九基で、その内訳は名号塔が一八基、供養塔が一基である。

地区別にみると、城下町の東の口、放光庵境内に七基が集中する。放光庵の名号塔は延宝八年銘のものが三基あり、うち一基には下横田町の建立者銘がある。また、一基は中町下町の庚申講中の建立で、六字名号の両側に庚申の文字が振り分けられている。また、元文五年(一七四〇)銘の六字名号を刻んだ「庚申石塔」や、翌元文六年の蟻ヶ崎西の名号塔の施主にも「當村庚申講中」と見え、このあたりでも庚申講と念仏講が同じ仲間で行われていたようである。

揮毫者別にみると等順が七基あり、徳本は見えないが、弟子の徳住の名号塔が単信坊にある。等順の名号塔では、岡の宮町公民館前の寛政二年の銘がある楷書体のものが市内で最も古く、蟻ヶ崎西の二基がこれに続く。また、安原の十王堂跡に権僧正銘の行書体、岡宮神社西に草書体の名号塔がある。この名号塔の横に、正面に盃の上に阿弥陀三尊の種字と「念佛」の文字を刻み、向かって左側面に「大酒供養十六人」と刻まれた奇妙な供養塔がある。



放光庵の庚申・名号塔



岡宮神社西の大酒供養塔

市街地西部(白板地区と中央地区の一部) 念仏塔の総数は八基で、その内訳は名号塔が七基、供養塔が一基である。いずれも、放光寺境内や寺院の墓地、堂跡に見られる。

生安寺墓地にある貞享二年銘の名号塔には「念佛講中」の文字が刻まれ、早くから講が組織されていたことがわかる。宮瀬観音堂の延宝八年の塔には六字名号とともに庚申供養の文字が刻まれている。

放光寺境内にある寛政四年の銘がある供養塔の裏には、「石工 孫石エ門」と

作者銘が刻まれている。孫右衛門は高遠石工の名工で、島立堀米、入山辺東桐原、同宮原の道祖神などを残しており、この文字碑は晩年の作である。



宮沢本村の名号塔



白坂子育地藏堂の名号塔

市街地東部(第二、第三地区と第一、東部、城東、庄内地区の一部)

念仏塔の総数は二十七基で、その内訳は名号塔が二十二基、供養塔が五基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が五基ある。

川南(女鳥羽川の南)の城下町はこのエリアに含まれるが、その割に念仏塔が少ないのは廃仏毀釈と戦後の再開発の影響であろう。浄林寺境内の徳本名号塔、南の博労町十王堂跡の等順名号塔がわずかにその名残をとどめている。

揮毫者別には、この二基のほか、徳本名号塔は善昌寺門前と神田駒場の墓地に、等順名号塔は城下境の庄内墓地と筑摩神社参道にみえる。

善昌寺門前の徳本名号塔は明治二十五年の再建で、全昌寺が廃された後、善光寺別当大勧進の松本説教所として再興されてから再建されたものである。この前に天保四年(一八三三)の銘のある徳住の笠塔婆型の立派な名号塔があるが、紀年銘の隣に「當寺十七世恵明春阿代」と念来寺住職の名が刻まれており、念来寺か



三才薬師堂の徳住名号塔



博労町十王堂跡の泰道名号塔



井川城の等順名号塔



笹部の徳本名号塔

ら移設したものであることがわかる。台座に明治三十一年の文字が見えるので、そのころの移設であろう。徳住の名号塔は、三才の薬師堂にもある。

南の十王堂、十輪院の跡地には、貞享三年、四年の古い名号塔がある。北や東の十王堂と同様に、早くから庶民の信仰の拠点とされていたことがわかる。また、紀年銘はないが、「勢州津寺早妙雲寺泰道書」と揮毫者銘のある、柔らかな書体の名号塔もある。埋橋の十王堂を継承した広明寺の境内にも延宝五年(一六七七)の古い名号塔がある。また、寛政十年銘の名号塔は、揮毫者銘は無いものの龍蟠谷の書と思われ、等順の布教との関係がうかがえる。

市街地南部(田川、鎌田地区と第一、庄内地区の一部) 念仏塔の総数は三十基で、その内訳は名号塔が二十七基、供養塔が三基である。ほかに、念仏講中と刻まれた石造物が一基ある。

またまってみえるのは、井川城にある小笠原氏ゆかりの広正寺境内で、寛文九年(一六六九)の名号塔が三基並んでおり、その一つに「念仏講衆」と見える。

揮毫者別では、等順が鎌田地区と田川地区に八基と集中し、徳本も三基見られる。等順の名号塔は、笹部の一基を除けば、いずれも等順活躍期の紀年銘があり、井川城の寛政十三年銘の名号塔には、権僧正の肩書が刻まれている。また、両島では二月八日(現在は二月十一日)に、村境に大きな足半草履を掛け、大数珠を繰って八日念仏が行われるが、このとき本尊として掲げられるのも等順の名号軸(現在はレプリカを使用)である。

一方、徳本名号塔のある征矢野と笹部については、いずれも『応請撰化日鑑』に名号塔建立に関する記録がある。征矢野は徳本巡錫の文化十三年(一八一六)六月二十六日に生安寺に向き、名号石造立の願書を提出している。征矢野の名号塔には「文化十二乙亥」の紀年銘と「先祖代々精霊」の文字が見え、この願書とは符合しない。笹部のものは「文化戊寅十一月」(文化戊寅は十五年)の紀年銘が

奈川地区 念仏塔の総数は四基で、いずれも名号塔である。ほかに、「寒念仏村中」と刻まれた石造物が一基ある。

川浦月夜沢の墓地に、揮毫者銘はないが、徳本の書体による小ぶりの名号塔がある。文政三年（一八一〇）に乗鞍を中興開山した宝徳靈神こと大宝院明覚の齊藤家に、署名と花押が版刷りの小さな名号札が保管されている。書体は細部が徳本とは異なるが、徳本の影響が奈川地区にも及んでいたことを示している。

紀年銘のある名号塔は、寄合渡公会堂前にある宝暦三年（一七五三）の一基のみで、庚申塔と兼ねている。

また、田ノ萱には「寒念仏村中」と陰刻された、文化五年の紀年銘のある六地藏がある。寒念仏というのは、寒の早朝に行われる僧の念仏で、勧進を伴ったことで庶民にも広まった。大津絵の「鬼の寒念仏」は、信仰心がないものが行う寒念仏を風刺したものである。寒念仏の勧進によって六地藏を建立したのであろうが、僧か村人かは不明である。



川浦の徳本名号塔



寄合渡の徳本名号書

梓川地区 念仏塔の総数は三十一基で、その内訳は名号塔が十九基、供養塔が十二基と、四賀地区と並んで供養塔が占める割合が多い。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が十基ある。

旧村別にみると、立田村に九基が集中し、小室の四基、横沢の三基がこれに次ぎ、環境は堂跡や墓地に多い。

揮毫者を見ると徳本が七基と多く、二メートル前後の大きなものも見えるが、総体的に徳本の巡錫から時を経て建立されたものが多い。徳本以外の揮毫者がわかる名号塔としては、上立田の三太夫屋敷跡に「一佛山十四世聲阿」と刻まれた名号塔がある。「一佛山」は安曇野市三郷小倉の浄心寺であろうか。

供養塔十二基のうち、八基が百万遍供養塔（五百万遍一基を含む）で、融通念仏が盛んだったことがわかる。また、下立田、上角、南大妻、横沢では、現在も念

仏講が行われている。このうち、横沢の薬師堂には、安養寺から移された阿弥陀如来像とともに、水野氏時代の松本藩お抱え絵師である笹田養跡の末裔と思われる藤三作の涅槃図、「天保一三年」「念仏講中」の墨書銘のある箱に納められた大数珠、さらに堂前には鰐口の代わりに寛政十年（一七九八）の陰刻銘のある双盤が見える。安養院跡には、二メートル近い大きな千日回向塔があり、その隣には「四十八夜念仏」と刻まれた納経供養塔がある。この供養塔の裏に刻まれた地名には「西洗馬」という文字も見え、松本平の広範な地域にわたって信仰を集めていたことがわかる。



上立田の徳本名号塔



横沢安養院跡の千日回向塔

波田地区 念仏塔の総数は三十二基で、その内訳は名号塔が二十七基、供養塔が五基である。ほかに、念仏講中等と刻まれた石造物が三基ある。

波田地区は、明治の波多村施行に当たり区制を敷いたため外からは地域が見えにくくなっているが、地区内では江戸時代のムラにあたる大字の地名で呼ばれることが多く、念仏塔もおおむね枝郷を含めた大字単位で分布している。

揮毫者に目をやると徳本名号塔が五基あり、上波田阿弥陀堂と下波田薬師堂のものは二メートルを超える大きさを誇る。上海渡には徳本とともに弟子の徳住、妙哲、即誓了道と揮毫者銘がある大きな名号塔が林立している。このほかに了道のものと同じ明和五年（一七六八）の紀年銘をもつ、「當村講中」の建立銘のある名号塔も見え、江戸時代中期から念仏が盛んだったことがわかる。上海渡でもかつては念仏講が行われており、徳本と徳住の名号軸が残っている。

上島には、徳本とともに寛政八年銘の「善光寺別當大勧進等順」と刻まれた名号塔があるが、揮毫者は「比丘大圓」とあり書体も等順とは異なる。上島では現在も庚申仲間により念仏講が行われている。

原村でも念仏講が行われており、本尊は等順の名号軸である。古畑家の墓地の前に文化十一年の紀年銘と原村講中の建立者銘のある大きな名号塔がある。

名号塔の年代では、これらに先立つ元禄四年（二六九二）のものが上波田阿弥陀堂に、元禄八年のものが中波田観音堂と大墓場前にあり、この地区の念仏講が江戸時代中期初頭にさかのぼることが知られる。



上海渡の徳住名号塔



竜島の妙哲名号塔



小俣観音堂の涅槃図

《コラム》 島立地区の念仏行事

平成二十八年二月六日（土）、島立地区の町区及び荒井の念仏行事を調査した。町区では、北・中・南の三ブロックに分かれて念仏行事が実施されている。今回は午前九時から始まる北ブロックを訪ねた。参加する小学生は三人で、付き添いとして地区の役員の方が一緒に回る。公民館で、念仏行事の由来を学習した後、数珠を回す練習をしてから主に国道沿いにある集落を回り始めた。

小学生が家々の玄関口で念仏に来たことを告げると、家の方が出てきて、小学生が打つ鉦に合わせて全員で「ナンマイダー」と称えながら、時計回りに数珠を回す。三度回した後、家の方からはお菓子とお金が渡される。鉦は、三人の小学生が交代で打っていた。数軒の家は留守のようだったが、お年寄りや足の悪い方もおり、出て来ない家もあるということだった。十一時過ぎまで、約四十軒を回り、公民館に戻って小学生がお菓子を分け、解散した。

お昼をはさみ、午後一時から荒井の南部ブロックの念仏行事が始まった。荒井は全部で六ブロックに分かれて行事を行っており、南部は松本電鉄上高地線の信濃荒井駅を中心とした南北の約四十軒を受け持つ。

小学生は四人で、その母親が付き添って集落内を回った。小学生の内、五年生の女の子二人が年長であったので、集落を南と北の半分に分けて鉦を打つ役を分担していた。家々の玄関口で呼びかけると家の方が出てきて、家の外または玄関の中で一緒に数珠を時計回りに一度回す。その後、家の方はお金を渡し、小学生は用意していた貯金箱にそれを納めた。葬式を出した家は回らないが、たまたまその家の方が玄関先にいたようなときは、その方の希望に応じて例年通り数珠を回すこともある。約一時間半かけて南から北へと進み、旧野麦街道との十字路で、母親たちの用意していたお菓子が小学生に配られ、解散した。

いずれの地区も小学生が少なくなっており、大人が付き添わざるを得ない状況がうかがえる。その一方、小学生に家々の玄関口での呼びかけや、鉦を打つ役を任せるなど、行事の主体は小学生という意識が地域の方々にはあるということが感じられた。



島立 町区

（百瀬将明）

第二項 年代による分布

次に、これらの念仏塔等はいづごろ建立されたのか見てみたい。念仏塔のうち、紀年銘があるものは、名号塔が四二五基中三四一基、供養塔が一〇二基中九十四基で、念仏講中の建立したその他の碑が八十九基中七十基である。これを示したのが図1である。

まず名号塔の建立で最も古いのは、安原横丁の撰取院跡のもので、「南無阿弥陀佛 東蓮社童五九君誓願上人天和尚ノ于時寛永十七年十一月廿八日」とある。東蓮社君誓上人は生安寺三世で撰取院の開山和尚に当たり、寛永十七年（一六四〇）十一月二十八日は上人の命日であるため墓碑と見るべきである。これに続く正保四年（一六四七）銘の四賀長越の瑞泉寺墓地のものにも戒名が見えるので墓碑であろう。

三番目は寛文二年（一六六二）銘をもつ今井東耕地の古田家墓地にある祐天の署名が刻まれた名号塔であるが、この年の祐天は修行中の弱冠二十六歳に当たると、後年の再建に伴い祐天名号を使用したものと推測される。続く寛文九年銘の正覚院境内にある名号塔には「靈兼山正覚院二世仰蓮社単誉ノ弘願寺 直信上人」の名が刻まれており、現在のところ、このあたりが松本市内最古の名号塔とみられる。中沢公民館にも紀年銘こそないが祐天の名号塔があり、今井地区では早くから念仏信仰が興っていたと推測される。ほかに、寛文九年の三基の名号塔が、井川城の広正寺境内にもある。

名号塔の建立には四回のピークが見られる。最も早いのは一六七〇年代から八〇年代にかけてである。特に、延宝八年（一六八〇）の名号塔が五基確認されているが、この年は庚申に当たり、餌差町城外にある放光庵境内の三基をはじめ、六字名号を刻んだ「庚申名号塔」が見られる。続く八〇年代は、天和元年（一六八一）に明阿が念来寺六世として入院し、中興に着手した頃に当たる。念来寺は、弾誓三世の長音が寛永十二年（念来寺の寺伝では元和五年・一六一九）に開いた常念仏と作仏の寺院で、藩主・水野氏の保護により、松本平の念仏信仰の基礎を築いた。

二回目のピークは、一七三〇年代である。この年代以降は、平均で一年当たり一基以上の建立が見られるようになり、名号塔の建立が珍しいことではなくなる。念来寺の明阿から弟子の八世相阿、大町弾誓寺五世の法阿（いわゆる木食山居）らが活躍した時代である。同じ弾誓系の寺院である寿百瀬の正念寺境内に元文五年（一七四〇）銘の「常念仏一万日廻向」と刻まれた供養塔（本調査では「南無阿弥陀仏」と刻まれているため名号塔に分類）がある。明阿は、正念寺のほかに和田の西善寺、四賀刈谷原町の普門庵も中興している。

次のピークは一七九〇年代で、十年ごとの数値では最大となる五十四基の名号

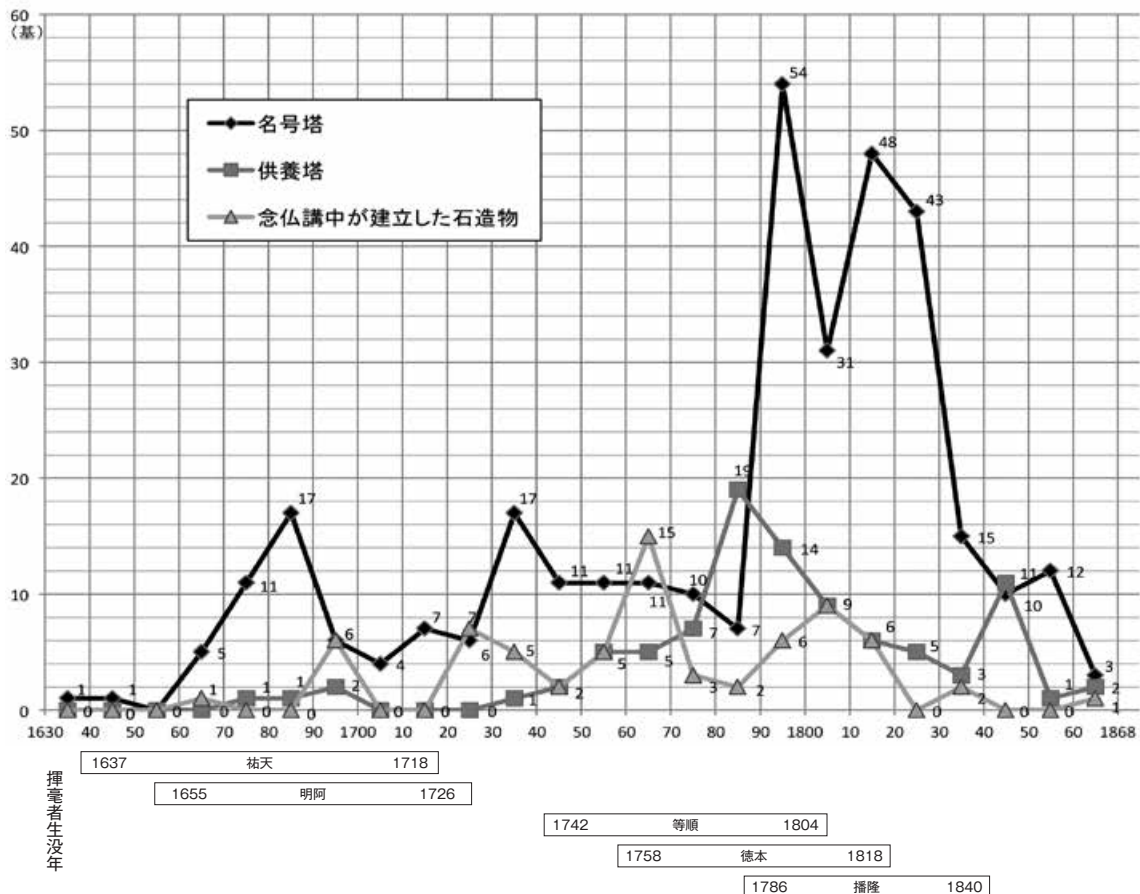


図1 名号塔等の建立件数の推移

塔が建立されている。そのうち十八基は善光寺等順の名号塔で、ほかにも等順の揮毫ではないが、その影響を受けて建立されたものが四基確認できる。等順の活動時期に当たるこの十年間には、毎年二〜三基ずつ、コンスタントに建立されている。

その次の十年間も三十一基と多くの名号塔が建立されているが、続く一八一〇年代に四十八基、二〇年代に四十三基と爆発的な数値を記録している。なかでも徳本が松本を巡錫した文化十三年（一八一六）の紀年銘をもつものが十二基あり、そのうち十一基は徳本揮毫の名号塔である。この時期の名号塔建立には、徳本の信濃巡錫が大きく影響していたことがわかる。

一方、供養塔の建立は一七八〇年代に十九基を記録し、ピークを迎えている。このうち十一基が百万遍供養塔である。等順は、浅間山噴火の翌年、天明四年（二七八四）に浅間山噴火による死者の追善大法要を執り行い、融通念仏血脈の簡略化を行った。これ以前には、奉唱回数を刻んだ供養塔が多く、「念佛百萬遍」と刻まれた供養塔が見られるようになるのはこのピーク以降であり、松本市の百万遍念仏が等順の教えに影響を受けていることが推測される。念仏百万遍の供養塔は三十三基あり、念仏供養塔全体のおよそ三分の一に当たる。また、四賀地区で六基の供養塔が建立されている弘化四年（一八四七）は善光寺大地震の年に当たる。

文化四年建立の四賀長越、文政十三年（一八三〇）の四賀会吉に「月念佛供養」と刻まれた念仏供養塔がある。いずれの供養塔にも多くの人名が刻まれており、毎月百万遍の念仏を称える念仏講が組織されていたようである。一八四〇年代にも供養塔の建立が十一基を数え、うち八基は百万遍念仏の供養塔である。江戸時代後期には念仏講中によって建立されたものが多く、念仏講を組織して毎月百万遍の念仏を行う「月念仏」が行われていたのであろう。

最後に念仏講中によって建立された石造物についてみると、梓川杏の金井堂境内にある地藏菩薩が最も古く、寛文八年（一六六八）の紀年銘がある。その後、一六九〇年代に六基、とんで一七二〇年代に七基、ピークは一七六〇年代の十五基である。像容別には地藏菩薩・六地藏が群を抜き、如意輪観音がこれに次ぐ。念仏講は江戸中期に、石造物を建立できるほどの力を持ち始めたようである。

以上みてきたように、石造物からは、民衆の間に念仏が萌芽したのは江戸時代前期末とみられ、広がりを見せるのは等順や徳本が活躍する江戸時代後期になってからといえる。

しかし、そのすべてが今日まで残されているわけではない。松本は廃仏毀釈が厳しく断行された、全国でも有数の地域である。その結果、念仏塔等の石造物も、破却されたり、移動されたりと本来の姿をとどめていない場合が少なくない。



松岳寺の徳本名号塔



大町弾誓寺境内に林立する常念仏回向塔

明治四年（一八七二）正月十三日付で、藩庁から次のような布告が出ている。市在道傍又ハ樹立ノ中、其外処々ニ仏名題目ノ石塔・供養塚・石地藏等ハ勿論、都而（ことごとく）神仏瀆殺（ごんごう）ノ文字ヲ鐫（ほり）候分ハ取棄致へし（以下省略）

前項の芳川地区で触れた祐天寺の本地身地藏尊旧跡を示す名号塔もこの影響であるが、その向かいには、「南無阿弥陀仏」の文字をノミで欠きとった石塔が見られる。芳川地区の調査では、この石塔は、痕跡から徳本名号塔とみられ、残された「文政三庚辰九月／當山十□□」の文字から、廃寺になった平田念称寺にあったものが、廃寺を免れた松岳寺に移されたのではないかと推測している。

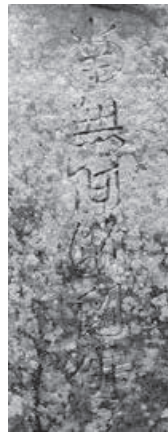
もう一つ例を示す。市街地東部の項で、旧念来寺にあったと思われる徳住名号塔が、善昌寺の門前に移されていることに触れた。これはほんの一例で、松本城下最大の巨刹といわれた常念仏の寺院の記録は見事なまでに失われている。おもな仏像は、和田の西善寺に移されているが、石造物は歴代住職の無縫塔と墓地の片隅にある名号塔などわずかなものが残るだけである。「信州筑摩郡松本領光明山念来寺常住什物記全」には「三万五千日回向ノ右之通年号相改勿論千日々ニ茂回向執行有之候共書記不申候三万日造之回向石塔七柱造立有之候」と見え、かつては大町弾誓寺のように、五千日ごとの常念仏回向塔が念来寺の境内に立っていたのである。

このように、松本藩内では、明治の初めに多くの石造物が破却され、あるいは移動されていることも承知しておかなくてはならない。

第三項 名号塔の揮毫者

本項では、念仏講を広めた名号塔の揮毫者について記しておく。前項で見たとおり、その中心となるのは等順と徳本の二人であるが、そのほかにも複数の名号塔に名前の刻まれている人物がいるので、年代を追って確認したい。

一 祐天と祐全



祐天名号 (右から今井東耕地、今井中沢、新村清浄院跡)

山」と刻まれており、巡拝塔を兼ねている。

また、本郷地区の横田に、廃仏毀釈で廃寺となった念仏寺から払い下げられた名号軸が一幅保管されている(写真左)。

祐天は、東京都目黒区の祐天寺の開山に据えられる浄土宗の僧である。松本に來たという記録は無いが、松本藩主の水野忠周が深く帰依したことが知られている。芳川野溝の松岳寺の山門前に、祐天寺六世の祐全が揮毫した名号塔があ



祐天名号軸

祐天の名号塔は三基確認された。うち二基は今井、一基が新村地区にある(写真上)。今井東耕地の古田家墓地にある寛文二年の名号塔については先に触れたとおりで、名号の字間が開いていることなどから、記念碑の再建に当たり祐天の名号を用いたものと思われる。中沢公民館の敷地にあるものは、かつては堂村の十王堂の境内に徳本名号塔等と一緒にあったものという。新村の清浄院跡のものは、等順名号塔と並んで立ち、等順名号塔よりも古い享保十九年(一七三四)の紀年銘がある。文字形は「無」の字の傾斜等細部で祐天と異なる点も見られる。名号の左右に「西國四國／秩父坂東／紀州和可



本地身地藏 (祐天寺提供)

明院にあってと思われるが、廃仏毀釈により移動したものであろう。

二 相阿と弾誓派の聖

念來寺八世の相阿の名号塔が笹賀巾下の小俣観音堂の境内にある。紀年銘は無いが、「光明佛六世相阿」と刻まれている。光明仏は弾誓のことで、念來寺は光明仏三世の長音が開山した常念仏の寺院で松本城下の清水にあった。念來寺最後の住職となった信阿の末裔にあたる青山家に相阿の名号軸(写真左端)が伝わっており、現在は松本市立博物館に収蔵されている。



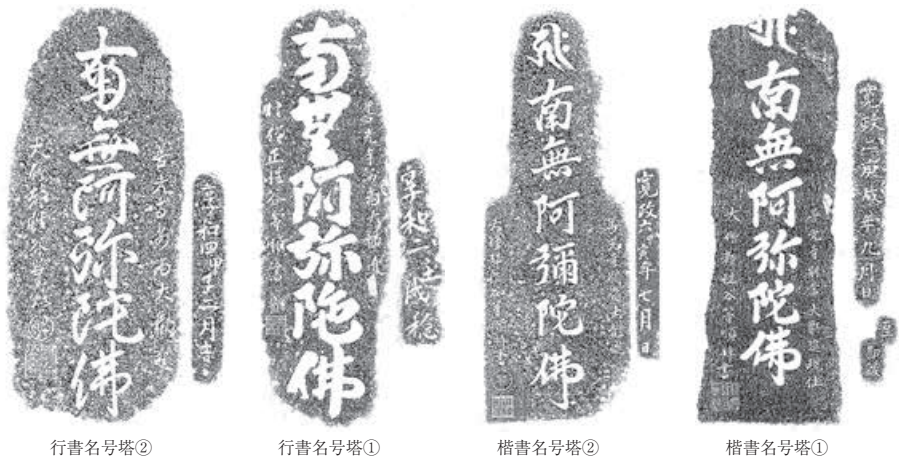
修善善察名号塔

弾誓派の名号としては、岡田町の蓮台場に弾誓の名号塔と伝えられるものがある(拓本左)が、その書体は弾誓のものとは異なり、「願主／修善善察」の銘がある。市内には光明仏弾誓の名号塔は確認されていない。弾誓派の関連では、寿百瀬の正念寺境内に、浄発願寺十一世の括空禪阿の名号を刻んだ一万日回向塔が、また、本郷大村の玄向寺境内に念來寺十九世の徳阿勧道の名号塔がある。



相阿名号軸

三 等順とその周辺

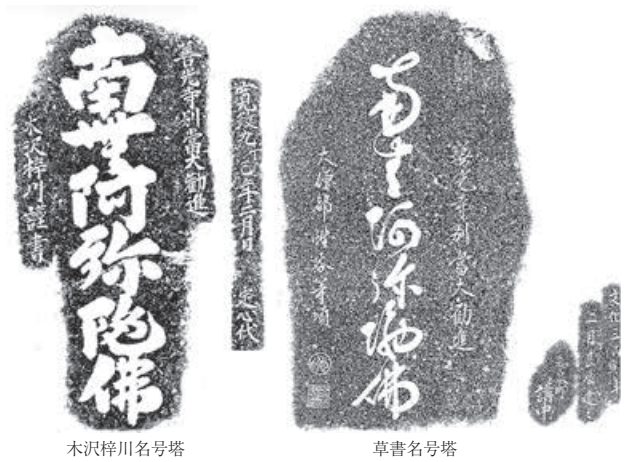


前項で確認した松本の念仏信仰に大きな影響を与えた二人のうち、先に松本を訪れたのが善光寺大勧進の等順である。等順は前代の慈薫が東北地方に勧進したのを受け、寛政六年（一七九四）から足掛け五年にわたり、北陸から山陰、山陽、九州、四国を廻国し、勧進を行っていた。松本にはその帰途、寛政十年に立ち寄り、生安寺を宿に念仏を広めている。等順は善光寺門前の美濃屋、坂口観了の次男として寛保二年（一七四二）に生まれ、十二歳で東叡山護国院に入院し、天明二年（一七八二）に善光寺大勧進別当に就任した。信濃出身で大勧進別当に昇ったのは等順ただ一人というが、その翌年、天明三年七月六日から八日にかけて、初夏から活動が活発化していた浅間山が大噴火を起こした。群馬県の鎌原村はこの噴火の火砕流により観音堂を残して全滅したが、等順は観音堂に避難して命をつないだ人たちのため、多くの僧を従えて現地で救援活動を行ったという。噴火の翌年、等順は、善光寺本堂で浅間山大噴火被災者の追善大法要を行い、融通念仏血脈譜を授与した

ことは先に述べたとおりである。さらにその翌天明五年には、大飢饉の救済のための居開帳を行っており、これが今の御開帳の始まりと言われている。

今回の調査では、等順の名号塔を四十三基確認した（再建とみられる和田無極寺境内のものを含む）。うち四十基に紀年銘があり、最も古いのは寛政二年の銘をもつ岡の宮町公民館前のもので、最も新しいのは天保十一年（一八四〇）銘の和田の観音寺境内のものである。等順の名号塔には大きく分けて四つのパターンが見られる。最も多いのは楷書体のもので、四十三基中二十七基がこれに当たる。「南無阿弥陀佛」の用字が多いが、岡の宮町公民館前のもの（楷書名号塔①）のよ

うに「陀」が「陀」となるものが半数近くあり、博労町の十王堂跡のもの（楷書名号塔②）のように「弥」の字が「彌」となるものも散見する。次に行書体のもので五基あり、これには二つのパターンがある。安原町の十王堂跡にある享和二年（一八〇二）銘のパターン（行書名号塔①）は四賀赤怒田と岡田松岡共同墓地にもみられ、安原町の十王堂跡と赤怒田中木戸のものには「権僧正」とある。なお、楷書体であるが井川城の寛政十三年銘のものにも「権僧正」とある。等順が権僧正を授かったのは、西国勧進からの帰院後、寛政十年十一月二十六日のことである。このほかに、岡田神社西浦に享和四年銘の行書体（行書名号塔②）、岡宮神社西



に文化三年（一八〇六）銘の草書体（草書名号塔）の名号塔が一基ずつある。

また、等順本人の揮毫ではないが、等順の念仏布教に関する名号塔が市内に散見する。一つは寛政八年銘の波田上高観音堂の「比丘大圓」の揮毫によるもので、もう一つは寛政九年銘の惣社地蔵堂の木沢梓川の揮毫になるもの（木沢梓川名号塔）である。揮毫者銘は無いが、中山上和泉の八幡神社下にも「善光寺大勧進」と刻まれた名号塔があり、中山丸山、今井上新田、下新田にも「善光寺」と刻まれた名号塔がある。また、入山辺西桐原、里山辺北小松、中山千石には、善光寺と呼ばれる場所に名号塔が建立されており、北小松と千石のものは龍蟠谷の揮毫銘がある。龍蟠谷（あるいは蟠谷龍）の揮毫銘のある名号塔は、全部で七基あり、北小松の寛政九年（蟠谷龍）を最古として文化十二年にかけての紀年銘がある。



等順名号軸

表2 徳本名号塔の記録に関する整理表

No	地区	場所	建立年	裏または左右の紀年等	文献記録(「応請撰化日鑑」)	名号石記	現存
1	島立 町区	榮安寺境内	文化15年	文化十五戊寅三月造立/當村中	6/26御名号石願書差出	○	○
2	新村 安塚	専称寺	文政10年	行者/御化益一七日珠譽上人代/維時文政十丁亥年七月/當山廿四主進譽代/敬造建願五ヶ新村中	6/29御名号塔造立願書差出	○	○
3	和田 南和田	真光寺	文政2年	文政二己卯十月五日 本村中	6/30御名号石造立仕度候間、御染筆頂戴仕度、願書差出	○	○
4	笹賀 中二子	慶林寺	文化13年	文化十三丙子六月廿九日御化益□開眼/同寂文政元戊寅十月六日/隨譽代	6/26御名号石願書差出 6/30御名号石七ツ時過御開眼被遊ける	○	○
5	芳川 平田	念称寺			6/29平田念林(称)寺御名号塔造立願書差出	○	
6	中山 町村	榮珠庵	文化14年	維時文化十四歳丁丑初冬日/當郷中	6/30植原村為右衛門・孫惣太・伴右衛門御名号石造立ニ付、御染筆願書差出		○
7	岡田 岡田町	大願寺跡	文化13年	文化十三丙子歳六月廿八日於當寺/上人一日一夜念佛修行化益有之/倚而道俗時衆等此塔建立者也	6/29御名号塔造立願書差出	○	○
8	第一 本町	生安寺			6/27御名号石御開眼有之	○	
9		光明院			6/30御名号石造立仕度候間、御染筆頂戴仕度、願書差出	○	
10	鎌田 征矢野	公民館前墓地	文化12年	文化十二乙亥/先祖代々精霊	6/26重左衛門・次郎右衛門・伊野右衛門連印ヲ以御名号石願書差出	○	○
11	笹部 墓地		文化15年	文化戊寅十一月/笹部村□	6/30笹部村世話人長之助・儀次郎御名号石造立ニ付、御染筆願書差出	○	○

四 徳本と徳住
 徳本は、宝暦八年(二七五八)紀伊国に生まれた。浄土宗の念仏聖で、文化十三年に信濃を巡錫している。出家したのは二十七歳と遅く、弾誓や澄禪をめざして木食修行したことが『徳本行者伝』にみえる。

信濃巡錫の旅は、三月二十日に江戸一行院を出立し、四月一日に信濃に入り、八月十二日に美濃へ出るまでの四ヵ月半にわたり、善光寺と諏訪を中心に信濃に滞在している。松本には六月二十二日から七月一日まで一週間余り滞在し、城下の生安寺をはじめ、岡田の大願寺、新村の専称寺、笹賀二子の慶林寺で化益を行っていた。この間に化益を受けた人は、二八、〇〇〇人を超えた。なお、慶林寺から塩尻宿に向かう途中、今井の名主忠右衛門宅に寄っているが、今井堂村には市内で最も大きな三メートル近い名号塔が立っている(写真下右)。

今回の調査では、徳本の名号塔を七十三基確認した(清水善昌寺門前の再建を含む)。うち六十五基に紀年銘があり、そのほとんどが信濃を巡錫した文化十三年以降の建立であるが、征矢野と神林および和田に前年の文化十二年の紀年銘を刻んだものがある。このうち、和田の西善寺のものは干支が丙子とあるため文化十三年の誤刻とみられ、征矢野の墓地のものも『応請撰化日鑑』に征矢野村の重左衛門らが名号石願を出している記録があるため誤刻の可能性がある。また、最も新しいのは梓川北大妻の大日堂にある嘉永四年(二八五二)建立のものである。徳本の名号塔に関しては、没年までに建立されたものの記録が残されている。弟子の本極が記した『徳本行者諸国



今井堂村の名号塔



署名と花押



池田町の版木と印影



名号石記(以下、「名号石記」という)がそれである。ここには、松本市内の名号塔十基が記録されている。これらの記録と現状を整理したのが表2である。『応請撰化日鑑』に染筆願または名号石願を提出した、あるいは名号石の開眼供養を行ったという記録があるものは十一件で、そのうち中山の榮珠庵を除く十基が『名号石記』に掲載されている。そして、十一件のうち本町の生安寺及び光明院と平田の念称寺を除く八基が現存している。徳本が訪れた岡田の大願寺と二子の慶林寺の名号塔には巡錫の年である文化十三年の紀年銘があるが、新村の専称寺の名号塔には巡錫から十一年経った文政十年(二八二七)の紀年銘が刻まれている。化益を行った日に名号塔造立願を提出しているが、一ヵ月半後の八月十三日に住職の珠誉が亡くなっているのが、造立が遅れた理由であろうか。

徳本の名号は一目でわかる独特の書体であるが、これは祐天の名号を手本に手習いしたものといえ、和歌山県日高町の安楽寺に手習い名号が伝わっている。名号に付された花押(写真中)も独特で、「鬼ころす 心はまるく 田の中に 南無阿弥陀仏に うかぶつきかな」と自ら説明しており、「鬼」という字の「田」の部分丸く図案化して、その中に「心」を入れ、月に見立てた丸印を付している。

松本市内では徳本の名号軸は二幅しか確認されていないが、諏訪の貞松院には一行院、大雄寺(高山市)とともに三幅と言われた大字名号軸がある(口絵参照)。全長五メートルを超える大幅で、この書を元に諏訪の唐沢阿弥陀寺の磨崖名号が彫られたという。徳本の名号書は、念仏講中に授ける講中名号と、日課念仏の称名数によって個人に授けられる日課名号がある。その大きさも細かく規定されているが、日課名号は最高の六万唱が自筆の名号書で、それ以下は版刷りという。池田町広津坂守稻荷社には、徳本名号の版木が残されている(写真左)。

なお、ほぼ全市域に見られる徳本名号塔であるが、和田地区に最も多く十基、



名体不離尊像

今回の調査では、玄向寺のほか、今井西耕地の櫻井家墓地に名号塔を一基確認したほか、玄向寺で六字名号と「往生之業念佛之先」と記された軸(後に購入したものを除く)、今井東耕地の正覚院で名体不離尊像の軸(東耕地の念仏講に伝わったもので現在は額装)、青島念仏講で六字名号と「槍ヶ岳寿命神」の軸、柳原倶楽部と入山辺東桐原で名号軸を一幅ずつ確認した。



徳住名号塔 (右: 単信坊、左: 惣社地藏堂)

梓川地区が七基でこれに次ぎ、入山辺、里山辺、四賀の三地区には見られない。また、徳本の弟子である徳住の名号塔を、市内で七基確認した。うち五基には文政九年(一八二六)から天保六年(一八三五)まで十年間の紀年銘がある。徳住は徳本の信濃巡錫の際に善光寺で入門した信州の人で、後に三河の九品院の住職となった。徳住の名号は二種類確認され、単信坊ほかの六基はオリジナルであるが、最も新しい惣社地藏堂のものは徳本の名号と酷似している。また、横田と今井及び波田で名号軸を確認している。

五 播隆

播隆は、槍ヶ岳を開いたことで知られる浄土宗の念仏聖である。初めて槍ヶ岳に登ったのは、文政九年といわれるが、阿弥陀如来と観音・文殊の両菩薩を安置し開山をなしたのは二年後の文政十一年である。

播隆は、文政五年に飛騨国の杓子窟を拠点に笠ヶ岳を再興しているが、その笠ヶ岳山頂で御来迎(ブロッケン現象)を体験し、阿弥陀如来が現れた方向に見えた槍ヶ岳の開山を決意したという。その時拠点としたのが大村玄向寺の女鳥羽山で、参道には播隆の像とともに天保十一年の紀年銘のある名号塔が建っている。播隆は、開山を成し遂げた後も、天保十一年まで、頂上へのルートに鉄鎖を掛けるため勧進を行っている。その間、播隆は槍ヶ岳念仏講を広めており、島内青島の播隆念仏講と今井西耕地の柳原倶楽部では今も講が続けられている。播隆は小倉から槍ヶ岳に登っており、青島は玄向寺からの経路に位置している。今井には播隆が鉄鎖の設置を終えて美濃に帰るときに立ち寄った記録がある。

六 その他

これ以外にも、紀年銘と揮毫者銘のある独特の書体の名号塔が確認されているので、拓影を添えて紹介する。



善一信光

全久洞門

順誉 (玄向寺)

妙哲行者 (波田上海渡)

即誉了道

即誉了道 波田上海渡にある。紀年銘と揮毫者銘がそろって確認される名号としては市内で最も古く明和五年(一七六八)の建立で、同じ年月を刻んだ「當村講中」と刻まれた名号塔と並んでいる。この場所には、ほかに徳本、徳住、妙哲と合わせて五基の名号塔がある。

妙哲行者 紀州出身の妙哲の名号塔が安曇と波田に二基ずつ確認された。稲核守桂寺墓地のものが安政三年(一八五六)と古く書体が異なるが、残る三基は文久二年(一八六二)、三年で独特の書体が確立される。

順誉 伊勢町の浄土宗寺院浄林寺の二十六世順誉の名号塔が三基ある。場所は、岡田神沢(寛政十三年・一八〇一)、善昌寺山門前(文化二年・一八〇五)、玄向寺境内(文化八年)である。玄向寺の名号塔には「當寺十四世順阿(花押)」とあるが、これは順阿が、玄向寺が浄林寺の末寺となつてから十四代目の住職に当たることを意味している。

全久洞門・吉文 中山の中和泉(洞門・天保十年)、里山辺下金井の薬師堂(吉丈・嘉永六年・一八五三)に戸田家の菩提寺である全久院の住職が揮毫した名号塔がある。

このほかにも、紀年銘の無いものも含め、博労町十王堂跡の泰道、中山島内の善一信光、里山辺荒町の常安東流、入山辺駒越の無庵、神林町神の佛磨など、独特の書体の名号塔が多数あるが、紙幅の都合で割愛する。

第三節 念仏講・念仏会アンケート調査の結果

市内における念仏講の存続及び念仏会の開催の現況を調査するため、アンケートを実施した。アンケートは、地区公民館または地区ごとに組織されている歴史文化基本構想策定のための文化財調査組織を通じて行った。アンケートでは、念仏を称える行事の実施状況、行事の実施時期、行事に集う人、行事に用いる道具について調査した。具体的な調査項目は次のとおりである。

設問1 念仏を称える行事を行っているかについて次のなかから選択

ア 町会行事として行っている。

イ 町会行事ではないが、行っている仲間(講)がある。

ウ かつては行っていたが、今は行っていない。

エ 行っていない。

設問2 念仏会を行うのはいつかを記述

設問3 念仏会に集うのはどういう人か記述

設問4 (かつて行っていたという回答について)いつごろまで、どういう形態で行っていたか記述

設問5 念仏行事に使う道具を次から選択

名号(南無阿弥陀仏)軸、涅槃図、大数珠、伏せ鉦、その他(記述)

念仏講・念仏会に関するアンケート調査

町会名 _____
回答者 _____

設問1 貴町会では、念仏(南無阿弥陀仏)を称える行事(=念仏会)を行っていますか。
ア 町会行事として行っている。(⇒設問2、3、5、6へ)
イ 町会行事ではないが、行っている仲間(講)がある。(⇒設問2、3、5、6へ)
ウ かつては行っていたが、今は行っていない。(⇒設問4へ)
エ 行っていない。(質問は終わりです。)

設問2 念仏会を行うのはいつですか。(複数行っているところは全てお答えください。)

設問3 念仏会に集うのはどういう人ですか。

設問4 いつごろまで、どういう形態で行っていましたか。
ア _____年頃まで、町会で行っていた。(⇒設問5、6へ)
イ _____年頃まで、町会内の一部の仲間で行っていた。(設問6、6へ)

設問5 念仏行事に使う道具として伝えられているものは、どのようなものがありますか。該当するものを、すべて○で囲んでください。
名号(南無阿弥陀仏)軸 涅槃図 大数珠 伏せ鉦 その他()

設問6 念仏会はいつごろから行われていますか。分かる範囲でお答えください。

ご協力ありがとうございました。道具等を所有する町会には、現地に調査に伺わせていただくことがあります。差支えがなければ、ご敬承いただける方のお名前とご連絡先をご記入願います。

お名前 _____
ご連絡先(電話番号等) _____

図2 アンケート用紙

設問6 念仏会はいつごろから行われているか記述

アンケート用紙は図2のとおりである。

このアンケート結果をまとめたのが35・36ページの一覧表である。松本市内において、特定の集団で念仏を行っている、またはかつて行っていたという回答が一二件あった。その内訳は、現在行っているのは八十一件で、町会またはそれに準ずる地縁団体で行っているものが五十二件(平成二十六年に復活した一件を含む)、講など任意の仲間で行っているものが二十八件である。かつて行っていたのは三十二件で、地縁団体が十六件、講などの仲間が十六件である。アンケートが町会長にわたるケースが多いため、町会あるいはそれに準ずる常会等で行われている行事はほぼ把握できるものの、梓川横沢第二町会の事例のように、「代々住んでいる人」の仲間で行われている行事は、新しく住民になった方が町会長をしている場合、行っていることを知らずに「行っていない」と回答されたところが相当数あり、講などの仲間で行われている行事の数値は、実際にはさらに増えるものと思われる。

行事の実施時期では、彼岸、とりわけ春の彼岸の中日が多く、二月八日または三月八日の「八日念仏」がこれに次ぐ。ほかに十月または十一月の「お十夜」も多くの地域で行われている。また、毎月行っているという回答が入山辺に一方所、冬期に毎月行うという回答が奈川に二カ所見えるほか、年に四回以上日を決めて行っているという報告もある。

行事に集う人に目を向けると、女性とするとところが多く、島立地区の八日念仏は子どもが行っている。また、女性が日を決めて集まるところでも、八日念仏は町会全体で行うという回答もある。

念仏の道具では、回答数の半分以上にあたる六十八件で大数珠を保有しており、合わせて伏せ鉦を持っているところが多い。また名号軸もおよそ三分の一に当たる三十八件が所有していると回答している。「南無阿弥陀仏」の名号軸をかけ、鉦の音頭に合わせて大数珠を回しながら念仏を称えるところが四十カ所近く見られるのである。しかし、その数は年々減少していることは間違いない。今年を最後に取り止めとしたというアンケート結果もあった。また、年に何回か取り組んでいたところでも、回数を減らし一回だけとなった例が多い。

今回のアンケート調査の結果では、念仏を称える行事は大きく二つに分けることができ、これは『農村信仰誌』の大村雪中の項でも指摘されているとおりで、「八日念仏」と「十夜念仏」などムラの年中行事として行われている行事と、これとは別にトーヤを決めて行う念仏講などの仲間の行事がある。しかし、多くの地区で念仏講の行事が公民館で行われるようになり、両者の区別がつきにくく

なっているようである。

今回のアンケート調査の結果では、二月八日または三月八日頃に念仏を行っているまたはかつて行っていたという回答が十七件あった。行事の名称は「八日念仏」あるいは「お八日」である。二月八日は、事八日あるいは事始め、事納めなどと呼ばれ、全国で様々な行事が行われている。行事が多様化しているのは、十二月八日と一対で事始めと事納めと呼ばれる場合の正月期間最後のイエ行事と、この日訪れる悪神を防ぐムラの行事が混在しているためである。本市の行事でも道祖神の祭りや習合した前者と念仏と習合した後者が混在しているとみられる。八日の日に餅を搗いて道祖神に供えるところは本市にも多いが、事八日の全体像については今回の調査の目的ではないので、ここでは二月八日に念仏を行う理由について考えてみたい。

二月八日に念仏を行うのは全国的にも珍しく、曹圭憲の「コト八日」の祭祀論的研究によれば、松本市のほかには、東日本では福島県白河市、同鏡石町、茨城県常陸太田市、同土浦市などに見られるくらいで、県内でも飯田市と喬木村で行われる「事念仏」くらいであろう。

アンケートの回答からは分からないが、市の重要無形民俗文化財に指定しているものなど、これまでの調査で判明したものを加えれば、二月八日または月遅れの三月八日頃に行われる念仏行事は二十カ所を超える。行事の名称はアンケート結果では「八日念仏」が多いが、実際には「お八日」と呼ばれることが多い。行事の形態は、トイヤや公民館に集まって数珠を練って念仏を称えるところと、各戸を回って念仏を行うところに分かれる。各戸を回って念仏をする島立の荒井や堀米および町区とかつては各戸を回っていたという里山辺の兎川寺では、小学生が行事を行っている。飯田市長久堅周辺の事念仏も、子どもたちによって行われており、共通点が見られる。一方、公民館等に集まって念仏を行うところは、町会の老若男女が集まるところと、女性が集まるところに分かれる。

いずれも共通しているのは、輪になって百万遍の大数珠を練って念仏を行う点で、大数珠の無いところでも藁で縄の念珠をない、輪になって念仏を称えている。松本市重要無形民俗文化財である「両島のお八日念仏と足半」では、この日訪れる悪神をムラに入れぬよう、大きな足半草履を作ってムラ境にかけるのであるが、それに先立って公民館で等順の名号軸をかけ、輪になって百万遍の大数珠を回しながら念仏を称えている。同じく市指定の「入山辺上手町の貧乏神送りと風邪の神送り」でも、依代である人形を乗せるために藁馬を作り、子どもらに引かれてムラ内を巡った後に、ムラ境で焼き払われる。ここでも、引回しに出る前に藁で作った念珠を回しながら念仏を称えている。

四賀地区の五常では、春の彼岸に同様の行事を行っているところが見られ、そ

の範囲は隣接する安曇野市明科に及んでいる。落水の法音寺と井刈の倉掛であるが、倉掛ではこの行事を「ヒヤクマンペー」と呼び、トイヤに集まり、藁で馬と人形を作った後、その藁馬等を中央にして等順の名号軸の前で百万遍の大数珠を回しながら念仏を称え、終わると数珠で藁馬等を掃出し川に流している。

一方で、秋の念仏として行われるお十夜には、お寺の住職が招かれることが多い。先の八日念仏では、お寺の住職を招くのは「今井下新田の八日念仏と足半」だけであるが、お十夜を行うと回答した十七件のうち三件でお寺の住職を導師に招いている。お十夜は、天台宗や浄土宗の寺院で行われる「十日十夜法要」が民間に広まったもので、寺院では十月または十一月の五日から十四日にかけて行われるが、民間ではその初日と最終日、あるいは最終日の一夜に限って行われる。

その他に、町会等で念仏が行われるのは、釈迦の誕生を祝う灌仏会、釈迦入滅の日の涅槃会があげられる。花堂と誕生仏は多くのお堂や町内公民館で見かけられ、かつては多くの町会でお花祭りが行われ、御供として甘茶がふるまわれていたのである。また、涅槃図の所有も十二件報告があり、「やしようま」を作ったのであろう。また、報告が見られた。入山辺の東桐原では、やしようま(涅槃会)が月遅れの八日念仏といっしょに三月初めの日曜日に行われ、涅槃図をかけて鉦の音に合わせ百万遍の大数珠を練りながら念仏を称え、終了後にやしようまで茶話会が開かれている。

念仏講の行事としては入山辺の宮原で毎月二十五日に女性が公民館に集まり念仏をする「ニーゴカイ」の報告があり、奈川の神谷では十月から四月にかけて二カ月に一回、同曾倉では十二月から五月まで毎月、同保平でも十一月から三月まで毎月、高齢者や女性によって念仏講が開かれているという報告があった。「月念仏」と刻まれた念仏供養塔は、四賀に二基確認されただけなので、元々、毎月念仏講を開いていたところはそんなに多くはないのであろう。しかし、涅槃会や春秋の彼岸、盆、灌仏会やお十夜など、定期的に開催されていた念仏講も、時を経るごとにその頻度を減らし、解散されていくという流れがうかがえる。

民間の念仏行事の目的は、大きく二つに分かれる。一つは極楽往生や追善といった個人ないしはイエの祈祷で、彼岸や盆に行われるものがこれに当たる。今一つは共同体による祈願で、八日念仏がその代表である。共同体の行事には、後に本来は寺院の行事だったお十夜や涅槃会、お花祭りが加わり、複雑な様相を呈するに至った。本来は町会等の共同体で実施されるべき八日念仏が念仏講によって行われているのは、共同体が念仏講に行事を委ねたためであり、子どもや女性が各戸を回って念仏をするのはその名残であろう。また、秋彼岸に比べ春彼岸に行事が多いのは、八日念仏等の共同体の行事と習合したためと考えられる。

アンケート結果一覧表

区分記号

- 町会またはそれに準ずる単位で実施
- 町会またはそれに準ずる単位でかつて実施
- △ 町会以外の仲間て実施
- ▲ 町会以外の仲間てかつて実施

No	地区	町会	区分	講名・集う人	什物等	備考
25	笹賀	神戸新田	△	子ども	大数珠	春分の日(春彼岸)
24	笹賀	下小俣	○	女性	大数珠	
23	今井	西耕地	△	性	名号軸(播磨・徳住)、大数珠	春の彼岸、十年前頃までは秋の彼岸にも行った
22	今井	下新田	○	柳原倶楽部、女	大数珠、伏せ鉦、木魚	八日念仏と春・秋の彼岸
21	今井	中沢	▲		等順名号軸、大数珠、伏せ鉦	平成二十七年まで
20	今井	上新田	●		無し	平成二十二年まで
19	神林	町神	○		大数珠、伏せ鉦	十一月の山の神の祭日
18	神林	南荒井	△		名号軸	かつては五つの講があったが三つは解散
17	神林	南荒井	△		名号軸	かつては五つの講があったが三つは解散
16	神林	下神	○	北部	名号軸	
15	神林	下神	△	西部赤羽同姓	名号軸	他に、東部に名号軸・大数珠・伏せ鉦、北部に名号軸がある
14	和田	境	▲		大数珠、伏せ鉦	八日念仏、七草会
13	和田	下和田	○		名号軸、涅槃図、大数珠ほか	春分の日(春彼岸)
12	和田	衣外	○		名号軸、大数珠	お十夜、やしうま
11	新村	下新北	○		伏せ鉦ほか	庚申堂、八日念仏、お花祭り、お十夜
10	新村	下新南	△		涅槃図、大数珠	阿弥陀堂、八日念仏
9	新村	安塚	※		涅槃図、大数珠、伏せ鉦ほか	※お十夜を復活
8	新村	東新	△		御花堂と誕生仏	大日堂、お花祭り、お盆、お十夜
7	新村	北新中	△		涅槃図	信入院のお十夜
6	島立	町区	○	小学生と役員	大数珠	一月
5	島立	堀米	○	子どもと役員	大数珠、伏せ鉦(失くした)	堀米新田、八日念仏、二月第一日曜日
4	島立	荒井	○	年生	大数珠	
3	島内	山田	●		名号軸、涅槃図、伏せ鉦	昭和三十八年頃まで(お十夜)
2	島内	南中	●		名号軸、大数珠、伏せ鉦	明治三十〜四十年頃まで
1	島内	東方	▲		涅槃図	一九六〇年頃まで

54	入山辺	原・既所	○	既所(全体)	大数珠、伏せ鉦	八日念仏
53	入山辺	千手・駒越	○	千手(全体)	大数珠	二月八日、村中
52	入山辺	千手・駒越	○	千手(女性)	名号軸	二月二十一日の四回 女性
51	入山辺	千手・駒越	○	駒越	名号軸	春分、五月七日、秋分、十月七日、十月十四日の五回、女性
50	入山辺	舟付・宮原	○	宮原(二五会(二一ゴリカ)	名号軸、伏せ鉦	五月七日、九月二十三日、十月七日、三月
49	入山辺	舟付・宮原	○	舟付	大数珠、伏せ鉦	二月八日
48	入山辺	西桐原	○	第四常会、女性	名号軸	四月の花見と忘年会
47	入山辺	西桐原	○	第三常会、女性	名号軸二本	四月の花見
46	入山辺	西桐原	○	第二常会、女性	名号軸二本	四月と八月
45	入山辺	西桐原	●	第一常会、女性	名号軸二本	平成二十二年まで
44	入山辺	西桐原	○	町会	大数珠	三月八日前後の日曜日
43	入山辺	東桐原	○		播磨名号軸、涅槃図、伏せ鉦	三月の上旬の日曜日、十月中旬の日曜日
42	入山辺	南方	○		名号軸、大数珠	三月八日、昭和五年頃から
41	里山辺	南小松	○		大数珠	毎年二月八日
40	里山辺	林	○	林加助講	現覚名号軸	十一月二十三日(今は大高崎と合同)
39	里山辺	林	△	大高崎加助講	現覚名号軸、等順名号軸、鉦鼓、撞木	二月八日、大数珠は公民館にあり
38	中山	和泉	▲	中和泉常会六組		いつごろまでか不明
37	中山	和泉	▲	中和泉常会三組	大数珠	昭和四十年頃まで、講
36	中山	和泉	○	中和泉常会二組	大数珠	三月(組と同じ講)
35	中山	和泉	○	中和泉常会二組	名号軸、鉦	彼岸前後(三月)
34	中山	和泉	○	性和泉常会、女	大数珠	三月
33	中山	埴原西	○	尾池	名号軸、伏せ鉦	尾池地区、九月の日曜日
32	中山	埴原南	▲		大数珠	二〇〇〇年頃まで、講
31	中山	埴原北	○	お薬師様	大数珠	五月中旬、十一月中旬
30	内田	第五	●		大数珠	北河原堂で五十〜六十年前まで
29	内田	第四	△		大数珠、伏せ鉦、御礼印?	三月
28	内田	第三	△		涅槃図、大数珠、伏せ鉦	三月八日
27	寿	百瀬	▲		名号軸、涅槃図、大数珠	
26	芳川	村井	▲		百万遍の軸、大数珠、伏せ鉦	観音講は存続

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	
四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	庄内	田川	城北	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	岡田	岡田	岡田	岡田	岡山	入山辺	入山辺	入山辺
穴沢	藤池	長越	原山	原山	原山	河瀬	小岩井	新家町	渚木村	沢村	横田六	横田五	三物社一・二・三	大村南	大村北・中	二	水波	原	洞	三才山	東区	東区	東区	塩倉	伊深	海	海	海	
○	▲	●	▲	△	△	○	○	△	△	○	●	●	○	▲	○	▲	▲	△	△	○	△	▲	▲	△	△	△	○	○	
			向原	上平	下平		町会役員、氏子、伍長		浅輪同姓				女性の有志		成人女性・男性				女性と家長	講演同	小日向常会	矢語、女性	田中、女性	次郎丸、女性			一の海 市川姓の女性	大仏・一の海	大仏・一の海
ふせ鉦	名号軸、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦、版木	大数珠、伏せ鉦、版木	大数珠、伏せ鉦、版木	大数珠	名号軸、伏せ鉦	名号軸、名号塔	名号軸、大数珠、伏せ鉦	大数珠		名号軸、伏せ鉦	名号軸、伏せ鉦	名号軸、伏せ鉦	大数珠		名号軸と伏せ鉦があったが行方不明	鉦	大数珠	大数珠	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦(行方不明)	大数珠	名号軸、涅槃図、大数珠	名号軸	伏せ鉦	伏せ鉦、絵図	伏せ鉦、絵図	
十一月十四日、不幸のあった家が四十九(卍)のお供え(餅)を上げる	二〇一三年まで	時期は不明		彼岸の中日	彼岸の中日	三月の町会総会後	十一月二十三日	十月末か十一月初め	二月八日	十人くらい		平成二十二年まで、庚申様から念仏講に変わった	女性有志、春・秋彼岸	平成二十年頃まで、道具は玄向寺に預けてある	三月八日	大正末まで	昭和六十年頃まで町会で、その後平成十年頃まで有志で	三月二十一日	秋彼岸		常会三役	春秋彼岸に各戸を回ったが、今は春に公民館で	春秋彼岸に各戸を回った	春彼岸、昭和五十年頃まで	海福寺で春秋の彼岸に、別に庚申講あり	女性の話がいくつかある	春秋彼岸に近い日	春秋彼岸	四月八日、旧十月八日・十五日

112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84		
波田	波田	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	奈川	安曇	安曇	安曇	安曇	四賀	四賀		
八区	六区	横沢第二	横沢第一	南大妻第二	南大妻第一	北大妻第三	上角	下立田	保平	入山	田ノ堂	追平	大平	曾倉	川浦	神谷	黒川渡和手	黒川渡向	古宿	金原	寄合渡	屋形原	大野川	稲核	鳥々	大野田	井刈	落水		
△	●	○	△	△	△	○	○	△	△	●	△	●	●	○	●	○	○	●	○	○	○	●	●	▲	○	○	○	○	○	
原村耕地の講		人代々住んでいる	十三軒、二組の	合十区共同墓地組	降旗同姓			念仏講、女性	十一十一号の隣組	下組四軒の女性	専念寺檀家を除く女性と子ども	女性と子ども	一家の女性長老	高齢者	高齢の女性	高齢者	高齢の女性	高齢の女性	高齢の女性	高宮家二軒を除く女性・子ども	高宮家二軒を除く女性・子ども	高齢の女性	女性	高齢者クラブ	女性	六十・七十歳の	庚申仲間	倉掛百万遍	法音寺地区	
等順名号軸、伏せ鉦、撞木	梵字の軸	大数珠	名号軸、伏せ鉦	名号軸、大数珠	大数珠、伏せ鉦、御釈迦様の像	大数珠	大数珠	大数珠、木魚	大数珠、伏せ鉦	名号軸、大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦、十三仏の軸	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦、十三仏の軸	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦	大数珠、伏せ鉦、十三仏の軸	大数珠、伏せ鉦、十三仏の軸	大数珠、伏せ鉦、十三仏の軸	大数珠、伏せ鉦、軸	大数珠、双盤	大数珠	涅槃図、大数珠	涅槃図	等順名号軸、大数珠、伏せ鉦	法音寺地区		
春彼岸		春秋の彼岸、八月八日(百万遍)	毎年二月八日から三月八日	六月中旬の組合総会の日	春秋の彼岸	お十夜(十一月初旬)、お日待(七月初旬)	毎年九月二十三日	春秋の彼岸と十二月第二日曜日	十一月・三月に一回	平成二十四年まで	春彼岸の中日	春彼岸の中日、かつては二つの講があった平成の初めまで	昭和三十年頃まで	十二月・五月の月前半	平成二十二年まで	十月・四月の二カ月に一回、春彼岸	公舎堂	昭和六十年頃まで町会で	た	春彼岸の中日、かつては二つの講があった	春彼岸の中日	平成二十四年まで	春彼岸の中日	一九七〇年頃まで	九月中旬に一回、守桂寺	四月八日	初庚申、庚申仲間と同じ集まり	川に流す	春彼岸、薬で馬と人形を作り念仏をして川に流す	春分の日頃、薬で馬と人形を作り念仏をして川に流す

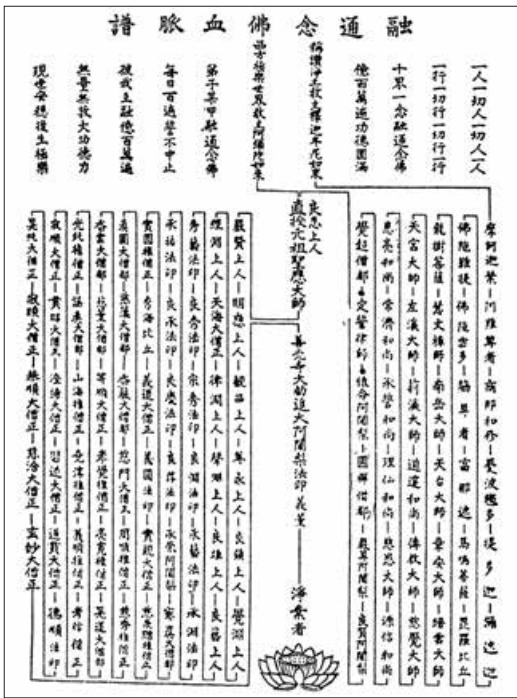
第四節 念仏塔と念仏行事

第一項 念仏講と百万遍

念仏供養塔のうち、全体の三分の一強に当たる三十三基が百万遍供養塔であることは先に述べた。三百万遍、五百万遍と刻まれたものを加えれば四十基を超える。そしてその数は、天明の浅間山噴火後に増えてきており、等順の活躍期と重なるのである。

これとは別に、「念佛一億萬遍」、「奉唱四億三万遍／念佛供養塔」、「念仏供養塔／唱六億二万返」という膨大な回数を刻んだ供養塔も見られる。これらの供養塔は文政十年（一八二七）あるいは天保四年（一八三三）と江戸時代後期に建立されている。これは総唱回数を刻んだものであろうが、最も少ない文政十年の四億三万遍でも、日課念仏を約した徳本の巡錫からでは、毎日欠かさず十万遍を称え続けてようやくたどり着く数字である。岡田山浦の矢作墓地にある寛政六年（二七九四）の名号塔の側面には「奉供養專修念佛千億萬遍／日課念佛二億五百萬遍／光明真言百萬遍」と記されている。「日課念佛二億五百萬遍」は到底一人でできる数字ではないので、講中で称えた融通念仏の数字であろう。

京都に疫病が蔓延した元弘元年（二三三二）に、功德院知恩寺第八世善阿空円が後醍醐天皇の勅により念仏百万遍を勤修し疫病を鎮めたことから「百万遍」の号を賜った。これが庶民に広まったものが百万遍である。この百万遍の念仏を、一人ではなく講中の仲間と合わせて行うのが融通念仏であり、百万遍の供養塔はこの記念として建てられたものである。



善光寺大勧進の融通念仏血脉譜

等順が配った

融通念仏血脉譜には「融通念仏毎日百遍」と毎日百回念仏を称えるよう記されている。融通念仏宗の開祖良忍は、「一人の念仏が万人の念仏に通じる」と説いた。それが、融通念仏血脉譜の冒頭に記された「一人一切人

一切人一人」（一人はみんなのために、みんなは一人のために）という言葉に表わされている。市内にも多く残されている百万遍の大数珠は、この理念を具現化する道具なのである。輪になって念仏を称え合うことで、一人百遍の念仏が、百人集まれば、融通念仏の原理で百万遍になるという仕組みである。

宮島潤子の『信濃の聖と木食行者』によれば、先の岡田山浦の矢作墓地にある寛政六年の名号塔に刻まれた二億五百万遍という名号の回数は、一日に称えた回数ということではなく、仮に講員が五十人とすれば、その「講員が、毎日百遍ずつの念仏を融通し合って、これを四百十日間」続けたことを記念して供養塔を建立したのだという。この名号塔からは、寛政年間に岡田山浦の西村豊長を中心に結成された念仏講が、天明四年（一七八四）に等順が簡略化した「融通念仏血脉譜」を受け、毎日百遍の念仏を称え続けていたことがわかるのである。

これが、等順や徳本が広めた念仏講の理念である。等順は、浅間山の噴火による被害と、それによる天候不順がもたらした飢饉を契機に念仏を広めた。徳本も等順とほぼ同時代の宗教者であり、修行の旅で天明の飢饉を経験しており、徳本が化益に参集した人々に与えた拝服名号札も日課百回の念仏の約束の印である。等順や徳本の名号塔は念仏講中の本尊であり、百万遍供養塔は念仏講中の記念碑なのである。その記念碑の中でもより深い信仰が読み取れるのが、「念仏供養塔／唱六億二万返」などと奉唱回数を刻んだ供養塔といえる。

第二項 八日念仏

平成二十一年を最後に講を解散した本郷地区の横田の念仏講の道具を調査したところ、「お庚申」、「お八日念仏」、「お十夜」と、行事ごとに道具を分けて保管されていた。そして、「お八日念仏」と記された包みには祐天の名号軸が二幅（一軸は写し）、「お十夜」と記された包みには等順と徳住の名号軸が保管されていた。昭和四十六年（一九七二）の本郷村の調査に「現在でも念仏講が春秋二度開かれているが、（祐天の軸は）損傷を虞て一回だけ取り出されている」とあることから、おそらくは春の「お八日」と秋の「お十夜」が念仏講の行事と認識されており、すべての名号軸が春秋の行事に用いられていたものを、名号軸の保護のため「お八日」と「お十夜」それぞれの行事で、専用として使用するようになったものであろう。

この春の行事とされる「お八日」は、松本市内では広く行われているが、松本市以外ではほとんど行われていない。松本市では、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている「松本のコトヨウカ行事」の構成要素として「八日念仏」が位置付けられ、『松本のコトヨウカ行事』調査報告書』でも一部を報告している。

コトヨウカ行事は、石造物でいえば念仏塔よりも道祖神との関係が深い。二月八日に「八日餅」といって餅を搗くところは長野県内に多いが、供える先は道祖神である。この習俗は長野県と群馬県に見られ、松本ではこの餅を道祖神が見えなくなるほどに塗り付けるところがある。

第三項 お十夜

永享年間に平貞国が、京都の真如堂で十夜念仏の修業をしている。これは、十日十夜念仏を称え続ける修行で、後に鎌倉光明寺から全国の浄土宗寺院に広まったといわれ、松本でも多くの浄土宗寺院で行われている。「お十夜」に寺院が関わっている理由もこのあたりにあるのだろう。

『徳川実紀』によれば、寛文五年（一六六五）に「僧侶市井に在て、法談すべからず。念仏講、題目講と唱へ、緇素集會する事あるべからずとなり」という法度が出され、僧侶が寺院を出て説法を行うことや、念仏講等で俗人と集會することが禁じられている。このため、等順も徳本も松本城下では生安寺を宿として念仏を広めている。念仏講を組織し、百万遍を行うことを勧めてはいるが、講中の集まりに向くことはご法度だったのである。

新村安塚では、お十夜の法要を復活し、専称寺の住職を招いて念仏を行った。百万遍の大数珠を回し念仏を称えたのであるが、かつての記録に目をやると、安塚では、数珠回しは古くから三月八日に薬師堂で行われていたといい、豆を百粒積んで数えながら、大きな数珠を右回りに百遍回したという。この薬師堂の境内と墓地には合計四基の名号塔が建立されており、そのうち一基には「講中」の銘がある。古くから念仏講が盛んだったのであろう。

お十夜に関連する念仏塔は、松本市内には見当たらない。お十夜の行事を念仏講で行うようになったのは、案外新しいことなのかもしれない。

第四項 釘念仏

安曇島々の共同墓地に、元文二年（一七三七）の紀年銘をもつ「四十九万念仏塔」と刻まれた念仏供養塔がある。これは、釘念仏あるいは釘抜念仏といわれる信仰に基づくもので、松本市内ではこの一基だけしか確認されていない。

閻魔大王は、地獄に落ちる衆生が増えたので、日光の寂光寺の覚源を仮死状態にして地獄のありさまを見せ、衆生を救うように託した。死後、四十九日は、体に一本ずつ釘を打たれて苦しみ、その釘は三十三年経たないと抜けまいという。しかし、生前に四十九万遍の念仏を称えれば、極楽浄土に往生できるといわれている。覚源は、蘇生し、この話を「釘抜念仏縁起絵巻」として著した。

これが釘念仏信仰の由来で、昔話でも語られるので聞いたことのある人も少

なくないだろうが、伝説の域を出ない。その起源は文明十三年（一四八二）とい、元禄五年（一六九二）に『寂光寺釘抜念仏縁起』として翻刻されたという。この縁起のなかに「人々死して、七々日すくる日、しろき餅を四十九そのふるは、四十九のふしふしに、うたる、釘を転して、此餅にうたしめんとなり」とある。すなわち、四十九日に餅を搗いて供えることで、釘をその餅で受け止められるというのである。

アンケート調査の回答によれば、四賀穴沢では、十一月十四日というのでお十夜の結願であろうか、念仏が行われている。このとき、「その年に葬儀のあった家が四十九のお供えを持ちよりお堂でなげて集まった人で拾った」と報告されている。

宮島潤子は、「日光山寂光寺釘抜念仏信仰―絵画および石造図像による比較研究―」のなかに、『日本石仏図典』の「釘抜念仏供養塔は佐渡に約二十基見られるのみ」との記述を受け、現地調査をした結果二十四基を確認したという。そのなかで最も古い紀年銘が元文四年で、島々の供養塔と同時期にあたる。松本市周辺でも、百万遍の融通念仏に先立ち、四十九万遍の釘念仏の信仰があったようである。

第五項 その他の念仏行事

東部地区の林昌寺墓地に「四十八夜」と刻まれた延宝九年（一六八二）の、寿赤木の桃水寺跡に「四十八夜塔」と刻まれた貞享の紀年銘をもつ名号塔がある。これらは、阿弥陀仏の四十八願にちなんで、四十八日、毎夜念仏を称え続ける法会のことである。庶民の念仏行事ではなく、浄土宗などの寺院で勤修されるいわゆる別時念仏である。

里山辺薄町と入山辺西桐原の桐原善光寺には、釈迦の涅槃の日である「二月十五日」の日を刻んだ名号塔が、井川城橋南側には「二月佛涅槃日」と刻んだ名号塔がある。また、梓川の小屋と横沢に「二月十四日」という涅槃前日の日付が刻まれた念仏供養塔もあり、横沢の文化財調査では、縦三四〇、横二九五センチメートルもある大きな涅槃図が報告されている。これは廃仏毀釈で廃寺となった安養院に伝わったもので、涅槃会は安養院で行われていたと思われる。

また、島内青島の墓地には「四月八日」の日が刻まれた名号塔が、四賀板場や梓川氷室の衣堂、波田の下波田薬師堂にも「四月八日」と刻まれた念仏供養塔があり、新村安塚の専称寺門前の梵字供養塔には「念佛講中」の建立者銘とともに「四月佛誕生日」と刻まれている。

これらのように、念仏塔の建立日にも意味のあるものが見られ、涅槃会や灌仏会にも、念仏講などにより念仏が修業されていたであろうことが想像される。

第四章 調査のまとめ

松本市は、明治の初めに廃仏毀釈が断行され、多くの仏教関係の資料が失われた。そのなかにあつて、念仏を基調とした行事は意外と多く、今も人々が公民館等に集まり、百万遍の大数珠を繰って念仏を称え、住民同士の交流を深めている。今回行った調査は、これまでの調査結果をもとに行つた石造物調査の補足と、アンケートによる念仏行事の調査の二つである。石造物の調査では、名号塔と念仏供養塔を念仏塔とし、これに念仏講中が建立した石造物を加えて、地区ごとに抽出した(以下、「念仏塔等」という)。その念仏塔等を、地区を越えて、建立年代、建立者等の面から整理し、アンケート調査した念仏行事と照らし合わせてみた。ここに、その結果をまとめておく。

その前に、調査対象とした石造物の乏しい時代について、念仏信仰の様子を文献等から補足する。本市における念仏信仰の歴史は、弾誓に始まる。直接その事跡を伝える文化財は本市には残っていないが、寿百瀬の正念寺は、慶長年間に弾誓が諏訪に巡錫した折に掛錫して常念仏を始めた常照庵がその前身と伝えられている。弾誓は、徳本も手本とした木食の念仏聖で、長野県内では諏訪市の唐沢阿弥陀寺(現在は正願寺が管理)に多くの遺物が伝えられている。また、松本市には弾誓三世の長音が開山した念来寺があり、常念仏と作仏の道場として知られ、多くの修行僧がいたという。この時代は、大名や有力商人を後見として、寺院や山中において宗教者が庶民のために念仏修行していた。

松本市における庶民の念仏信仰の萌芽は、石造物から見ると、延宝年間になつてからといえる。このころから念仏塔等の建立がはじまるが、庚申塔を兼ねるものや造立者銘に庚申講と刻まれるものが多く、その母体は庚申講だったと推定される。五基の名号塔が確認されている延宝八年(一六八〇)は大飢饉のあつた年で、年貢の納め方について長尾組の百姓と代官の間で故障が起きており、この流れが「加助騒動」といわれる貞享騒動へとつながっていく。念仏信仰の始まりは、このような社会情勢によると考えられ、里山辺林などで耳にする「加助念仏」という行事の名称もいわれのあることのように思われる。

念仏塔等の造立者として「念仏講中」という表現が確認される最初の事例は、寛文八年の梓川杏の地藏菩薩像であるが、一般化してくるのは元禄に入ってからで、庚申講と念仏講が分化していくのがこの時期とみられる。この背景として考えられるのが、天和元年(一六八一)に念来寺六世として入院した明阿の影響である。明阿は、途絶えていた念来寺の常念仏を再興し、元禄十年に常念仏二万日回向の法要を執行している。大町市の弾誓寺のように一万日ごとの節目に建立した回向塔こそ残っていないが、「信州筑摩郡松本領光明山念来寺常什物記全」には、

安永五年(一七七六)の五万日回向までの記録がある。庶民救済のため、寺院で常念仏が行われ、節目ごとに回向の法要が営まれていたのである。また、明阿の弟子に当たる木食山居が千体仏を刻み与え始めたのもこの頃で、称名念仏の本尊としての需要があつたことがうかがえる。

名号塔建立の二回目のピークである一七三〇年代に、安曇島々の共同墓地に釘念仏の供養塔が建立されている。これは今回の調査で発見された成果の一つであるが、念仏講などの集団で行う融通念仏を広めるため、日光の寂光寺で元禄年間に始まつた釘念仏が松本にも伝えられていたことがわかつた。佐渡では幕末まで見られるが、その起りには松本と同時期である。佐渡は弾誓が悟りを開いた土地で、念来寺を拠点とした弾誓派関連のつながりがある。念仏が宗教者から庶民の間に広がっていったのがこの時期とみられる。

名号塔建立の三回目のピークが等順の活躍期と重なり、浅間山の大噴火と天明の大飢饉による被害者を救済するための勸進を行い、百万遍という手法を用いて念仏を庶民に浸透させていったことは前章で詳述した。松本市において百万遍の念仏が行われる代表的な行事は、八日念仏とお十夜である。なかでも、八日念仏は松本市特有の行事で、二月八日に訪れる悪神を念仏の力によつて防ぐために百万遍の念仏が行われている。疫病退散に効果のある百万遍を、悪神が訪れるとされる日に勤修する利になつた行事であるが、この日に悪神除けと言つて大数珠を繰るのは、松本市のほかは飯田市周辺と福島県、茨城県の限られた地区だけと意外に少ない。

等順が念仏を広めるために松本に留錫したのは、寛政六年(一七九四)から始まる西国への出開帳の旅の帰途で、寛政十年五月十一日からの一週間である。本町にあつた浄土宗の生安寺を宿寺として御開帳を行っている。五月十一日の五ツ半(午前九時頃)に木曾から村井宿の山村家に入り、八ツ(午後二時頃)に大庄屋の倉科家に到着している。翌十二日から御開帳を行っているが、この際に「御血脈」の授与を行つており、初日には百人ばかりに授与したと記録がある。御開帳は十六日まで五日間にわたり、血脈譜の授与は「昨日ノ如」などと記されているので、都合五百人ほどが血脈譜を授与されたようである。また、十三日の村井宿本陣山村氏のご機嫌伺いの記事の後に「百万遍御授等有之」とあるが、これは大数珠の授与であろうか。十七日には明け六ツ(日の出)に伊那に向けて松本を出発するが、塩尻までの道中で「念佛講中多人数御見送り」とあり、等順の巡錫以前に念仏講が組織されていたことがわかる。

西国開帳の旅の帰途とはいえ、このとき等順は中山道から松本に入り、松本からは伊那街道を飯田に向かい元善光寺で御開帳を行い、秋葉街道を高遠、諏訪とたどり、小諸から北国西往還を経て、六月二十二日に善光寺に帰着している。西

国勧進の帰路、信州で念仏講を広めることが、あらかじめ計画されていたことがわかる。なお、等順揮毫の名号塔は寛政二年（七九〇）から確認でき、四十三基の等順名号塔のうち三分の一に当たる十四基が寛政九年以前の建立であり、すでにこの時点で等順の名は広く庶民に知られていたであろう。等順の名号塔の建立は、飢饉で困窮した人々を救済したことに對する感謝の表れだったのでないだろうか。

この後も、名号塔の建立は高い水準を保ち続ける。その背景には徳本の巡錫があり、徳本の揮毫した名号塔は等順を大きく上回る七十三基を確認している。徳本は紀伊国出身の念仏行者で、等順とは十六歳の年の差がある。弾誓や澄禪をめざしたといい、寛政六年には弾誓が入寂した京都大原の古知谷阿弥陀寺を、享和三年（一八〇三）には澄禪の修行した近江の平子山を訪ねている。文化十一年（二八一四）に増上寺大僧正典海の招請で江戸に上り、教化の旅が始まる。教化先は相模に始まり、文化十三年には半年を費やして信濃から北陸の教化を行っている。相模の小田原では弾誓が修業した箱根の塔之沢阿弥陀寺を拠点とし、信濃巡錫でも諏訪の唐沢阿弥陀寺に長期にわたり留錫している。善光寺を拠点に北信の教化を終えると、大町を経由して松本に向かっているが、これは弾誓寺に寄ることが目的だったと考えられる。徳本の信濃巡錫は、弾誓の足跡をたどることに大きな意味があったのではないだろうか。

松本の教化で徳本が滞在したのも、等順と同じ生安寺である。そして、念仏を広める手段も、等順と同じく百万遍である。空円が念仏百万遍を勤修し疫病を鎮めた際、後醍醐天皇から「百万遍」の勅額と空海筆の利剣名号を賜ったという。徳本が日課念仏四万遍を約した者に利剣名号を授与しているのも百万遍を意識しており、講中名号の授与からは融通をもって百万遍を達成することを勧めていることがわかる。生安寺は、廃仏毀釈で廃寺となったが、明治十六年（一八八三）にいち早く再興されている。しかし、昭和三十一年（一九五六）に本町近代化事業により蟻ヶ崎の現在地に移転し、山門と本堂は安曇野市明科の宗林寺に移されている。その本堂の正面に転法輪という数珠車がある。これも百万遍念仏の道具で、箱根の阿弥陀寺の本堂にもある。一、〇八〇の数の数珠であれば、念仏を称えながら千回も回せば百万遍になるという便利な道具である。

次に、播隆の念仏布教についてみると、等順や徳本とは異なっていることがわかる。等順と徳本は寛文五年（一六六五）の法度を守り寺院で教化を行っているが、播隆は庶民を従えて槍ヶ岳に登り阿弥陀如来との結縁を行っている。この背景としては、修験者による山岳登拝の普及があげられる。天明五年（一七八五）に尾張出身の覚明が御嶽で軽精進の登山を行っている。浅間山噴火から間もない年のことであるが、寛政四年に普寛が王滝口を開くと生まれ変わりを求め山に登る人が増えていった。念仏聖である播隆が修験者と異なるのは、山に登る目的を阿

弥陀如来と縁を結ぶため、すなわち御来迎を拝するためとしていることである。播隆も普段の念仏の本尊として名号を書き与えているが、講中が名号塔を建てた例は松本市にはない。

調査した念仏塔のなかで、最も多いのは、「南無阿弥陀仏」と刻まれた名号塔である。なかでも善光寺大勧進第七十九世貫主の等順と浄土宗の念仏行者である徳本の名号塔が相当数見られた。しかし、この数字が他の地域に比べて多いのか、あるいは少ないのかということは、現段階においては把握ができていない。徳本名号塔については、善光寺鏡善坊が『長野市の石造文化財』から合併前の旧長野市に六十九基を抽出している。また、諏訪市の徳本名号塔についても、諏訪市博物館が二十基の所在を報告している。これらの数字は、松本市以外にも、文化十三年の徳本巡錫のルートに数多くの名号塔が建立されていることを示している。今後は、他の自治体の石造文化財調査報告書を精査し、等順やそれ以外の名号塔がどのくらい建立されているのか、そしてそれは松本市の数と比べてどうなのかを検証することで、松本市の念仏信仰に関する歴史を明らかにしていきたい。

また、祐天、徳本、播隆といった浄土宗の高僧の名号塔がそろって確認されている今井地区の歴史の解明についても今後の課題である。特に徳本と播隆は今井を訪れていることが明らかで、その理由として浄土宗三祖の記主良忠の松本留錫があげられるが、中世にさかのぼる歴史の手掛かりは今回は得られなかった。

念仏行事については、ムラ単位で行われるものと、念仏講が行うものがあることがわかった。二月八日に訪れる貧乏神などと呼ばれる悪神を駆逐するための八日念仏は、本来、ムラ単位で行われるべき行事と考えられる。しかし、これも女性あるいは子どもが組織する念仏講に委ねられているところもある。二月八日に訪れる貧乏神を追い払う手段は百万遍の念仏で、この百万遍の念仏の融通を念仏講という専門集団に委ねているのである。

柳田國男は「念佛團體の變遷」のなかで、念仏講の機能を「喪に当たつての相互扶助」としているが、堀一郎が『民間信仰』で里山辺の例をあげて記すとおり、松本では多くの場合、「無尺等の経済扶助」も含めこの機能は庚申講が担っている。葬儀社で葬儀を行うことが多くなった今、庚申講は急速に廃れていった。こうしたなか、松本市において念仏行事が続いているのは、それが個のためではなく公に寄与しているためであろう。

二月八日に貧乏神がやってきて、ムラを不幸に陥れると信じている人はおそらくいないだろうが、こうして定期的に寄り合い、飲食をしながらムラについて語り合うことで、ムラの平穏が維持されているということのみならず、理解しているのである。融通念仏あるいは百万遍という教えは、共同体を維持していくための連帯の手法として受け入れられているといえる。

調査石造物一覽表

等順名号塔

No	地区	場所	建立年	名号塔の表の陰刻銘	裏または左右の紀年等	高さ (cm)
21	本郷	大村	雪の中川端	南無阿弥陀佛	寛政七乙卯二月日 / 雪中村 / 石工兵助	168
20	本郷	大村	北郷倉跡	阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政五癸丑二月廿八日	224
19	本郷	下浅間	信手交差点	阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政五丁卯十月吉日 / 村中 / 守矢兵助 ※折損 剥落	199
18	本郷	原	西原墓地	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 善光寺別當大勸進大僧都性谷等願拜書	寛政五丁卯十月吉日 / 村中 / 守矢兵助 ※折損 剥落	178
17	本郷	三才山	小日向乘師堂	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 善光寺別當大勸進大僧都性谷等願拜書	寛政七乙卯三月十五日	236
16	岡田	松岡	共同墓地	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛	天保二辛卯年四月 / 松岡村	154
15	岡田	塩倉	海福寺観音堂	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	天保二辛卯年四月 / 松岡村	138
14	岡田	東区	岡田神社西浦	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	享和四甲子二月吉日 / 田中村女講中	86
13	岡田	岡田町	大願寺跡	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	維時寛政十戊午年七月十五日當町中造立 / 光明山誓登拜書	235
12	岡田	伊深	石切場	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政九巳十月日 / 井深村中	235
11	中山	箱井丸山	丸山公民館東	南無阿弥陀佛 / 善光寺大勸進	寛政六年甲申十一月日	140
10	内田	第3	新田伝台	寛政八丙辰年 / 善光寺別當大勸進現住 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政十二庚申年二月彼岸	130
9	神林	川西	八幡社北の辻	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文化四丁卯三月日 講中	145
8	和田	中	観音寺	佛	庚子仲春吉辰 / 和田中郎	112
7	和田	和田町	無極寺	佛	文化四丁卯三月日 講中	184
6	新村	北新西	清浄院跡	信州善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	猛誓上人説的和尚(花押) 敬寫之 / 文政八乙酉年四月日 / 和田町村中 ※再建?	150
5	新村	根石	墓地	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文政二己卯年 / 清月彼岸	83
4	島立	小柴	小柴公民館前	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	享和四甲子二月八日	133
3	島立	町区	栄安寺境内	南無阿弥陀佛	當村講中 / 享和二壬戌年九月十五日	110
2	島内	北中	大日堂	南無阿弥陀佛	文化十四十一月吉日 / 五重二十一人	82
1	島内	新橋	川端観音堂	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文政四辛巳年建之 / 青島村	98

徳本名号塔

No	地区	場所	建立年	名号塔の表の陰刻銘	裏または左右の紀年等	高さ (cm)
2	島内	高松寺	文化15	南無阿弥陀佛 / 徳本(花押)	文化十五戊寅年二月十五日 / 高松村中	190
1	島内	高松寺	文化15	南無阿弥陀佛 / 徳本(花押)	文化四辛巳年建之 / 青島村	100
43	四賀	横川日影	文政11	南無阿弥陀佛	文政十一年 / 南無阿弥陀佛 / 十月十四日 / 念佛講中	91
42	四賀	取出	寛政6	南無阿弥陀佛	信州善光寺別當大勸進現住 / 大僧都性谷等願拜書 / 板場取出女中念佛講 / 寛政六甲寅十月	92
41	四賀	赤怒田	享和3	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	享和三癸亥十月	125
40	四賀	赤怒田	文化4	南無阿弥陀佛	念仏講中 / 文化四卯天	85
39	市街地	高宮郵便局西	寛政12	南無阿弥陀佛	寛政十二庚申年八月 / 高宮村中	87
38	市街地	笹部 墓地	不明	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政十二庚申年八月 / 高宮村中	107
37	市街地	井川城中	寛政13	南無阿弥陀佛	寛政十三年西龍集 / 二月下旬 / 講中	110
36	市街地	井川城橋南側	寛政12	南無阿弥陀佛 / 印	寛政十二庚申年二月彼岸	105
35	市街地	中条橋南	寛政12	南無阿弥陀佛 / 印	寛政十二庚申年二月彼岸	108
34	市街地	渚内城 松林	享和3	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文化元甲子年八月日 / 上渚村講中	105
33	市街地	渚内城 松林	享和3	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文化元甲子年八月日 / 上渚村講中	88
32	市街地	中上阿弥陀院	寛政8	南無阿弥陀佛 / 善光寺別	寛政八丙辰十月日	95
31	市街地	二筑摩神社の南	寛政5	善光寺別當大勸進 / 南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政八丙辰十月日	130
30	市街地	庄内墓地	寛政10	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政十戊午歳十月日 / 小池町 / 講中	95
29	市街地	博旁町十王堂	寛政6	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政十戊午歳十月日 / 小池町 / 講中	130
28	市街地	姫宮神社西	寛政4	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政四壬子年三月吉日 / 上村講中	80
27	市街地	沢村墓地	寛政11	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政四壬子年三月吉日 / 上村講中	111
26	市街地	沢村墓地	寛政11	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政四壬子年三月吉日 / 上村講中	90
25	市街地	元町中公民館	文化9	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文化九甲(以下埋没)	(61)
24	市街地	岡の宮町公民館	寛政2	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	寛政二庚戌年九月日 / 石工 勘藏	134
23	市街地	岡宮神社西	文化3	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	文化三丙寅年 / 二月辰良建之 / 和泉町 / 講	100
22	市街地	安原町十王堂	享和2	南無阿弥陀佛 / 大僧都性谷等願拜書	享和二壬戌年 / 八月	140

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	
笹賀	今井	今井	今井	今井	今井	神林	神林	神林	神林	和田	和田	和田	和田	和田	和田	和田	和田	和田	和田	新村	新村	新村	新村	新村	島立	島立	島立	島立	
巾下	北耕地	西耕地	南耕地	東耕地	堂村	梶海渡	下神	川東	川西	下和田	境	和田町	中	太子堂	南和田	殿	殿	衣外	蘇我	下新北	下新南	北新中	安塚	上新西	北栗	大庭	町区	荒井	
小侯観音堂	市場方	柳原	堀村	正覚院	十王堂前	公民館前	長久寺東	川東公民館前	塩原堂	二尊院	西善寺	無極寺	業師堂跡	聖徳院	真光寺	観音寺	萬年寺	共有墓地	忠全寺	庚申堂	阿弥陀堂	信入院	専称寺	墓地	神明社南	公民館裏	栄安寺境内	観音堂	
文化13	文化13	文政11	文政2	文政4	文政11	文化12	文政11	文政8	文化13	文化13	文化13	文政5	文政3	文政2	嘉永3	文化13	文政4	文政8	文政7	文政7	天保3	不明	文政10	文政7	文化13	文政11	文化15	文政10	
1816	1816	1828	1819	1821	1828	1815	1828	1825	1825	1816	1816	1816	1822	1820	1819	1850	1816	1821	1825	1824	1832	-	1827	1824	1816	1828	1818	1827	
南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛
徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	二十三年日課□益/南無阿弥陀佛	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)
文化十三丙子六月吉日/村中	文化十三丙子六月/下今井郷/市場組中	文政十一年八月/柳原中	文政二己卯二月吉日/南組中	文政四己巳十月八日/信心講中	文政十一戊子年二月日/上今井村中	文化十二乙亥年/六月日	文政十一戊子歳/三月吉日	文政八酉四月八日/施主	文政八酉三月	文化十三丙子年六月日	文化十二丙子天/村中	文化十三丙子六月二十六日/當邑中	文政五壬午年六月日/中村中	文政三庚辰年/二月十五日/當村講中	文政二己卯十月五日/願主/本村中/世話人(五人の名前)	(右)嘉永三庚辰七月二十三日/高□長定	文化十三丙子歳/六月吉日	文政四辛巳天/八月日	文政八乙酉年二月日	文政七甲申年十月穀日/小作兩新田中	天保三壬辰年/三月五日	行者/御化益一七日珠譽上人代/維持文政十丁亥年七月/當山廿四主進譽代/敬造建願五ヶ新村中	文政七甲申年八月/當村中	維持文化十三天子歳/六月二十九日	維時文化十三天子歳/六月二十九日	文政十一子年三月二十三日/當村中	文化十五戊寅三月造立/當村中	文政十丁亥歳三月日/荒井村	
136	143	165	126	117	285	180	156	130	77	156	127	160	140	130	148	87	158	187	165	160	128	100	235	168	195	160	(125)	104	

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32			
安曇	安曇	安曇	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	本郷	岡田	岡田	岡田	中山	中山	中山	中山	中山	内田	内田	寿	寿	寿	芳川	芳川	芳川	笹賀	笹賀			
稲核	島々	大野田	南部	南部	南部	南部	東部	東部	大村	松岡	伊深	岡田町	古屋敷	町村	名木	下和泉	下和泉	第5	第3	下瀬黒	上瀬黒	百瀬	野溝	村井	小屋	中二子	神戸新田			
守桂寺墓地	墓地	堂の前	笹部	征矢野公民館前墓地	出川	神田駒場共同墓地	善昌寺山門	浄林寺境内	玄向寺参道	共同墓地	山浦杏	大願寺跡	仁王堂遺蹟	栄珠庵	太子坂	生妻池端	二山バス停東	常楽寺	新田伝台	堂跡	吾妻橋東側	正念寺	松岳寺山門前	観音堂墓地	泉龍寺	慶林寺	観音堂			
文政6	天保11	文政3	文化15	文化12	文政8	文化13	文政11	不明	文化14	文政10	文政5	文化13	不明	文化14	文政7	不明	文化13	文政3	文化14	文政2	文政12	不明	文政3	天保3	不明	文化13	文政3			
1823	1840	1820	1818	1815	1825	1816	1828	-	1817	1827	1822	1816	-	1817	1824	-	1816	1820	1817	1819	1829	-	1820	1832	-	1816	1820			
南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛		
徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)	徳本(花押)		
維時文政六癸未天四月大吉日/施主當村中/願進社教習	天保十一子七月日/造立之	文政三庚辰九月吉日/講中	文化戊寅十一月/笹部村□	文化十二乙亥/先祖代々精霊	維時文政八乙酉	文化十三丙子年十月	文政十一戊子年十月吉日/再建主 大器善成 大和尙/明治廿五年辰七月十五日改	文化十四丁丑年二月廿八日/當山廿五世在	文化十四丁丑年二月廿八日/當山廿五世在	文政十年丁亥二月建/松岡村	文政五壬午年七月吉日	文化十三丙子歳六月廿八日於當寺/上人一日一夜念佛修行化益有之/倚而道俗時衆等此塔建立者也	維時文化十四歳丁丑初冬日/當郷中	和泉/神田/村中	文政七甲申年/八月日	和泉/神田/村中	文化十三子□□/下味泉邑	文政三庚辰三月日/講中	文化十四丁丑天/三月日/村中	文政三卯年十月廿五日	文政三卯年十月廿五日	中□□	文政十二己丑四月日/當村講中/世話人田	村中	文政三庚辰九月/當山十□□/□□	天保三辰三月日	上町念佛講	文政三庚辰年/初春立之/神戸新田村中	文化十三丙子六月廿九日御化益□開眼/同 寂政文元戊寅十月六日/隨堂代	文政三庚辰年/初春立之/神戸新田村中
168	232	202	107	155	108	110	100	120	117	152	115	235	107	146	109	132	140	110	117	138	170	137	141	110	124	116	143			

63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
笹賀	笹賀	笹賀	笹賀	笹賀	笹賀	笹賀	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井	今井	神林	神林	神林	和田	和田	和田
上二子	神戸	神戸	神戸新田	神戸新田	神戸新田	巾下	北耕地	西耕地	西耕地	東耕地	東耕地	東耕地	下新田	中沢	中沢	中村	堂村	上新田	町神	川東	川西	境	殿	衣外
庚申堂前	神戸神社前墓	長照寺境内	観音堂	観音堂	観音堂	小俣観音堂	北耕地公民館	櫻井家墓地	大機商店スタ ンD北	古田家墓地	正覚院	正覚院東	下新田公民館	田中家墓地	中沢公民館	「今井小学校 西」信号南	十王堂前	弥生坂	町神公民館前	川東公民館前	塩原堂	西善寺境内	観音寺境内	衣外共有墓地
寛政12	元禄9	嘉永4	文政3	享和3	享保20	不明	天保7	文化9	文化9	寛文2	寛文9	文化9	享和3	天明6	不明	不明	貞享3	享和2	弘化4	宝暦10	宝暦	貞享4	不明	不明
1800	1696	1851	1820	1803	1735	-	1836	1812	1662	1669	1812	1803	1786	-	-	1686	1802	1847	1760	-	1687	-	-	
南無阿彌陀佛	真心信士	南無阿彌陀佛	佛	南無阿彌陀佛	世相阿彌陀佛	(キリク)之南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	(キリク)之南無阿彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛	彌陀佛
寛政十二庚申十月日	元禄第九丙子八月十七日	嘉永四丁未三月日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日	享和二年七月廿七日
149	111	182	63	90	59	85	80	102	115	112	145	111	116	129	154	65	61	105	170	75	95	100	112	180

92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64
中山	内田	内田	内田	内田	内田	内田	内田	寿	寿	寿	寿	寿	寿	寿	寿	寿	寿	寿	寿	芳川	芳川	芳川	芳川	芳川	芳川	笹賀	笹賀	笹賀
中和泉	第5	第3	第2	第2	第2	第2	第1	小池	竹瀝	上瀬	白川	白川	白川	百瀬	赤木	赤木	赤木	赤木	赤木	赤木	村井	野溝	野溝	野溝	平田	平田	下小俣	今村
旧和泉街道沿	高礼場跡	新田伝台	内田運動公園	内田運動公園	内田運動公園	内田運動公園	内田のアカマ	小池公民館西	竹瀝公民館西	吾妻橋東側	百瀬氏庭	横内バス停北	白川公民館	正念寺	堂山	堂山	堂山	堂山	堂山	堂山	赤木公民館前	赤木公民館前	赤木公民館前	赤木公民館前	赤木公民館前	平田公民館前	平田公民館前	下小俣墓地
天保10	元文2	天明3	寛政4	不明	不明	寛政4	寛政4	嘉永7	不明	文化12	不明	享保3	安永2	元文5	延宝2	貞享元	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	文化5	安永7	寛政11	不明
1839	1737	1783	1792	-	-	1792	1792	1854	-	1815	-	1718	1773	1740	1674	1684	-	1810	1787	-	1831	-	-	1808	1778	1799	-	1768
南無阿彌陀佛	石牛伏寺	偏供養塔	寛政四壬子年	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	北内田村	寛政四年壬子年	南無阿彌陀佛	竹瀝之住	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛
天保十己亥孟秋吉且	元文二丁巳天八月廿九日	天明三癸卯年	寛政四壬子年	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛
198	150	135	95	70	80	95	99	83	70	175	112	71	112	200	100	60	96	100	101	103	125	148	167	134	185	96	120	74

119	里山辺	荒町	荒町公民館前	享保20	1735	(サ)享保二拾乙卯三月十五日／キ リク／南無阿弥陀佛／サク奉供 養庚申念佛講同行		113
118	里山辺	兎川寺	兎川寺境内	寛政8	1796	寛政八丙辰年／南無阿弥陀佛／村中		113
117	里山辺	兎川寺	兎川寺境内西	明和5	1768	明和五戊子年／南無阿弥陀佛／三月 日 供養塔		97
116	里山辺	薄町	前々岐水神社	寛政12	1800	南無阿弥陀佛	當村女講中／寛政十二庚申天四月	185
115	里山辺	薄町	東の道端	元文3	1738	元文三戊午天(キリク)南無阿弥 陀佛／二月十五日施主村中	願主誓心	140
114	里山辺	上金井	南の十字路	不明	-	南無阿弥陀佛		80
113	里山辺	藤井	沢	寛政10	1798	寛政十戊午／南無阿弥陀佛／二月十 日		83
112	里山辺	藤井	藤井谷あたら	寛政11	1799	南無阿弥陀佛／龍雲谷講書	寛政十一己未歳／孟夏吉且	187
111	里山辺	湯の原	市宮駐車場北	宝永5	1708	宝永五戊子天 念仏講中／南無阿弥 陀佛／□十四日□十六人		137
110	里山辺	湯の原	市宮駐車場北	元文2	1737	元文二丁巳歳 念仏供養／南無阿弥 陀佛／二月廿八日 講中十四人		120
109	里山辺	湯の原	(南宮三又路)	宝暦10	1760	南無阿弥陀佛	(右)寶暦十庚辰天 (左)女中／二月吉日 同行十六人	110
108	里山辺	下金井	業師堂境内	嘉永6	1853	南無阿弥陀佛／全久吉文敬書團	下金井村／嘉永六癸丑年三月	182
107	里山辺	下金井	業師堂境内	寛政12	1800	南無阿弥陀佛／同行七人	寛政十二庚申／五月日	115
106	中山	千石	千石垣原牧跡	享和2	1802	南無阿弥陀佛／龍蟠谷講書／千石邑 北側 善光寺	享和二千戊年 仲春上流日	131
105	中山	水尾入り	北宮の上公民館	不明	-	(林字)南無阿弥陀佛		75
104	中山	町村	栄珠庵	享保3	1718	(キリク)(サ)(サク)享保三戊戌 天同行／南無阿弥陀佛／十月十四日 十九人		143
103	中山	堂	名木太子	安永3	1774	安永三天 願主女／南無阿弥陀佛／ 十一月日 十八人		112
102	中山	中山西越	鎌田池南側	宝暦13	1763	宝暦十三癸未／南無阿弥陀佛／初夏 月念仏講中		135
101	中山	鳥内及洞	J A中山支所	不明	-	善一信光／一信南無阿弥陀佛(花押) 講中		164
100	中山	行応寺	行応寺跡中山	文化5	1808	文化五戊戌／南無阿弥陀佛／辰十月 日 講中		194
99	中山	行応寺	行応寺跡中山	不明	-	南無阿弥陀佛		129
98	中山	行応寺	行応寺跡中山	不明	-	南無阿弥陀佛		95
97	中山	行応寺	行応寺跡中山	不明	-	南無阿弥陀佛		75
96	中山	行応寺	行応寺跡中山	安永3	1774	安永三天 供養塔／南無阿弥陀佛／ 十一月日講中二十六人		106
95	中山	箱井丸山	箱井権現東側	安永5	1776	安永五丙申天／南無阿弥陀佛／十月 十五日		88
94	中山	箱井丸山	箱井公民館前	文化13	1816	善光寺／南無阿弥陀佛／当村／柏木 廿八人	文化十三年丙子二月 日	160
93	中山	上和泉	八幡神社下	寛政8	1796	寛政八丙辰仲春日上和泉村中／南無 阿弥陀佛／善光寺大勧進念佛供養		145

145	岡田	山浦	西安土バス停北 道端	天保5	1834	當庵開祖／生安寺廿三世長松院娼譽 貞好順阿了壽法尼／南無阿弥陀佛精 養(花押)／智達院解譽静通了阿惠周 法尼	天保五甲午星一月造建之	169
144	岡田	山浦	矢作墓地	寛政6	1794	南無阿弥陀佛	(妻)奉願禮大神宮七度富士浅間山／善光寺 六十六度高野山一度／四國八十八所西國 三十三所 (左)奉供養專修念佛千億萬遍／日課念佛 二億五百萬遍／光明真言百萬遍 (右)寛政六甲寅年五月／西村豊長造立	202
143	岡田	伊深	峠下茶屋跡	不明	-	まみち 右 善光寺／南無阿弥陀佛／左 井深村／西村九平治		85
142	入山辺	大藁沢	大藁沢道端	寛政12	1800	寛政十二庚申年／南無阿弥陀佛／二 月日 原中		90
141	入山辺	原	原バス停西	寛政12	1818	南無阿弥陀佛		165
140	入山辺	三反田	大手坂	文政元	1824	南無阿弥陀佛／無の庵書	文政元年戊寅八月／三反田／山口講中	162
139	入山辺	駒越	道端公民館東	文政7	1824	南無阿弥陀佛	文政七甲申年／仲春吉且／駒越邑	110
138	入山辺	千手	道祖神隣	不明	-	南無阿弥(以下剥落)		171
137	入山辺	中村	中村入口	文化7	1810	南無阿弥陀佛／龍蟠谷講書	文化七庚午歳／北入村／夷則吉且	171
136	入山辺	東桐原	旧海岸寺境内	元文4	1739	南無阿弥陀佛	元文四己未二月十八日／願主／施主／親叟 了心	160
135	入山辺	東桐原	旧海岸寺境内	元禄3	1690	元禄三庚午年／南無阿弥陀佛／六月 吉日 十七人		100
134	入山辺	東桐原	桐原バス停付 近 県道端	文化3	1806	文化三丙寅年／南無阿弥陀佛淨心法 印／十二月十日		65
133	入山辺	西桐原	桐原善光寺	寛政2	1790	寛政二庚戌天(キリク)南無阿弥 陀佛／光明真言／各百万遍供養塔／ 二月十五日 桐原村中		150
132	入山辺	西桐原	大門四辻	文政5	1822	南無阿弥陀佛	文政五壬午歳／五月穀且	150
131	入山辺	橋倉	村人口三又路	享保17	1732	(キリク)(サ)(サク)享保十七 年／南無阿弥陀佛／子十日		100
130	入山辺	橋倉	村の入口(坂)	享和4	1804	南無阿弥陀佛／隆阿	享和四甲子天二月吉日	175
129	里山辺	大高崎	横 大高崎公民館	寛政9	1797	寛政九／南無阿弥(下部埋没)		81
128	里山辺	大高崎	横 大高崎公民館	享保	-	享保／南無阿弥陀佛		82
127	里山辺	林	地 林公民館北墓	寛政元	1789	南無阿弥陀佛	(右)寛政元己酉年 (左)小松村女講中	116
126	里山辺	南小松	北側 南小松公民館	天保3	1832	南無阿弥陀佛	天保三壬辰歳三月／南小松村中	159
125	里山辺	北小松	善光寺 宮坂家住宅北	不明	-	南無阿弥陀佛／空居	(右)右やまへゆみち (左)小松村女講中	134
124	里山辺	北小松	善光寺 宮坂家住宅北	寛政9	1797	南無阿弥陀佛／蟠谷龍講書	寛政九丁巳年／孟夏吉且	186
123	里山辺	西荒町	舟倉前	不明	-	南無阿弥陀佛		96
122	里山辺	西荒町	山辺中学校の 側墓地	不明	-	南無阿弥陀佛		43
121	里山辺	荒町	山辺中学校東 側の墓地	文政3	1820	南無阿弥陀佛／常安東流書	主 當村中	167
120	里山辺	荒町	荒町公民館の 南の墓地	不明	-	南無阿弥陀佛	(サ)文政三辰四月／爲 俗名久五郎／施	82

166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	
本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷	本郷
大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村	大村
玄向寺参道	玄向寺墓地	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前	玄向寺本堂前
天保11	安政5	天保8	文化8	文化12	寛延4	寛政12	正徳5	享和3	寛政3	享保14	享保16	延享4	天明	天保13	寛政13	天明4	天明4	天明4	天明4	天明4	天明4
1840	1858	1837	1811	1815	1751	1800	1715	1803	1791	1729	1731	1747	-	1842	1801	-	1767	-	-	-	1829
南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛
天保十一年庚子年十月廿一日	安政五戊午年十一月建之	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日	天保八西八月佛日
181	145	128	180	135	136	186	127	196	112	85	174	91	108	111	140	110	115	80	146	240	

192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167
市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地
西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部	西部
堂前	前	宮内	宮内	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓
文化5	文化元	延宝8	貞享2	不明	文政2	不明	元文6	不明	延享3	延宝8	延宝8	元文5	不明	明和4	延宝8	元禄6	寛永17	天保6	寛政9	不明	延宝7	寛政7	元禄3	貞享2	元禄5
1822	1804	1680	1685	-	1819	-	1741	-	1746	1680	1680	1740	-	1767	1680	1693	1640	1835	1797	-	1679	1795	1690	1685	1692
南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛	南無阿彌陀佛
文政五年壬午三月吉日	文化元甲子八月時正日	延宝八年八月	貞享二年乙丑年十月十五日	不明	文政二年	不明	元文六年	不明	延享三年	延宝八年	延宝八年	元文五年	不明	明和四年	延宝八年	元禄六年	寛永十七年	天保六年	寛政九年	不明	延宝七年	寛政七年	元禄三年	貞享二年	元禄五年
123	158	110	115	85	47	90	146	120	134	62	90	130	(80)	84	95	94	300	119	176	164	73	135	109	113	226

218	市街地	南部	高宮郵便局西	延宝8	1680	日	延宝八〇〇〇南無阿彌陀仏	11月三	80
217	市街地	南部	笹部 墓地	宝永8	1711	日	キリク之南無阿彌陀仏	念仏講塔	113
216	市街地	南部	松本村役場跡	寛保4	1744	彌陀佛	二月佛涅槃日	当村女講中	85
215	市街地	南部	広正寺境内	寛文9	1669	佛念仏講衆	暹通三界横括九	立	135
214	市街地	南部	広正寺境内	寛文9	1669	佛念仏講衆	暹通三界横括九	立	145
213	市街地	南部	広正寺境内	寛文9	1669	佛念仏講衆	暹通三界横括九	立	145
212	市街地	南部	広正寺山門脇	宝暦7	1757	寶暦七丁丑天	中條小島中	南無阿彌陀佛	191
211	市街地	南部	中条橋南上手	明和2	1765	佛	十一月日	明和七庚寅天十月十九日	70
210	市街地	南部	分銅町地蔵堂	文化4	1807	文化四丁卯星九月日	南無阿彌陀佛	明和七庚寅天十月十九日	88
209	市街地	南部	前	明和7	1770	南無阿彌陀仏		明和七庚寅天十月十九日	88
208	市街地	東部	自性院境内	不明	-	南無阿彌陀仏			107
207	市街地	東部	神田保育園裏	寛政元	1789	吉日	寛政元己酉年	南無阿彌陀佛	110
206	市街地	東部	内	文政12	1829	南無阿彌陀佛	徳住(花押)	文政十二己丑天九月日	90
205	市街地	東部	内	安永2	1773	南無阿彌陀佛		安永二天七月	80
204	市街地	東部	二丁目十字路	元禄		元禄			96
203	市街地	東部	廣明寺境内	寛政10	1798	寛政十戊午年	南無阿彌陀佛	二月	111
202	市街地	東部	廣明寺境内	延宝5	1677	延宝五丁	南無阿彌陀佛	已八月廿二日	100
201	市街地	東部	跡	不明	-	南無阿彌陀佛			130
200	市街地	東部	跡	貞享3	1686	日	貞享三	南無阿彌陀佛	105
199	市街地	東部	博勞町十王堂	貞享4	1687	南無阿彌陀佛	清月	貞享丁卯	120
198	市街地	東部	浄林寺境内	不明	-	南無阿彌陀佛			280
197	市街地	東部	善昌寺墓地	天保4	1833	南無阿彌陀佛	徳住(花押)	天保四癸巳年五月穀旦	130
196	市街地	東部	善昌寺山門	文化2	1805	南無阿彌陀佛	清水	講中	85
195	市街地	東部	前十字路	寛政3	1791	寛政三辛未天九月日	南無阿彌陀佛		120
194	市街地	東部	林昌寺墓地	延宝9	1681	南無阿彌陀佛	四十八夜	延宝九	(50)
193	市街地	東部	戸田家廟園北	不明	-	キリク之南無阿彌陀仏	ひだりゆ		

247	四賀	横川日向	横内家墓地	延宝7	1679	南無阿彌陀佛	有開性連	117	
246	四賀	横川日影	境内	寛政12	1800	南無阿彌陀佛		(96)	
245	四賀	横川日影	中屋敷薬師堂	享保19	1734	南無阿彌陀佛	無儀法春	(60)	
244	四賀	原山	上平コカケ	不明	-	南無阿彌陀佛		131	
243	四賀	金井	本村	延享元	1744	延享元	南無阿彌陀佛	10月六日	80
242	四賀	金井	不動院前	寛保3	1743	南無阿彌陀佛	百万遍供養塔		124
241	四賀	兩瀬	十王堂	明和5	1768	南無阿彌陀佛		明和五戊寅二月	98
240	四賀	兩瀬	十王堂	享保20	1735	佛	十一月日	同行十四人	155
239	四賀	小岩井	観音堂境内	寛政7	1795	南無阿彌陀佛		當邑 講中	78
238	四賀	反町	堤堂跡	寛政5	1793	南無阿彌陀佛		反町念仏講中	125
237	四賀	刈谷原町	洞光寺入口	享保5	1720	南無阿彌陀佛		光明真言 供養講	120
236	四賀	七風	和平	宝暦7	1757	南無阿彌陀佛		宝暦七丑歲十月十五日	116
235	四賀	七風	端	不明	-	南無阿彌陀佛		七風村 念仏講中	110
234	四賀	赤怒田	公民館下	宝暦4	1754	南無阿彌陀佛		宝暦四年戊十月日	196
233	四賀	赤怒田	大天白社南	不明	-	南無阿彌陀佛			65
232	四賀	赤怒田	鳥居場東	文政6	1823	南無阿彌陀佛		念仏講 小瀬中	124
231	四賀	山町	宮ノ入	弘化2	1845	南無阿彌陀佛		殿野入村中	140
230	四賀	殿野入金	安神社境内	不明	-	南無阿彌陀佛			107
229	四賀	殿野入金	花見木戸子	不明	-	南無阿彌陀佛			102
228	四賀	保福寺町	下町墓地内	不明	-	南無阿彌陀佛			123
227	四賀	保福寺町	下町堂跡	寛文13	1673	南無阿彌陀佛	暹通三界	括九居	105
226	四賀	保福寺町	下町堂跡	不明	-	南無阿彌陀佛			153
225	四賀	保福寺町	下町堂跡	寛政11	1799	南無阿彌陀佛			146
224	市街地	南部	同墓地	元禄2	1689	南無阿彌陀佛			118
223	市街地	南部	並柳薬師堂共	不明	-	南無阿彌陀佛			93
222	市街地	南部	並柳薬師堂共	不明	-	南無阿彌陀佛			165
221	市街地	南部	出川大慈堂南	不明	-	南無阿彌陀佛			50
220	市街地	南部	出川公民館前	享保12	1727	南無阿彌陀佛			135
219	市街地	南部	場跡碑の隣	寛政12	1800	南無阿彌陀佛			160

275	274	273	272	271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248		
奈川	奈川	奈川	安曇	安曇	安曇	安曇	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀		
黒川渡	寄合渡	寄合渡	大野川	稲核	島々	大野田	中北山	東北山	東北山	井刈	落水	岩井堂	宮本	本町	板場	板場	取出	取出	六沢	長越	長越	召田	召田	矢久	会吉	横川日向	横川日向		
小原	公会堂前	公会堂前	慈照寺門前	守桂寺墓地	島々共同墓地	大野田堂前	菅ノ田	鬼落の墓地	鬼落の墓地	倉掛峰	桐原家墓地	観音堂石横	薬師堂跡西	廣田寺大門	海野家墓地	集落北	浄雲寺入口	田中堂跡	岩田寺墓地	瑞泉寺墓地	薬師堂跡	中島家墓地	薬師堂入口	薬師堂入口	地	横内家墓地	横内家墓地		
不明	不明	宝曆3	不明	安政3	文久3	元文2	文化4	不明	不明	弘化3	弘化2	元禄2	文政13	万延元	享保4	不明	享保6	安政元	寛保4	正保4	寛延4	不明	享保20	享保16	享保16	元禄2	不明		
-	-	1753	-	1856	1863	1737	1807	-	-	1846	1845	1689	1830	1860	1719	-	1721	1854	1744	1647	1751	-	1735	1774	1731	1689	-		
南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	庚申/南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏/妙哲行者書	南無阿弥陀仏/妙哲行者書(落款)	元文二年/南無阿弥陀仏/丁巳七月日/村中	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏/供養塔	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	
					(右文久三癸亥年卯月建之)		月念佛供養塔 小林/文化四卯十一月日			願主 信譽抱元比丘/□□己巳四月十日	弘化三年丙午星三月十五日	桐原甚五郎/弘化二己九月	元禄二己巳六月十八日	増上寺五十四世大僧正□□村中/文政	会田驛 施主 横内善左工門梅女/萬延元 庚申歲十月佛歡喜日	保四己亥天五月佛生日	為 白他平等徳主安楽也 願主 白蓮/享	※磨滅激しく不鮮明	右邊立者前遊同行男女□□□□也 全法界 平等利益同行二十八人(外)享保六辛四月朔日	□□□□延元子/安政元甲寅九月十九日	願主 現住別法了傳和尚 念弥陀佛即念諸佛 □念佛人即身成佛/寛保四子龍舎四月十五日	宗參信士 施主 敬白/正保四歳八月十五日 ※墓石	区中/寛延四千年	乃至法界 平等利益 願主 正譽覚心比丘/享保廿卯天六月	□室了□法尼/安永三年四月廿八日 ※碧塔	念佛同行 一百人余/享保十六辛亥天四月吉日	念佛同行 一百人余/享保十六辛亥天四月吉日	念佛同行 一百人余/享保十六辛亥天四月吉日	念佛同行 一百人余/享保十六辛亥天四月吉日
			53		152	89	85	113	113	85	65	136	142	138	162	88	280	105	126	85	115	97	56	47	150	87	96		

302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276	
波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	波田	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川
16区	14区	12区	9区	9区	9区	9区	8区	8区	8区	7区	7区	7区	4区	1区	南大妻	南大妻	上大妻	横沢	南北条	南北条	下角	下立田	下立田	上立田	上立田	上立田	
前上海渡公民館	堂	上波田阿弥陀	横町江	音広場	中波田新田観	新田中江	越村	古畑家墓地前	百瀬家墓地	大墓場前	鎌倉家墓地	薬師堂	上島お堂跡	三澤真光寺	光入寺跡	光入寺跡	小松墓地	安養院入口	八幡原	大宮南江	おかも原墓地	公民館北	公民館北	三太夫屋敷跡	三太夫屋敷跡	立田坂	
文政10	元禄4	嘉永4	元禄8	不明	寛政8	弘化3	文化11	文化10	元禄8	寛政5	寛延2	享保12	寛政8	安永9	貞享5	貞享4	不明	享保12	嘉永7	安政3	元禄2	寛政12	天和4	寛政4	天保14	寛政9	
1827	1691	1851	1695	-	1796	1846	1814	1813	1695	1793	1749	1727	1796	1780	1688	1687	-	1727	1854	1856	1689	1800	1684	1792	1843	1797	
南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	無阿	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏
文政十丁亥天十月十五日/當村中	元禄四年三月十一日	嘉永四辛亥三月立之	元禄八年三月		寛政丙辰年十一月十四日/女中	弘化三年是舍丙午夏五/越村念佛講中	文化十一戌年/九月十七日/原村講中	文化十一年十一月	元禄八年三月	寛政五癸丑癸十月十八日/中下女中二十五	寛延二年	享保十二丁未十月八日/當村善男善女百三拾五人念佛講中 中波田下波田新田村水上	寛政八丙辰四月/比丘大圓書 善光寺別當	安永九庚子年十一月十五日/念佛講中	為庚申供養菩提也 敬白 同行二十八人	為庚申供養菩提也 敬白 同行二十八人		心登助給 已上	一切檀越二世安楽/享保十二丁未歳十月十九日/梓川ヨリ二百人ニテ引	嘉永七甲寅更衣吉辰/南郷中	北村中	元禄三年九月朔日/安政三丙辰四月再建	寛政十二庚申年十月吉日/當村念佛講中	寛政四壬子年十一月吉日 講中	天保十四卯三月吉日/阿州徳嶋/願主 唯	天保十四卯三月吉日/阿州徳嶋/願主 唯	天保十四卯三月吉日/阿州徳嶋/願主 唯
264	200	175	50	55	106	143	183	154	56	130		123	180	110	98	97	128	194	123	82	100	100	109	99	131	109	

72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45		
四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	市街地	
西宮	西宮	岩井堂	本町	板場	取出	藤池	長越	会吉	横川日向	横川日向	刈谷原町	七嵐	赤怒田	赤怒田	赤怒田	山町	殿野入金	保福寺町	保福寺町	南部	南部	南部	東部	東部	東部	東部	西部		
本郷家墓地	本郷家墓地	無量寺大門	廣田寺大門	海野坂登り口	浄雲寺参道	薬師堂跡	薬師堂跡	口鳥居下	天白社参道	乞食岩 道端	乞食岩 道端	洞光寺入口	七嵐公民館東	中木戸集落東	北赤怒田公民館	花見木戸子安神社境内	常光寺墓地内	保福寺参道	号南側	柳橋南一信	廣正寺山門脇	西渚本村公民館	神田駒場共同墓地	宗徳庵境内	廣明寺境内	念采寺墓地	善昌寺境内	放光寺境内	
不明	文化14	延享5	寛政4	明和9	寛政元	文化7	文化4	文政13	文化12	天保4	弘化2	弘化4	弘化4	弘化4	弘化4	弘化4	弘化4	弘化4	天保13	天明5	天明5	慶応2	弘化2	明和6	文政10	享和3	寛政4		
-	1817	1748	1792	1772	1789	1810	1807	1830	1815	1833	1845	1847	1868	1847	1847	1847	1847	1847	1842	1785	1866	1827	1845	1769	1827	1803	1792		
歎佛供養塔	念佛百万個供養	念佛六百万個供養塔	歎佛供養塔	念佛三百万個供養	(ア)日課念佛供養塔	念佛供養塔 邑講中 午年十月吉日	南無念佛供養	月念佛供養	念佛二億九百万七千返供養塔	念佛供養塔 / 唱六億二万返 / 當村 須沢佐源治 / 天保四癸巳二月六日	(キリク)念佛百萬遍塔 / 天下泰平	百万遍供養塔	念佛供養塔	百万遍供養塔	百万遍供養塔	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	念佛三百万遍	
願主 本郷元順	文化十四丁丑正月	延享五戊辰正月廿八日	歎佛講中 / 寛政四子年十月吉日	明和九年壬辰四月八日	寛政元西九月朔日 / 願主 井刈村儀助	講中 長越村 藤七 (外関係者多数) / 文化十四卯十月二十五日	(関係者多数) / 文政十三寅三月吉日	文化十二乙亥年 / 十月十九日 / 善光寺参詣 六十六度 / 須沢幾右門代徳 / 徳左門代	文化十二乙亥年 / 十月十九日 / 善光寺参詣 六十六度 / 須沢幾右門代徳 / 徳左門代	中澤弥三右衛門 / 弘化二巳十月日	念仏講中 / 弘化四未十月	弘化四歳丁未七月	慶応四戊辰年二月吉日	順右門(外五名) / 弘化四丁未八月中旬	花見講中 / 弘化四年未十二月	念仏講中 / 弘化四未年	念仏講中 / 弘化四未年	天保十三壬寅年六月 / 講中九人	慶応二丙寅三月吉日	文政十丁亥歳二月 / 村中供養	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中	弘化二乙巳歳 / 十月功 / 西村女人講中
115	102	80	162	73	93	96	142	107	157	150	73	130	103	149	125	111	110	116	150	115	65	150	86	100	110	70	93		

101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73		
波田	波田	波田	波田	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	梓川	安曇	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	四賀	
10区	7区	6区	1区	氷室	氷室	横沢	横沢	北北条	北北条	小室	小室	上立田	田屋	田屋	八景山	鳥々	東北山	井刈	井刈	井刈	井刈	落水	落水	落水	西宮	西宮	西宮	西宮		
中波田古城	薬師堂	北原一本松	三瀧具光寺	衣堂	衣堂	田中道祖神向	東下	北北条墓地	北北条墓地	小室町会下村道祖神上	阿弥陀堂前	新屋墓地	公民館前	公民館上	滝見堂	鳥々共同墓地	松留川 安曇	下村辻	橋北 上井刈 明神	橋北 上井刈 明神	橋北 上井刈 明神	桐原家墓地	桐原家墓地	集会场横	滝沢家墓地	滝沢家墓地	和合堂墓地	久保家墓地		
寛政7	文政5	明和3	不明	明和9	文化15	天保9	天保6	元禄3	明和4	寛政2	寛政8	天保13	寛政11	寛政元	安永2	元文2	寛政元	寛政3	寛政4	寛政3	天明7	弘化3	享和3	天明8	文化元	文政7	享和元	文化14		
1795	1822	1766	-	1772	1818	1838	1835	1690	1767	1790	1796	1842	1799	1789	1773	1737	1789	1791	1751	1743	1787	1846	1803	1788	1804	1824	1801	1817		
念佛供養塔	念佛供養塔	念佛供養塔	梵字	念佛普供養碑	念仏供養塔	百萬遍供養塔 天下和順 / 日月清明	百萬遍供養塔	南無阿弥陀(以下欠) 元禄三年 / 九月朔日	庚申供養塔 / 念佛五百萬遍 北村中	念佛百万遍塔 寛政二庚戌歳 / 三月十五日	念佛百万遍塔 寛政十一己未歳 / 三月吉日 / 田屋邑 / 世話人藤四郎	百万遍供養塔	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	善男女若千人同志 / 四十九万念仏塔 / 元文二年巳二月 / 了立之	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	念佛百万遍	
寛政七乙卯年三月十五日 / 當邑講中	文政五壬午年四月八日 / 當村講中	明和三丙戌年十一月月中旬日 / 當村講中	奉供養念佛	明和壬辰年四月八日 當郷本邑講中 / 善男善女	文化十五戊寅三月日 / 本村 / 溝中	天保九戊戌年二月十四日 願主 高島傳兵	天保六未歳 / 八月八日	明和四丁亥年十一月吉日	幸右門 / 造主 善女人中	中村 / 願主 藤左門内 / 義兵内 / 忠五門内 / 仁右門内	寛政八丙辰年 / 二月十四日 / 當村 願主	川越重左衛門	寛政元西天 / 十月吉日	川越重左衛門	※釘念仏	願主 山田定右衛門 同庄次良 / 寛政元年己酉年	下呂講中 / 寛政三辛亥年十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日	願主 宗參 / 寛政四未十月日
150	180	124	80	113	95	74	159	130	125	103	72	91	83	94	100	90	90	90	90	90	75	115	87	68	69	104	80			

念仏講中が建立した石造物（名号塔・念仏供養塔以外）

No	地区	場所	建立年	種別	陰刻銘	高さ (cm)
24	寿	小池	元禄6	如意輪観音	元禄六癸酉 小池村／念仏講中	80
23	寿	赤木	享和2	如意輪観音	享和壬戌年／□月日 念仏講中	60
22	芳川	村井	1767	三部妙典一万部供養塔	(右)明和四丁卯年 当町并村々々念仏講中 (左)四月廿七日 誠蓮社 謄抄撰読之	212
21	芳川	野溝	-	地藏菩薩	□□□□七月／念仏講中	74
20	笹賀	巾下	-	六地藏	中小俣 念仏講中	110
19	笹賀	巾下	-	六地藏	下小俣 念仏講中	112
18	今井	堂村	1697	如意輪観音	念仏講中／元禄十□十月十四日	110
17	神林	下神	1734	地藏菩薩	念仏講供養同行四拾人／享保十九甲寅／四月日／下神林村	127
16	神林	川西	1697	如意輪観音	元禄十丁丑年三月吉日／念仏講女二十一人	85
15	和田	太子堂	1770	地藏菩薩	春供養地藏菩薩／明和七／十月四日／太子堂也／念仏講中	110
14	和田	南和田	-	三十三体観音	十六番／真々部村念仏講中	92
13	和田	南和田	-	三十三体観音	西国／廿六番／法花山／東桐原村／念仏講中	88
12	和田	蘇我	1798	六地藏	(白石左より)荒井村／念仏講中／当時／十六世／徳誉大□□／寛政十午年／十二月日	159
11	新村	安塚	1695	石燈籠	(悲)元禄八乙亥歲初秋十五日／北栗林念仏講 (左)為世燈明／最勝福田／常為導師／等無憎愛	220
10	新村	安塚	1794	梵字碑(キリク)	(右)寛政六甲寅年／四月仏誕生日 (左)両村念仏講中	145
9	島立	永田	-	地藏菩薩	永田念仏講中	65
8	島立	町区	1808	聖観音	(右)大乘妙典六十六部／奉唱満念仏百万遍 (左)文化戊辰／歎譽善法尼／八月一日	64
7	島内	平瀬川西	1725	地藏菩薩	(蓮白)念仏講中／女四十六人／享保十二乙巳天／十月四日	116
6	島内	山田	1773	地藏菩薩	念仏講中／安永二巳天十一月日	70
5	島内	青島	1769	如意輪観音	念仏講中／明和六巳丑十一月日	64
4	島内	南中	1768	地藏菩薩	南中村女中／念仏講中／明和五子三月日	64
3	島内	高松	1759	地藏菩薩	宝曆九巳知年十一月日／當村念仏講中建	89
2	島内	高松	1758	地藏菩薩	念仏講當村女中同行／宝曆八戊寅十一月日二十五人	63
1	島内	小宮	1767	地藏菩薩	念佛供養／明和四丁亥十一月十四日	64

102	波田	19区	西	宮地下原工場	不明	-	奉念仏千一百万遍	96
-----	----	-----	---	--------	----	---	----------	----

53	本郷	浅間	大音寺跡墓地	享保15	1730	六地藏	念仏講中／享保十五庚戌年二月廿四日	105
52	本郷	浅間	大音寺跡墓地	享保7	1722	六地藏	念仏講中／享保七壬寅七月廿四日／金剛願	115
51	本郷	浅間	大音寺跡墓地	享保7	1722	六地藏	念仏講中／享保七壬寅七月廿四日／法性地	111
50	本郷	浅間	大音寺跡墓地	享保15	1730	六地藏	享保十五庚戌年二月廿四日／念仏講中	116
49	岡田	東区	普門院跡	不明	-	六地藏	(白石右)念仏講當村 (白石左)念仏蓮若香／譽玄心法子	144
48	岡田	岡田町	蓮台場 児童公園内	享保6	1721	地藏菩薩	(蓮白)嘉永二酉八月／ (蓮白下)奉造立／地藏大土／施主 当町／ 念仏講中／享保七丑天拾月日	166
47	里山辺	林	竹溪庵	延享2	1745	地藏菩薩	念仏講中 林村／延享二	78
46	里山辺	林	竹溪庵	元禄7	1694	如意輪観音	念仏講供養 林村／元禄七 七月十八日	113
45	里山辺	南小松	公民館北側	宝暦13	1763	地藏菩薩	念仏講中女十人／宝暦十三未二月日	93
44	里山辺	南小松	公民館北側	寛政9	1797	地藏菩薩	寛政九丁巳年初冬／念仏供養女人講中	106
43	里山辺	北小松	小松橋北十字路	享保20	1735	聖観音	庚申念仏講中供養兩小松村／享保二十乙卯十一月十五日	98
42	里山辺	北小松	小松橋北十字路	宝暦12	1762	如意輪観音	念仏講中女三十一人／□□十二年午天六月日	99
41	里山辺	上金井	上金井公民館	宝暦11	1761	如意輪観音	宝暦十一辛巳天二月日 三十人／天下泰平念仏供養 ○○中	97
40	里山辺	上金井	竹室橋付近	不明	-	如意輪観音	施主 □□日 念仏講中	61
39	中山	蓮華寺	蓮華寺境内	文化2	1805	六地藏	(白石)奈木島内念仏講	118
38	中山	蓮華寺	蓮華寺境内	文化2	1805	六地藏	(白石)大月北中島念仏講 白姫 和泉村	118
37	中山	蓮華寺	蓮華寺境内	文化2	1805	六地藏	(白石)千石古屋敷念仏講	118
36	中山	蓮華寺	蓮華寺境内	文化2	1805	六地藏	(白石)原海道念仏講中 (裏)十世秀伝代	118
35	中山	蓮華寺	蓮華寺境内	文化2	1805	六地藏	(白石)尾池念仏講中	118
34	中山	蓮華寺	蓮華寺境内	文化2	1805	六地藏	(裏)文化二丙寅五月日	118
33	内田	第5	常楽寺入口	文化9	1812	六地藏	(白石)表 中	110
32	内田	第5	常楽寺入口	文化9	1812	六地藏	(白石)表 講	110
31	内田	第5	常楽寺入口	文化9	1812	六地藏	(白石)表 念	110
30	内田	第5	常楽寺入口	文化9	1812	六地藏	(白石)表 念	110
29	内田	第5	常楽寺入口	文化9	1812	六地藏	(白石)表 主	110
28	内田	第5	常楽寺入口	文化9	1812	六地藏	(白石)表 主	110
27	内田	第2	内田運動公園 南側	宝暦2	1752	如意輪観音	親音講／念仏講／宝暦二壬申歲／二月十八日北内田村	75
26	寿	竹濑	生蓮寺	元禄4	1691	如意輪観音	元禄四辛未年／念仏□□施主五人	74
25	寿	白姫	弥勒堂	明和	-	如意輪観音	念仏講同行／明和□□／八月十七日	80

83	梓川	南大妻	幅下墓地	宝曆13	地藏	念仏講/上大妻/宝曆十三年	50
82	梓川	大久保	金松寺境内	天明4	観音	天明四甲辰十一月日/念佛供養 村女中講	59
81	梓川	小室	阿弥陀堂前	不明	地藏菩薩	念佛供養	47
80	梓川	下角	原墓地	明和7	観音	念仏講中十一人	58
79	梓川	下角	原墓地	安永4	聖観音	原村念仏講	57
78	梓川	杏	金井堂	寛文8	地藏菩薩	念仏講中/寛文八年九月廿日	66
77	梓川	上立田	立田坂	天明4	馬頭観音	石橋供養塔/上町念佛女中	64
76	奈川	田ノ萱	墓地入口	文化5	六地藏	寒念仏村中	
75	安曇	稲核	守桂寺境内西	不明	西国三十三観音 如意輪観音	十三番/念佛講中/世話人/當村/嘉石工門	59
74	安曇	稲核	守桂寺境内南	不明	西国三十三観音 聖観音	廿一番/念佛講中/世話人/當村/忠之丞	59
73	安曇	橋場	橋場諏訪神社前	不明	坂東三十三番 千手観音	卅三/弥助/念佛世話人/八右エ門	62
72	四賀	中北山	普ノ田	寛政11	地藏菩薩	百万遍供養/寛政十一未年	60
71	四賀	執田光	片山 尾根	天保11	云成地藏	念佛講中 女中三十六人 (他関係者名多数/天保十二庚子年)	64
70	四賀	執田光	麻生峰下	宝曆8	観音像	馬頭観音 施主 同行八十二人 念佛講中/宝曆八年戊寅五月	118
69	四賀	板場	堂	明和元	観世音菩薩	念佛講中 同行拾四人/明和元年甲申十月十七日	92
68	四賀	取出	浄雲寺参道	不明	大日如来	牛頭大日如来 念佛供養塔	39
67	四賀	取出	浄雲寺参道	安永5	地藏	當所女人 念佛講中/安永五年十月日	53
66	四賀	長越	業師堂跡	明和3	大師像	念佛 村中同行/明和三丙天九月吉日	105
65	四賀	横川日向	口	天保6	如意輪観音	念佛女講中/天保六年未四月日	140
64	四賀	横川日影	お立符南曲がり角	不明	如意輪観音	念佛女講中/慶應三丁卯天十月吉祥日	118
63	四賀	兩瀬	大門	慶応3	如意輪観音	同行十四人 念佛講 願主 覚心	90
62	四賀	兩瀬	上村八幡社跡	元文4	如意輪観音	念仏講中/慶應三丁卯天十月吉祥日	48
61	市街地	南部	並柳業師堂	享保18	庚申塔	念仏講中	100
60	市街地	東部	墓地	明和4	如意輪観音	享保十八年並柳村/庚申供養碑/天 十月十五日	80
59	市街地	東部	神田保育園裏	寛政8	地藏菩薩	念仏女講中/寛政八丙辰天/三月吉日	105
58	市街地	東部	神田保育園裏	宝曆13	如意輪観音	念仏講中/宝曆十三癸未七月吉日	80
57	市街地	東部	三才業師堂境	不明	如意輪観音	念仏講	83
56	市街地	東部	宗徳庵境内	元文5	地藏菩薩	(カ) 供養念仏講中/元文五年□□天十月	60
55	本郷	玄向寺	玄向寺参道	不明	百体観音	上浅間/七十六/念仏講中	55
54	本郷	玄向寺	玄向寺参道	不明	三十三体観音	(表) 十番/細菅村/正覚院 (左) 小俣村/念仏講中	52



梓川南大妻の如意輪観音像

89	波田	16区	上海渡分館	寛政7	馬頭観音	寛政七卯年六月吉日/念仏女中	51
88	波田	9区	音広場	明和元	馬頭観音	明和元年十二月十八日/當村念仏講女中	65
87	波田	4区	上島お堂跡	宝曆10	地藏菩薩	宝曆十年庚辰三月/願主通養善連 念仏講	135
86	梓川	横沢	安養院入口	寛保3	大乗三經 千部供養塔 天下和順 日月清明	平等利益 寛保三癸亥年/四月十五日 千部三経記 烏志精霊菩提 各二世安楽也 四十八万念佛 當院中興大養萬説和尚百十忌報恩講/導師 十四代助管上人	
85	梓川	南大妻	幅上墓地	不明	如意輪観音	念佛講中	
84	梓川	南大妻	幅上墓地	享保12	地藏菩薩	享保十二年/三月廿四日/念仏講中/同行八人	78



★等順名号塔
●徳本名号塔

引用・参考文献一覧

竹内利美編 『農村信仰誌 庚申念佛篇』 一九四三年

長野県史刊行会 『長野県史』 近代資料編第一〇卷(一) 宗教 一九八二年

本郷村文化財審議委員会 『本郷村文化財調査資料』 第6集 一九七一年

松本市教育委員会 『まつもとの石造文化財』 一九七三〜七九年

波田町教育委員会 『波田町の文化財 波田町の石造物編』 一九七九年

四賀村教育委員会 『四賀村の石造文化財』 一九九二年

梓川村 『梓川村誌』 自然・民俗編 一九九三年

奈川村 『奈川村誌』 民俗編 一九九六年

〔徳川実紀 厳有院殿御実記〕三一卷 (『国史大系』 第十一卷 一九〇二年)

岩下貞融 「善光寺別當傳畧」 (『信濃史料叢書』 第三卷 一九一三年)

『徳本行者全集』 全六卷 山喜房仏書林 一九七五〜八〇年

豊田庸園 『善光寺道名所図会』 臨川書店 一九九八年

池田町教育委員会 『池田町の文化財』 二〇〇三年

飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究所 『上久堅の民俗』 二〇〇六年

松本市立博物館 『播隆展―槍ヶ岳開山とその周辺』 二〇〇八年

松本市教育委員会 『松本のコトヨウカ行事』 調査報告書 二〇一一年

松本市教育委員会 『西善寺の文化財調査報告書』 二〇一一年

宗教法人祐天寺 『寺宝で綴る祐天上人と祐天寺』 二〇〇五年

柳原倶楽部 『柳原倶楽部一〇〇年記念誌』 二〇一三年

新村の宝編集委員会 『新村のまつり』 二〇一五年

堀 一郎 『民間信仰』 岩波書店 一九五一年

宮島 潤子 『信濃の聖と木食行者』 角川書店 一九八三年

大島建彦編 『コト八日―二月八日と十二月八日―』 岩崎美術社 一九八九年

堀 一郎 『民間信仰の形態と機能』 (堀一郎著作集第七卷) 未来社

二〇〇二年

宮島 潤子 「日光山寂光寺釘抜念仏信仰―絵画および石造図像による比較研究

―」 (石塚正英編 『石の比較文化誌』 国書刊行会) 二〇〇四年

塩路 善澄 『徳本行者を慕いて―郷土での足跡―』 青山社 二〇〇五年

西海 賢二 『念仏行者と地域社会―民衆の中の徳本上人』 大河書房 二〇〇八年

黒野こうき 『播隆入門』 まつお出版 二〇一四年

柳田 國男 『念佛團體の變遷』 一九一四年 (『柳田國男全集』 第九卷 筑摩書

房 一九六二年)

曹 圭憲 『「コト八日」の祭祀論的研究―神去来思想による稲作一元論・祖靈

一元論を超えて―』 二〇〇七年

坂本 要 『大念仏と民間念仏の系譜』 (『筑波学院大学紀要』 第9集)

二〇一四年

岡村 庄造 『名号塔の知識』 (『日本石仏協会』 『日本の石仏』 連載)

二〇一〇年)

松本市歴史文化基本構想 文化財調査組織一覽

	地区	組織名
1	第一地区	第一地区公民館歴史文化調査委員会
2	第二地区	第二地区文化財調査実行委員会
3	第三地区	第三地区公民館
4	東部地区	東部地区歴史委員会
5	城北地区	城北地区文化財保存委員会
6	中央地区	中央地区文化財調査委員会
7	安原地区	安原地区公民館
8	城東地区	城東公民館
9	白板地区	白板探検隊
10	田川地区	田川地区歴史文化委員会
11	庄内地区	庄内地区公民館
12	鎌田地区	鎌田地区公民館
13	松南地区	松南地区公民館
14	島内地区	島内地区歴史文化財調査委員会
15	中山地区	中山歴史文化基本構想策定協力委員会
16	島立地区	島立地区文化財調査実行委員会
17	新村地区	新村地区文化財保存会
18	和田地区	和田地区文化財調査委員会
19	神林地区	神林地区文化財調査委員会
20	笹賀地区	笹賀地区文化財調査委員会
21	芳川地区	芳川歴史研究会
22	寿地区	寿史談会
23	寿台地区	寿台町会連合会理事会
24	松原地区	松原地区文化財調査委員会
25	岡田地区	岡田地区文化財調査委員会
26	入山辺地区	入山辺町内公民館長会・山辺歴史研究会・入山辺公民館
27	里山辺地区	里山辺地区文化財調査委員会
28	今井地区	今井地区文化財調査実行委員会
29	内田地区	内田公民館
30	本郷地区	本郷地区歴史文化基本構想策定検討委員会
31	四賀地区	四賀地区歴史文化委員会
32	安曇地区	安曇地区文化財調査委員会
33	奈川地区	奈川歴史文化調査隊
34	梓川地区	梓川公民館・梓川地区町内公民館長会
35	波田地区	波田地区文化財調査委員会

跋

平成二十四年九月、当時中央公民館長の職にあった私は、「松本市で歴史文化基本構想を策定したいが、公民館でも一緒にやってもらえないか」という相談を当時の文化財課長から受けました。話を伺うと、地域の文化財を、指定や登録の有無にかかわらず幅広く捉えて把握し、文化財をその周辺環境まで含めて総合的に保存・活用するとともに、文化財を核とした地域の魅力を今後のまちづくりを活かすための構想ということでした。そして、地域のアイデンティティを形成するためには、地域住民が主体的に取り組むことが大切で、そのためにどうしても公民館の力を借りたいということでした。これは公民館にとっても重要な課題であると認識し、一緒に取り組んでいくことを確認しました。こうして、平成二十五年度から、市内三十五地区の公民館を拠点として、地区内の文化財を把握するための調査が始まりました。

今回策定する、松本市歴史文化基本構想では、これまでに国・県・市の指定を受けている文化財のように、単体で文化財の価値を認められているもののほかも、指定されている文化財と関係の深いものや、たくさん集まると地区の特徴を表現できるものもあるので、調査で把握した文化財を関係の深いもの同士で結び付けて、群として保存の対象としていくという手法に中心をおいています。策定指針ではこれを「関連文化財群」といいますが、これを設定する所までを地区公民館が中心となって取り組んでいくこととし、この三月までを目標に取り組んできました。

しかし、文化財調査に取り組んでいた住民のみなさんには、このまとめの作業はなかなか難しいようで、調査を終えた地区でもなかなか手が付きませんでした。構想策定のスケジュールは、平成二十八年度には、地区ごとにまとめていただいた「関連文化財群」を、松本市全体の「関連文化財群」に統合・整理することとしています。そこで、この「関連文化財群」という考え方を、文化財調査に取り組んでいた住民のみなさんと共有するために実施したのが今回の調査です。

「南無阿弥陀仏」と記した名号塔と、「南無阿弥陀仏」と称える念仏行事、この有形・無形の両方について調査し、名号塔が建立された年代やその時代背景を考えながら、行事の変容をたどってみました。名号塔は仏教に関するものとされ、これまでこうした踏み込んだ調査を行った自治体はあまりないようです。松本市には、「八日念仏」と呼ばれる念仏行事があるので、今回の調査のテーマとして「念仏」を選択しました。

調査の結果として、城下町や松南地区など、石造物を破却されたり、移動させられた歴史から、情報が少なくなっている地域があることがわかりました。また、念仏行事にも様々な側面があり、衰退していくものもあれば、継承されているものもあることもわかりました。残念だったのは、昭和の調査で確認されていた等順が揮毫した名号塔が二基無くなっていたことです。今回の調査でも、等順は天明の飢饉の救済に力をつくし、庶民に慕われていたことが浮かび上がってきました。これまでの「石造物は無くならない」という先入観から脱却し、石造文化財の価値の検証に積極的に取り組んでいかなくてはなりません。

今回の「念仏塔と念仏行事」の調査が、歴史文化基本構想策定にあたっての「関連文化財群」という考え方を理解する例となり、住民のみなさんとともに文化財の保存活用を進める契機となれば幸いです。

平成二十八年三月二十日

「松本の念仏塔と念仏行事」調査報告書

発行日 平成二十八年三月二十日

発行者 松本市教育委員会

〒三九〇・〇八七四

長野県松本市大手三丁目八一三

印刷 精美堂印刷株式会社



文化庁

平成27年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化財を活かした地域活性化事業)